

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

第 8 集 (下)

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡 (4)

1 9 7 8

福岡県教育委員会

福岡南バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

第 8 集 (下)

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡 (4)

序

この報告書は、福岡南バイパス建設事業に伴い、予定路線内の埋蔵文化財の記録保存の措置として、福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託を受けて実施した発掘調査の記録であります。

この報告書の執筆者前川威洋君は、今年 5 月 11 日、宗像郡福間町所在の大門古墳群発掘調査に従事中、不慮の事故に遭遇し永眠されました。

君は、昭和44年に当教育委員会の技師になられると同時に、福岡南バイパス建設にともなう発掘調査に従事されました。今日まで 9 年間にわたって当県の文化財保護に活躍され、その実績は調査報告書や研究論文に明らかであります。

この報告書は、昨52年度に刊行すべく執筆され、一応の完成をみていたのでありますが、諸種の事情から今年度刊行に変更がよぎなくされました。この間、君は完成原稿を再検討し、加筆修正を行っていたところでありました。さらに事故によって一部の資料が焼失いたしましたが、君の遺志を汲む者が参集し、君の考えに添って成稿いたしました。

君の中世期土師器の研究は、昭和44年に実施された浦城跡発掘調査に始まり、前記バイパスが大宰府条坊跡を通過する五条地区遺跡等の調査で深められました。日常の器として使用された土師器は、生活に最も密着したものであることから、当時の生活文化を解明するための基本となるものであります。

この報告書は、君の調査、研究計画のなかで、土師器研究に一応の区切りを画するものであり、刊行後は、君は本来のテーマである縄文時代の研究にもどる予定でありました。

君が、通常の生命を全うされていたとすればいかにばかりの成果をあげられたことでしょうか。そして、当県文化財保護のみならず考古学の発展にどれだけ貢献されたことでしょうか。

君とは、二度と親しく会話することできません。

しかしながら、皆様が中世期の歴史を研究されようとするとき、君の仕事を知らずして過すことはできません。君はここに、永遠の寿命をもって皆様に接するであります。

生前、君に御芳情いただいた方々、発掘調査に御協力いただいた方々に、君にかわって心よりお礼申し上げますとともに、君の御冥福を御祈念いただきますよう重ねてお願い申し上げます。

昭和 53 年 10 月 31 日

福岡県教育委員会

教育長 浦 山 太 郎

例 言

1. 本書は、国道3号線福岡南バイパス建設事業に関連して、昭和46年度から昭和52年に実施した御笠川南条坊遺跡の調査報告である。
2. 調査は、九州地方建設局福岡工事事務所の委託を受けて、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書に関連資料として、昭和52年度に行なった「九州和装学園」建設予定地内遺跡の緊急調査の概要を掲載する。
4. 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

I	編 集 者
II	前 川 威 洋
III	前 川 威 洋
付 I	前 川 威 洋
	馬 田 弘 稔
付 II—1	田 浦 郁 子
II—2	森 田 勉

5. 掲載写真については、九州歴史資料館の石丸洋氏の協力を得た。
6. 本書の編集は、川村博の協力を得て橋口達也が行なった。

本文目次

	頁
I ま え が き	1
II 御笠川南条坊遺跡について	3
III 土師器の分類および編年とその共伴土器について	5
1. 土 師 器	5
1) は じ め に	5
2) 当遺跡における土師器編年の推移	5
3) 各級の遺跡と土師器	6
4) 土師器の器形別変化とその時期	33
5) 小 結	38
2. 磁 器	38
1) は じ め に	38
2) 磁器分類と共伴土師器	39
3) 土師器編年に対する磁器類の対照	42
3. 土 師 碗 類	43
1) は じ め に	43
2) 内 黒 土 器	43
3) 黒 色 土 器	44
4) 瓦 器	45
5) 研 磨 土 器	46
付 I 6 A Y E C K 内関連遺跡の調査	48
一, は じ め に	48
二. 調 査 の 概 要	48
三. 層 位	48
四. 遺 構	48
五. 遺 物	50
1. 土 師 器	50
2. その他の土師碗類	53
3. 磁 器	54
4. 石製品・土製品	57
5. 木 製 品	57

6. ま と め	58
----------------	----

付Ⅱ

1. I－1A以前の土師器について	61
2. 輸入陶磁器にみられる焼台および重ね焼の痕跡について	63

図 版 目 次

図版 1	磁器の焼台・重ね焼部写真 (1)
2	同 上 (2)
3	同 上 (3)
4	同 上 (4)

挿 図 目 次

1 図	大宰府史跡第43次調査出土土器	8
2 図	6 A Y E C K内関連遺跡遺構実測図	49
3 図	3層・4層出土土器実測図	51
4 図	その他の土器碗類実測図	53
5 図	磁器実測図	55
6 図	磁器・緑釉陶器実測図	56
7 図	滑石有（円形）孔製品・陶硯実測図	58
8 図	木製品実測図	59
9 図	筑前国分寺5次調査SK 053 土壇出土土器	62
	大宰府史跡第46次調査SE1340井戸出土土器	62
10 図	湖田窯跡出土匣鉢想定図；定窯出土焼台・匣鉢想定図	64

表 目 次

1 表	当遺跡における土師器分類の推移	6
2 表	土師器・杯の法量推移	34
3 表	土師器・小皿・特小皿の法量推移	35
4 表	6 A Y E C K内関連遺跡出土土師器の法量	52
5 表	6 A Y E C K内関連遺跡出土土師器計測表	54

付 図 目 次

- 付 1 図 御笠川南条坊遺跡上面遺構全図
- 付 2 図 御笠川南条坊遺跡下面遺構全図
- 付 3 図 土師器の分類と編年 (1)
- 付 4 図 土師器の分類と編年 (2)
- 付 5 図 土師器共伴の磁器の分類と編年 (1)
- 付 6 図 土師器共伴の磁器の分類と編年 (2)
- 付 7 図 土師器共伴の磁器の分類と編年 (3)
- 付 8 図 土師器共伴の磁器の分類と編年 (4)
- 付 9 図 土師器共伴の土器碗類の編年

I ま え が き

本編は「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第8集 筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡（4）の考察編として、昭和53年3月31日に発行される予定であった。しかしながら予算上の都合でこの「考察編」は割愛せざるを得なかった。

かかる事情のため昭和53年度に、この本編のための予算を計上し、53年度のはやい時期に発行する計画をたてた。

本編の担当者であった前川威洋氏は、このため新資料を追加・補正し、より充実したものにするため、新年度当初、日夜を分たず努力を重ねていた。その内容は、本編で考察した土師器の分類のうち、Ⅰ－1A期より古い時期の土師器資料の追加と、輸入陶磁器の聚成および焼成時における重ねに関する考察であった。

これら追加・補正されるべき部分はすでにほぼ成稿していたようであるが、前川威洋氏は、昭和53年5月11日未明、福岡県宗像郡福間町の発掘現場で、開発側の宿舎に同宿中、火災のため、全身火傷を負うという痛ましい事故に遭遇し、治療のかいなく同日21時永眠した。

このため、ほぼ完成していた追加・補正すべき原稿・資料等も煙滅してしまい、残されたものは3月時点で完成されていた本編の原稿だけとなってしまった。

このような事情のため、前川威洋氏が追加・補正するつもりであった部分は、解説として、前川威洋氏のよき協力者であった田浦郁子氏が、土師器Ⅰ－1A期より古い時期のものを、歴史時代土師器・磁器等で前川威洋氏とよく討論し、協議し歴史時代土器の編年を共同でおしすすめてきた九州歴史資料館の森田勉氏に、磁器の焼成時における焼き方の問題について解説を付記していただいた。

前川威洋氏の原稿に関しては、以上のことから若干の字句の修正と、明らかに誤りである部分について若干の修正を加えたのみである。いくらかの部分で疑問を感じる表現もあるが、あえてそのままにしなんらの修正も加えていない。かかる事情を考慮され御読いただくよう読者をお願いしたい。

最後に故前川威洋氏の冥福を祈る。

Ⅱ 御笠川南条坊遺跡について

本遺跡は大宰府郭内を構断する御笠川の南に所在し、本来同郭内域については大宰府条坊遺跡と呼称すべきであったろうが、遺跡地は広大であり、本遺跡の発掘調査事業の性格からして第6地点・御笠川南条坊遺跡と称してきた。

本遺跡は、鏡山猛氏による復原条坊（註1）によると、おおむね左郭九条の六・七坊におたる位置であり、発掘調査の目的はこの条坊の区画線の確認であった。6次にわたる発掘調査のうち、3次から6次の調査成果については、順次報告してきたところであるが、第1・2次の成果を報告するにあたり、本遺跡の遺構配置全図を作製し（付1・2図）、これを参照して記述したい。

前述のように、本遺跡の調査の目的は復原条坊のうち、左郭の八条と九条の区画線と同六・七・八坊の区画線の検出・確認であった。6次にわたる調査によって検出された遺構は、建物・柱穴群・井戸・土壇・溝等により構成されている。それぞれの総数は建物7棟、井戸69基、土壇217基、溝35条である。これらの遺構は共伴する土師器によると、Ⅰ-1A類からⅡ-5類にかかる時期、すなわち数世紀の長期にわたる間に設けられたものであり、このうち10世紀前後の時期の遺構がBM地区（本遺跡東部）に多くみられ、以後14世紀前半までの遺構が全域にみられる。

これらの遺跡のうち、条坊区画線を確認でき得るものとして溝があげられる。本遺跡では、溝は大小35条が検出されている。とくに遺跡の東部（3～6次調査）にその多くが検出されている。これらはほぼ南北・東西方向に延びるものが多い。溝は上層面において幅の広いものが多く、下層面には幅の狭いものが多い。条坊区画線の遺存の有無について検討すると、第3次と第6次調査区間に南北に延びる里道があり、これが古くから所在することが伝えられ、条坊区画線となんらかのかかわりがあるものと想定された。このため里道の東西において溝等の遺存の有無が注目された。これにかかわるものとして、SD 304、SD 601、SD 606の南北に並行して延びる3条の溝が検出された。SD 601はSD 501に接続し、SD 606はSD 505に接続するもので、かなり南北に延びる溝であると考えられるが、後者の場合SD 606が南において消失するもので、これについては条坊区画にかかわるものとは考えられがたく、ここではSD 304とSD 601との関係をみた。SD 304の中心線は政庁中軸線から東へ約710m、SD 601は同じく約696mの距離である。SD 601の東側肩部とSD 304西側肩部間は約12.84mである。この両溝間中心線は政庁中軸線より6.5町となり、切りのよい数字ではあるが、この両溝から出土する遺物（土師器）には差異がある。SD 304はヘラ切り底土師器（Ⅰ類）が出土し、SD 601は糸切り底（Ⅱ-4類）の土師器が出土し、このため両溝間には相当な時期差

があり、同時期に存在していたことは考えがたい。また、両溝間には、井戸・土壇・柱穴などが遺存しており、この両溝間が通路とは考えがたい。ゆえにこれが条坊区画線とは考えがたく左郭九条の七坊内における小区画にかかわるものとも考えられるが、断定はできない。したがって条坊区画推定線付近における関連のある溝等の遺構は遺存せず、当遺跡内における復原条坊区画線は確認できなかったといえる。

またSD 301とSD 302の接続したものと、SD 502、SD 602は鉤の手状に曲折する溝であり、この3つの溝は中世にみられる枳形状に巡る溝を想定させるものであって、なんらかの建物の周囲に設けられた溝のように考えられるし、SD 202の大溝にあっては井戸より延びる小溝が接続し、井戸湧水の排水溝としても使用されているようである。

このように溝は他遺構との関連から中世における一般民衆生活にかかわって設けられたものであろう。

註1 鏡山 猛「大宰府都城の研究」風間書房

Ⅲ 土師器の分類および編年とその相伴土器について

(付図3～5の説明)

一般国道福岡南バイパス第6地点「御笠川南条坊遺跡」(通称「五条遺跡」)の発掘調査は昭和46年2月の予備調査に始まり、昭和46年10月の第1次調査を経て、昭和49年8月末で第6次調査を終り、整理・報告は昭和49年度に第5次調査を、昭和50年度に第3次・第4次調査を昭和51年度に第6次調査を行ない、今回の昭和52年度に第1次・第2次調査を整理・報告して全てを無事終了することになり、感慨深く思うと同時に、それを遂行していただいた関係者の方々や支援・助言していただいた多くの方々に感謝し、共に喜びたいと思います。

さて当遺跡から出土した遺構・遺物はすでに報告したように多岐多大であり、特に土師器・須恵器・瓦器・片口・土鍋・磁器・大陸産の雑器・日本産の陶器などの土器は種類・量ともに豊富で、整理の当初、どこから手をつけてよいやら迷うほどであった。それでこれらの土器類の分類からまず手がけ、なるべく単純な一括資料を把握することにつとめた。

1 土 師 器

1) は じ め に

土師器については、その一括資料が全体としてどういう流れをもって変化していくかということに特に注意を払った。さいわいに当遺跡はその点に関しても良好な遺跡で、井戸・土坑・溝・土層などから多くの一括資料を得ることができ、その全体の流れをつかむことが容易であった。すなわち第1にヘラ切り離し底から糸切り離し底への変化であり、第2に一括資料の同一器種の法量の格一化であり、第3に杯・小皿にみられるような大形から小形へ、また小形から大形へのスムーズな変化である。このことを一つの手がかりとして土師器を分類した。

2) 当遺跡における土師器編年の推移

第1回報告時にヘラ切り底の土師器をⅠ類に、糸切り底の土師器をⅡ類に大別し、さらにⅡ類をⅡ-2類からⅡ-5類にまでの4類に分類することができた。第2回報告時にはⅠ類をⅠ-2類からⅠ-4類の3類に分類し、Ⅱ類も新しくⅡ-1類を加えて5類にし、計8類に分類した。第3回報告時には大宰府史跡の発掘調査資料と、君畑遺跡の墓地の副葬品という良好な

資料をも加えて、さらに土師器を細分できたが、ある意味では従来の分類では窮屈になり、Ⅰ－１類を加えてさらにＡ・Ｂに分け、Ⅱ－２類もＡ・Ｂ・ＣにⅡ－３類もＡ・Ｂ・Ｃに分け、計１４類に分類せざるを得なくなった。

今回の報告では、さらに従来のⅠ－３Ａ類とⅠ－３Ｂ類との間に良好な資料が出現して１類を設けざるを得なくなり、それを新Ⅰ－３Ｂ類とし、仕方なく従来のⅠ－３Ｂ類を新Ⅰ－３Ｃ類に、従来のⅠ－３Ｃ類を新Ⅰ－３Ｄ類にしてその代表例である大宰府史跡第３８次調査ＳＤ ８６０溝の資料のとりえ方にも変化をきたしてきている。Ⅱ類の方も従来Ⅱ－５類としていたもののうちＳＫ ３３３土壇出土のものをⅡ－５Ａ類に、ＳＥ ５１６井戸出土のものを新しくⅡ－５Ｂ類

とし、その後に続くものとしてⅡ－６類を新設し計１７類となってしまった。ある面ではあまりにも複雑になりすぎたかもしれないが、これは土師器分類と編年についてのひとつの見通しとして理解していただきたい。ただしそれらがすべて解決したのではなく、その中にはまだ多くの疑問や矛盾を含んでいて、これらを一つずつ解決しなければならないことはいうまでもない。当遺跡の報告が最終を迎えるにあたって、とりあえず今までに分類・編年をしてきたことをここで取りまとめ、その内容を説明し、報告書を理解していただく手助けにでもなれば幸いである。

３) 各類の遺跡と土師器

ここでは一応各類ごとにとりあげ、その資料を説明し、各類の特徴を列記するとともに、疑問点もすなおに出してみたい。なおⅠ類はヘラ切り底の土師器で、Ⅱ類は糸切り底の土師器である。

南バイパス 関係報告書	第２集 1975・３	第３集 1976・３	第６集 1977・３	第８集 1978・３
Ⅰ 類 (ヘ ラ 切 り 底)			Ⅰ－１Ａ	Ⅰ－１Ａ
			Ⅰ－１Ｂ	Ⅰ－１Ｂ
			Ⅰ－２Ａ	Ⅰ－２Ａ
		Ⅰ－２	Ⅰ－２Ｂ	Ⅰ－２Ｂ
			Ⅰ－２Ｃ	Ⅰ－２Ｃ
			Ⅰ－３Ａ	Ⅰ－３Ａ
				Ⅰ－３Ｂ
		Ⅰ－３	Ⅰ－３Ｂ	Ⅰ－３Ｃ
			Ⅰ－３Ｃ	Ⅰ－３Ｄ
Ⅱ 類 (糸 切 り 底)		Ⅱ－１	Ⅱ－１	Ⅱ－１
	Ⅱ－２	Ⅱ－２	Ⅱ－２	Ⅱ－２
	Ⅱ－３	Ⅱ－３	Ⅱ－３	Ⅱ－３
	Ⅱ－４	Ⅱ－４	Ⅱ－４	Ⅱ－４
	Ⅱ－５	Ⅱ－５	Ⅱ－５	Ⅱ－５Ａ
				Ⅱ－５Ｂ
				Ⅱ－６

１表 当遺跡における土師器分類の推移

I 類 土 師 器

当遺跡からは実際にはⅠ－ⅠA類からしかまとまって出土してはいないが、流れを理解するために、これより古いと考えられている土師器から説明していきたい。なお、土師器の名称として、杯と小皿との関係であるが、杯が小形化して小皿となると考えるのが妥当であろうが、ある時期に両者が出現する時から小さい方を小皿とよび、大きい方を杯というよびかたにした。またⅠ類の従来高台付小皿としていたものは深さもあまりないため托とした方が良いと思われる。

Ⅰ－ⅠA類以前の土師器

Ⅰ－ⅠA類直前の土師器としてよいかどうかは検討の余地はあるが、一応次のような土師器が考えられる。

大宰府史跡第43次調査SE1081井戸出土土器（1図）

ここからは須恵器（杯蓋・高台付椀）、土師器（皿・耳皿・杯・杯蓋・高台付椀・鉢）、内黒土器、越州窯系青磁が出土している。

須恵器の高台付椀（2）は直線的に立ち上がる体部はわずかに外反し、底部の端に低い高台を付し、外見は体部と高台が直線的に一体をなしている。

〔皿〕皿形の器形のものが多いのも一つの特徴で、口径14.5～15.8cm、器高1.8～2.3cmである。内面にヘラミがきが施されているものもある。（3～6）

〔耳皿〕高台付の耳皿で、高台内に「真」の墨書がある。

〔杯〕口径12.7～13.8cm、器高3.0～3.6cmで、ヘラ切り底で、内外面をヘラミがきした精製土器と横ナデだけの粗製土器とがあるが、法量に差はない。ほかに口径15.0～16.2cm、器高3.7～4.2cmのやや大形でヘラミがきされた精製の杯もある。赤茶色を呈し、硬質に焼成されている。

〔杯蓋〕天井部をヘラ削りし、体部はナデ調整した後にヘラでミがいている。太い凹線で天井部と体部とを区切っている。口縁内側に浅い凹線をめぐらしている。口径19.4cm、器高3.6cmと大きい。

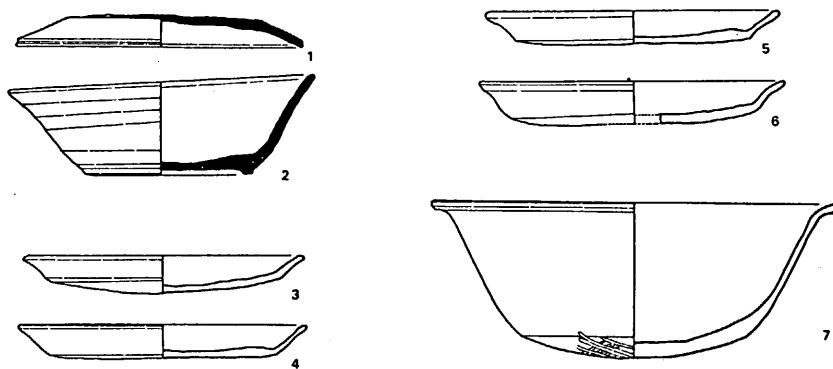
〔高台付椀〕体部に丸味をもつものもあるが、おおむね直線的に立ち上がる。底部の端にやや開き気味の高台をつけている。内外面はヘラミがきがされ、硬質に焼成され、赤茶色を呈している。

〔鉢〕口縁部の大きく外反する鉢で、体部はていねいな横ナデが施され、底部はヘラで乱雑に削られている。（7）

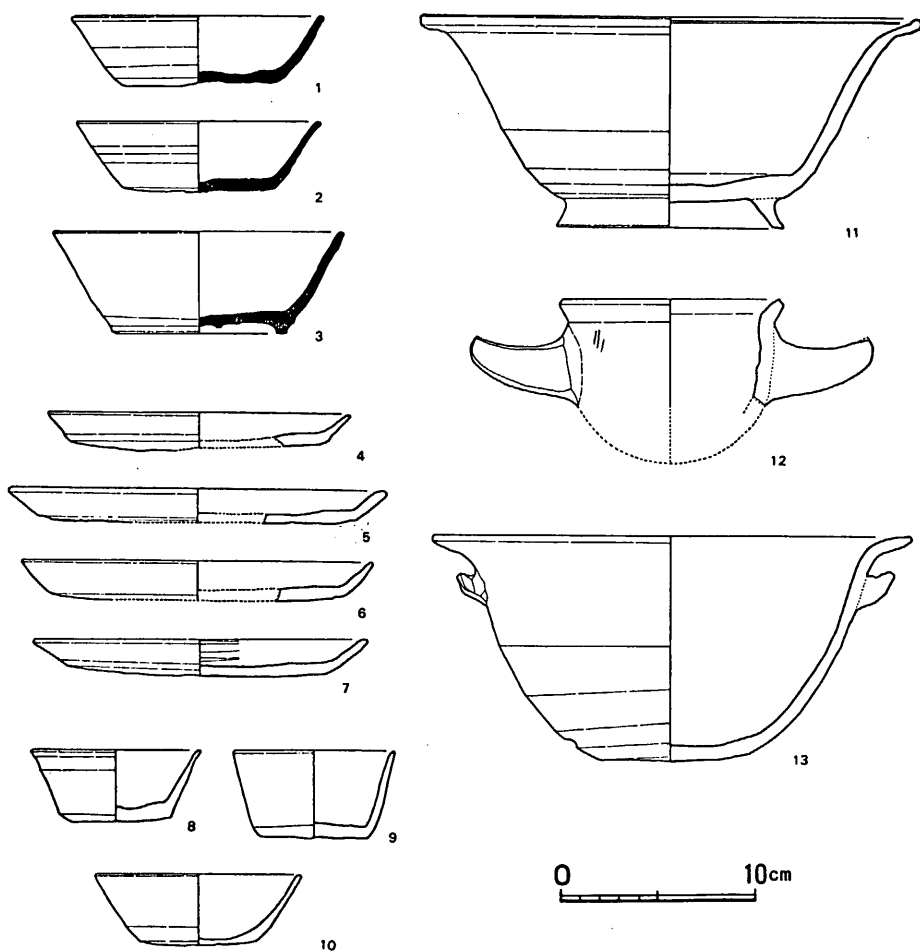
大宰府史跡第43次調査SK1084土壇出土土器（1図）

ここからは須恵器（杯・高台付椀）、土師器（皿・杯・杯蓋・高台付椀・鉢）、奈良三彩が

SE1081



SE1084



1図 大宰府史跡第43次調査出土土器 (1/4)

出土している。

須恵器としては杯（1・2）と高台付碗（3）がある。高台付碗は高台から体部にかけて直線的に立ち上がっている。

〔皿〕なかには内面をていねいにヘラみがきされているものもあり、赤味の強い茶色を呈している（4～7）

〔杯〕器高に対し口径の小さいものもある（8～10）。8・9は平坦にヘラ切りされた底部とナデ調整された直立に近い体部からなる。一般的な杯は口径12.7～14.2cmで、15.2cmのものもある。器高3.2～3.9cmで、体部にヘラみがきもみられる。

〔杯蓋〕擬宝珠形のつまみをもつもので、天井部および天井部内面をヘラでみがいたものもある。

〔高台付碗〕体部は直線的に立ち上がり、底部の端にやや開く高台をつけている。体部は内外面とともにヘラみがきを加えている。11は大形の高台付碗で、口縁部を外反させ、その端部内側に凹線をめぐらせ、やや立ち上がり気味であり、体部はていねいに横ナデを施している。これら高台付碗は赤味の強い茶色を呈し、焼成は硬質である。なお付図にかかげたSK1084の高台付碗は他の土師器より上層から出土しているが、同様にとりあつかった。

〔鉢〕把手付の鉢が2種類出土している（12・13）。

以上SE1081とSK1084をほぼ同一型式としてまとめてみると、

1. 器種は多く、皿が最も多い。そのほか高台付碗、擬宝珠付杯蓋、把手付鉢、鉢および器高に対し口径の小さな杯などがある。
2. 須恵器の杯、高台付碗・杯蓋などが伴う。
3. 土師器の杯、皿、杯蓋、高台付碗などにヘラみがきがみられる。
4. 杯においてヘラみがきを施された精製土器とともに胎土に砂粒を含み、体部を横ナデ調整したやや粗製のものとがある。
5. 一般に杯は口径12.7～14.2cm、器高3.2～3.9cmであり、I-1A類より大形である。
6. 赤茶色を呈し、硬質に焼成されていること。

以上のような特徴が考えられ、報告書ではこれらの土器を奈良時代後半（8世紀後半）として位置づけされている。

I-1A類

この類の例としては6次ME13区下層の土器が代表例である。

6次ME13区下層⁽³⁾

ここからは土師器（杯・高台付碗）、内黒土器、黒色土器が出土している。

〔杯〕口径12.0～12.9cm、底径6.8～8.3cm、器高2.4～3.65cmで、器面には横ナデが施され、

底面にヘラ切り痕と板目がついている。浅黄色ないし灰白色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。

〔高台付碗〕体部は直線的で底部端に高台がついている。器面には横ナデが施され、黄褐色ないし灰黄色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。

〔蓋〕土師器としてはないが、内黒土器にその例がみられ、大形のものはない。

以上の特徴をまとめると、

1. 杯および高台付碗は横ナデのみでヘラみがきがみられず、いわゆる精製土器がない。
2. 皿形のものがほとんどみられない。
3. 杯は口径 12.0～12.9cm、底径 6.8～8.3cm、器高 2.4～3.65cmで、やや小形化している。
4. 高台付碗も口径 13.5～13.9cmで、やや小形化し大形のものはない。
5. 明確に須恵器の杯や高台付碗をとまなっている。
6. 全体に色調が灰黄色や灰白色のように白味が増して、赤褐色味をもたない。
7. 内黒土器、黒色土器の量が多いこと。

などであり、これ以前の土師器とくらべて、その差がかなり大きく、あるいはもう1類ほどその間にはいる可能性が大きい。

I-1B類

この類のものとしてSE 614 井戸および君畑遺跡2号墓があげられ、君畑遺跡4号墓も一応この類に入れている。

SE 614 井戸⁽³⁾

土師器（杯・脚付皿・高台付碗）、内黒土器、土鍋、それに須恵器（壺）が出土している。

〔杯〕口径 11.6cm、底径 6.9cm、器高 3.0cmである。

〔脚付皿〕托の部類にはいないもので、胎土は精製され、焼成も良好である。

〔高台付碗〕体部はまだ直線的で、底部近くにゆるい屈折部をもつものもある。

君畑遺跡2号墓⁽⁴⁾

〔杯〕口径 11.5～12.2cm、底径 6.8～7.7cm、器高 3.05～3.3cmである。

君畑遺跡4号墓⁽⁴⁾

〔杯〕口径 11.9～12.2cm、底径 6.8～6.9cm、器高 2.4～2.6cmで器高が低い。

以上をまとめてみると、

1. 杯は口径 11.5～12.2cmで、およそ12cm前後であり、I-1A類とくらべて小形化している。
2. 高台付碗は体部はまだ直線的で、底部近くにゆるい屈折部をもつものもある。

3. 脚付皿があり、托はまだ存在しない。

I-2A類

この類のものとして大宰府史跡第35次調査SK 678 土壇と君畑遺跡18号墓があげられる。

大宰府史跡第35次調査SK 678 土壇⁽⁹⁾

ここからは土師器（杯・高台付椀・托）、内黒土器、黒色土器、須恵器、越州窯系青磁、瓦が出土している。

〔杯〕口径 10.6～12.1cm、器高 2.5～3.0cmで、口径 11.1cm程度の大きさのことが多い。

〔高台付椀〕口径 11.7～12.4cmの高台付小椀が圧倒的に多く、口径 14.6～14.8cmのやや大形のものは非常に少ない。高台付小椀も大きくふたつに分けられ、器高 4.0～4.5cmのものが多く、器高 5.4～5.7cmで高い高台をもつもの（高台付椀の項に図示）は少ない。体部は丸味をもつものが多くなるが、口縁が外反するものはほとんどない。

〔托〕この類が初現で4点出土しているが、全体の割合としては少ない。

君畑遺跡18号墓⁽⁴⁾

土師器（杯・托・高台付椀）・黒色土器が副葬されていた。

〔杯〕9個あり口径 10.9～11.7cm、底径 6.6～7.8cmが主体で、器高 2.3～3.0cmである。

〔托〕8個あり数からすれば杯に近く、あるいはセットになるかもしれない。およそ 11.2～12.8cmで、大きなものは 14.2cmものもある。

〔高台付椀〕口径 12.6cmで小椀にあたる。体部はやや丸味をおびる程度である。

以上をまとめてみると、

1. 杯は口径 10.6～12.1cm、底径約 6.6～7.8cm、器高約 2.3～3.0cmで、I-1B類とくらべて口径、器高ともに小さくなっている。
2. 高台付椀では 12cm前後の小椀が圧倒的に多く、体部は丸味をおびてきているが、口縁の外反はほとんどみられない。
3. 托が出現してくる。
4. いわゆる丸底の椀がまだ出現していない。
5. 小皿がまだ分離出現していない。

I-2B類

この類のものとしてはSK 341 土壇、大宰府史跡第38次調査SD 865 溝、同第34次調査SK 674 土壇、筑前国分寺昭和51年度調査土壇1、君畑遺跡16・19号墓、それにやや時期の下るものとして第3次MF 35区暗灰色粘質土がある。

SK 341 土坑⁽²⁾

土師器（小皿・托・碗・高台付碗）がある。

〔小皿〕口径は確実にところでは 10.0～11.7 cm，底径 6.85～8.5 cm，器高 1.4～2.3 cm で内底に渦文がつくものも多い。

〔托〕口径 11.4～12.1 cm である。内底に渦文がつくものも多い。

〔碗〕底部は丸味をおび，口径 12.3～13.4 cm，器高 4.1～4.65 cm で，内底に渦文がみられる。口縁はまっすぐか，先端が小さく開く程度で，口縁端が小さく外彎するものもある。

〔高台付碗〕口径 11.8 cm の小碗とやや大きな碗がある。

大宰府史跡第38次調査SD 865 溝⁽¹¹⁾

土師器（小皿・杯・托・高台付碗），内黒土器，黒色土器，白磁，越州窯系青磁，緑釉陶器が出土していて，碗はみられない。

〔小皿〕口径 10.3～11.4 cm，器高 1.5～2.1 cm であるが口径 10.7～11.4 cm，器高 1.7～2.1 cm に集中している。

〔杯〕口径 10.4～11.6 cm，器高 2.6～2.8 cm で，Ⅰ－2 A の杯によく似ている。

〔托〕口径 11.6～13.2 cm である。

〔高台付碗〕口径 12 cm 前後の小碗と口径 13～15 cm の碗，15 cm 以上の大碗があり，小碗に体部が直線的なものなど古い形をもつものがある。

大宰府史跡第34次調査SK 674 土坑⁽⁹⁾

土師器（小皿・托・碗・高台付碗），灰釉陶器，緑釉陶器，内黒土器が出土し，杯はない。

〔小皿〕口径 10.8～11.3 cm，器高 1.8～3.2 cm である。

〔托〕口径 12.6 cm である。

〔碗〕口径 14.7 cm，器高 4.6 cm で，口縁が外反している。

〔高台付碗〕小碗，碗，大碗があり，共伴の灰釉陶器と形がよく似ている。

〔蓋〕径の 9.7 cm で器高は低い。

筑前国分寺昭和51年度調査土坑 1⁽¹³⁾

土師器（小皿・高台付碗），黒色土器，緑釉陶器が出土しているが，杯・碗がないのが注目される。

〔小皿〕胎土によって二種に分けられ，精良なものは口径 10.5 cm，器高 2.1 cm 前後で小形であり，少量の砂粒を含むものは 16 点あるがすべて口径 11.0～11.3 cm，器高 2.0～2.3 cm 内に含まれ，Ⅰ－2 B 類の中でも古手のものであろう。

〔高台付碗〕口径 12.2 cm の小碗で，体部にや丸味をもつ。

君畑遺跡16号墓⁽⁴⁾

土師器（小皿・耳皿）と黒色土器が出土している。

〔小皿〕口径 10.6～11.7cm, 底径 7.2～7.9cm, 器高 1.7～1.9cmである。

君畑遺跡19号墓⁽¹⁴⁾

土師器（小皿・托）と内黒土器が出土している。

〔小皿〕口径 10.4cm, 底径 7.1cm, 器高 2.0cmである。

〔托〕口径 12.0～12.1cmである。

第3次MF35区暗灰色粘質土⁽²⁾

土師器（小皿・托・椀・高台付椀）が出土している。

〔小皿〕口径 10.0～11.35 cmであるが、口径 10.0～11.0 cmに集中する傾向がある。底径はおよそ 7.1～8.25 cmで8 cmを越えるものは少ない。器高も 1.6～2.2 cmで2 cmを越えるものは少なく、Ⅰ－2 B類の中でも終り頃に近く、次のⅠ－2 C類に近くなっている。

〔托〕口径 11.5cmである。

〔椀〕口径 13.1cm, 器高 4.2cmで、口縁はほぼまっすぐである。

〔高台付椀〕小椀と椀がありともに口縁はまっすぐである。

以上をまとめると、

1. 杯と思われるものはSD 865 溝からしか出土していなく、その器形もⅠ－2 A類と大差ない。あるいは混入か残存とも考えられるが、次のⅠ－2 C類にも杯があり、このⅠ－2 B類から分離し、小さい方を小皿、大きい方を杯としてよさそうである。ただし器形等からも、杯が小形化したものが小皿であるといってもさしつかえないであろう。
2. 小皿は口径約10～12cmではほぼ11cm前後で底径は約7～8.5 cmで8 cm前後のものが多く、器高は約3 cm前後である。Ⅰ－2 A類の小皿にくらべて口径、器高が小さく、底径はほぼ同じかやや大きくなり、全体として平たい感じを受ける。
3. 托は多くみうけられるが、器形の変化にとぼしい。
4. 丸底の椀が出現するが、Ⅰ－2 B類の古手にはまだ共伴しないため、あるいは中頃以降に出現するのかもしれない。
5. 高台付椀は、体部が丸く、小椀のほかやや大きい椀の量が多くなってくる。
6. 椀および高台付椀の口縁はまっすぐなものが多く、口縁端が小さく外彎するものもあり、外反するものは少ない。
7. 蓋は器高が非常に低くなる。

Ⅰ－2 C類

この類にはいる代表例としては君畑遺跡12号墓、大宰府史跡第43次調査SE1083井戸がありこのⅠ－2 C類の中でもやや古手と思われるものにSK 339 土壇・SK 633 土壇がある。

君畑遺跡12号墓⁽⁴⁾

土師器（小皿・杯・高台付椀）が副葬されていた。

〔小皿〕口径は 10.25～11.2cm であるが、ほぼ 10～11cm の範囲にはいる。底径は 7.0～8.1cm、器高は 1.35～2.05cm でほぼ 2cm 以下である。

〔杯〕口径 12.2～12.9cm、底径 7.6～8.3cm、器高 2.95～3.3cm である。

〔高台付椀〕口径 11.55cm で、口縁はほとんど外反していない。

大宰府史跡第43次調査SE1083井戸⁽¹¹⁾

土師器（小皿・托・椀・高台付椀）、黒色土器、内黒土器が出土している。

〔小皿〕口径 9.8～11.3cm、器高 1.3～2.1cm である。

〔托〕托の破片と思われるもので、底部中央に焼成前に穿たれた孔がある。

〔椀〕口径 12.6～14.2cm、器高 3.2～4.8cm であるが 4cm 以下のものが多い。口縁端はやや外反するものも多く、内底にヘラナデがみられるものもある。

〔高台付椀〕小椀、椀、大椀があるが、小椀はすくなく、椀、大椀が多い、口縁は外反するものも多く、珍しい例として内面のみヘラでみがかれているものもある。

SK 339 土坑⁽²⁾

土師器（小皿・托・椀・高台付椀）、黒色土器、緑釉香炉、須恵器（椀）が出土している。

〔小皿〕口径 10.0～11.0cm、底径 6.9～8.1cm、器高 1.6～2.2cm である。内底には渦文のついたものも多い。この類としては大きめであり、やや古い方であろう。

〔托〕口径 10.8～12.5cm である。

〔椀〕口径 11.9～13.1cm、器高 3.5～4.2cm で、口縁はやや外反している。内底に渦文が残るものもある。

〔高台付椀〕口径 12cm 前後の小椀と、口径 13～15cm を越える大椀があり、小椀は少なく椀・大椀が多い。口縁が外反し、内底に小さく渦文がついているものもある。

SK 633 土坑⁽³⁾

土師器（小皿・蓋・托・椀・高台付椀）、内黒土器が出土している。

〔小皿〕口径 9.9～11.2cm で、ほぼ 10～11cm の範囲にはいり、底径 6.25～7.9cm で SK 339 土坑の小皿にくらべ、小さいものもある。器高 1.4～2.2cm で 2cm 以下のものの方が多い。

〔蓋〕口径 8.4cm、器高 0.7cm で低く、天井部にはヘラナデが施されている。

〔托〕口径 10.1～12.4cm である。

〔椀〕口径 11.8～13.4cm、器高 3.5～4.0cm で、丸底であるが、平底に近いものもあり、口縁がやや外反するものが多い。内面にヘラナデが施されたり、底部外面に指圧痕が認められるものもある。また明瞭に壁をロクロで一氣に引きあげてつくられたものもある。

〔高台付椀〕口径9cmの特小椀と小椀・椀・大椀があり、椀・大椀が多い。内面にヘラナデが施されているものもある。

以上をまとめると、

1. 小皿はおよそ口径10～11cmの範囲内で、底径は約6.8～8cmを越えるものはあまりない。器高は1.3～2.2cmで2cm以下のものが大部分である。
2. 杯は口径12.2～12.9cm、底径7.6～8.3cm、器高2.95～3.3cmで大形化しはじめてくる。量は多くない。
3. 椀は器高が低くなり、4cm以下のものが多く、底部の丸味はすくなく、平底に近いものもあらわれてくる。
4. 托は量も多いが、その形にあまり変化は認められない。
5. 蓋はⅠ-2B類とあまり変化なく、器高は低い。
6. 高台付椀では、口径12cm前後の小椀の量は小なくなり、反対に口径13～15cmの椀が多く、口径15cm以上の大椀も少なくない。
7. 椀や高台付椀の口縁部は外反するものが多く、内面にヘラナデが施されているものもある。
8. 見込みに渦文がつくものも多い。

Ⅰ-3A類

この類には大宰府史跡第38次調査SK 802土坑、同36次調査SE 725井戸、それに他の多くの類が混在してあまり良好な資料ではないが、大宰府史跡第31次調査暗褐色土にも多く含まれている。

大宰府史跡第38次調査SK 802土坑⁽¹¹⁾

土師器（小皿・椀・丸底杯・高台付椀）・内黒土器・黒色土器・瓦器・白磁が出土している。

〔小皿〕すべてヘラ切り底をもち、口径9.2～10.8cm、器高1.1～1.7cmで、口径は10cm前後であるが、量的には口径10cmを越すものが多く、Ⅰ-3A類の中では古手のものである。

〔椀〕口径13.6cm、器高3.7cmで、口縁は外反している。量は少ない。

〔丸底杯〕口径15.5～16.3cm、器高3.4～3.9cmで、口縁は外反するものが多く、体部と底部の境に稜線を有し、内面にヘラナデが施されている。

〔高台付椀〕口径15.6cmで口が開き、椀部はやや浅く、南縁は丸く肥厚させ、やや外反し、体部に稜線を有し、内面にヘラナデが施されている。

大宰府史跡第36次調査SE 725井戸⁽¹⁰⁾

土師器（小皿・丸底杯）、黒色土器が出土している。

〔小皿〕すべてヘラ切り底を有し、口径9.4～10cmであるが、口径9.4cmのものを除くとほぼ口径10cm近くであるが、口径10cmを越えるものがないため、Ⅰ-3A類でも新しく、次の

I-3 B類に近い。

〔丸底杯〕口径 14.6～15.5cm，器高 3.2～3.5cmで，口縁はほとんど外反せず，底部と体部との境が明確でなく，内面はヘラナデが施されている。

大宰府史跡第31次調査暗褐色土⁽⁸⁾

器種も多く，ヘラ切り底や糸切り底の土器が混在している。

〔小皿〕図示された小皿のうち，ヘラ切り底の小皿は口径約 9.5～10.2cm，器高約 0.8～1.5cmに集中するものが多く，明らかにI-3 A類を多く含んでいる。ただしそのほかにI-2 A～2 B類や糸切り底の小皿も混在している。

〔杯〕ヘラ切り底の杯で口径 14.1～14.6cmであり，I-3 C類の杯と思われる。そのほか糸切り底で口径約 15.8cmのI-4類ないしII-1類と考えられるものもある。

〔丸底杯〕ヘラ切り底の丸底杯のほか糸切り底の丸底杯もあり，I-4類と考えられるものもある。

〔碗〕平底に近い碗があり，I-3 C類ないしそれ以降のものと考えられる。

〔蓋〕その形態からしてI-2 B類ないしそれ以降のものと考えられる。

〔托〕口縁内側に蓋と同様な凹線がはいるものがある。

〔高台付碗〕明らかにI-2 C類のもののほか口が開き碗部が浅く，体部と底部との境に稜線がはいるものがあり，これがI-3 A類の高台付碗と考えられる。

このように色々な類の土師器が混在しているので，あまり良い資料とは言えないが，高台付碗と内黒土器・黒色土器，ヘラみがき高台付碗・瓦器碗については編年に使用させていただいたが，信頼性は薄い。

以上をまとめると，

1. 小皿についてはすべてヘラ切り底で，口径約 9.5～10.5cmで 10cm前後であり，器高約 1.0～1.8cmである。
2. 杯は出土していないが，前後の関係から口径 13cm，器高 3cm付近のものと考えられる。
3. 托は確実な例ではみられないが，あるいは少量残る可能性もある。
4. 碗は口径 13.6cm，器高 3.7cmで，口縁は外反している。量は少なく，残存程度である。
5. 丸底杯の出現が特徴的であり，碗の消滅との関係が考えられる。口縁はやや外反する傾向があり，内面にヘラナデが施されている。
6. 高台付碗は口が開き，碗部は浅く，体部と底部との境に稜線がみられる。内面にヘラナデが施されている。
7. 瓦器が相伴しはじめ，確実ではないが，ヘラみがき高台付碗も相伴すると考えられる。
8. 白磁が相伴してくる。

I-3B類

この類のものとして大宰府史跡第46次調査SD1330溝、6AYECK内関連遺跡がある。

大宰府史跡第46次調査SD1330溝

ここからは土師器（小皿・杯・丸底杯）、白磁、越州窯系青磁片などが出土している。

〔小皿〕すべてヘラ切り底で、口径約 8.9～ 9.6cm、底径約 6.8～ 7.5cm、器高 1.1～ 1.7cmである。

〔杯〕口径約 12.9～ 13.7cm、底径約 9.0～ 10.05cm、器高約 2.3～ 3.3cmで、底面にヘラ切り痕と板目が残っている。

〔丸底杯〕口径 14.1～ 15.7cm、器高 2.8～ 3.6cmで、体部と底部との境に稜がつくるものも多く、内面にヘラナデが施されているものもある。

なお、この資料は未発表であるが、昭和52年度に発表の予定であり、九州歴史資料館調査課のご好意により使用させていただいた。

6AYECK内関連遺跡

ここからは土師器（小皿・杯・碗・丸底杯）・内黒土器・黒色土器・瓦器・ヘラみがき高台付碗・白磁・越州窯系青磁・青白磁が出土している。

〔小皿〕口径 9.2～ 10.4cmであるが、大部分は 10.05cm以下である。底径は 6.2～ 3.2cmであるが、大部分は 7.5cm以下である。器高は 1.0～ 1.9cmである。SD1330溝とくらべると当遺跡の方がやや古手であるといえよう。

〔蓋〕口径 11.3cmで天井部のつくりが雑である。

〔杯〕口径 13.1cm、底径 10.2cm、器高 3.25cmである。

〔碗〕口径 11.9cmの小形のものと、口径 13.15cmのものがあるが、量はきわめて少ない。

〔丸底杯〕口径 14.7～17.0cm、器高 2.5～ 4.1cmで、体部と底部との境に稜がつくものもあり、また指圧痕のつくものもあって、内面はヘラナデが施されている。

以上をまとめてみると、

1. 小皿はすべてヘラ切り底で、およそ口径 9～1.0cm、底径 6.5～7.5cm、器高 1～2 cmの範囲にはいる。
2. 杯にこの類の特徴があり、口径 12.9～ 13.7cm、底径約 8～10cm、器高約 2.3～ 3.3cmで、次のI-3C類より小形である。量もやや増加してくる。
3. 丸底杯は口径 14～ 16cm、器高 3～4 cmに集中し、量も多く、体部と底部との境に稜がつくものもあり、底部周辺に指圧痕があり、内面にヘラナデが施されるものもある。
4. 蓋も存在するが、これが終末であろう。
5. 碗も少量存在するが、これもまた終末と考えられる。
6. 托はほとんど存在しない。

7. 高台付椀は前類の系統を引いたものが少量存在するものと考えられるが、確実な例はない。
8. 内黒土器・黒色土器が共伴するが、終末に近いと思われる。
9. それにくらべ瓦器、白磁、青白磁の共伴が多くなる。

I-3C類

この類には浦城跡Ⅰ類と大宰府史跡第37次調査SE 772井戸、同第38次調査SD 860溝Ⅲ層がある。

浦城跡Ⅰ類⁽¹²⁾

土師器（小皿・杯・丸底杯），瓦器，白磁が出土している。

〔小皿〕すべてヘラ切り底で，口径 8.6～9.8cm，底径 6.4～7.8cm，器高 1.1～1.65cmである。

〔杯〕すべてヘラ切り底で，口径 14.4～15.0cm，底径 8.9～9.9cm，器高 3.1～3.45cmである。

〔丸底杯〕口径 15.0～16.2cm，器高 3.2～3.9cmと大きくなっている。内面にヘラナデが施され，体部と底部との境が明確でなく，全体として丸味をもつものもない。

大宰府史跡37次調査SE 772井戸⁽¹⁰⁾

土師器（小皿・丸底杯），瓦器，青白磁合子，白磁が出土している。

〔小皿〕すべてヘラ切り底で，口径 8.8～9.8cm，器高 1.0～1.5cmである。

〔丸底杯〕口径 13.6～17.6cm，器高 3.0～3.5cmであるが，口径 14.5～15.8cmのものが多し。内面はヘラナデが施されている。

大宰府史跡第38次調査SD 860溝Ⅲ層⁽¹¹⁾

土師器（小皿・丸底杯・高台付椀・ヘラみがき高台付椀），瓦器があり，その他に白磁，越州窯系青磁，高麗青磁，青白磁があるが，Ⅰ・Ⅱ層との区別は報告されていない。

〔小皿〕口径 8.45～9.9cmで，9cm前後のものが多く，器高 1.15～1.9cmである。すべてヘラ切り底であるが，手づくね土器が1点認められる。

〔丸底杯〕口径 14.5～14.65cm，器高 3.1～3.5cmで，内面はヘラナデが施されている。

〔高台付椀〕口径は 14.1～14.4cmで，椀部は口を大きく開き，丸底杯に似て浅く，体部との境に稜がみとめられる。

そのほか大宰府史跡第39—2次調査SK 994土壇もこの類に入れることができる。

以上をまとめてみると，

1. 小皿は口径約 8.45～9.9cmで，およそ9cm前後である。底径は約 6.4～7.8cm，器高は 1.0～1.9cmであり，Ⅰ—3B類とくらべやや小型化している。
2. 杯はすべてヘラ切り底で，口径 14.4～15.0cm，底径 8.9～9.9cm，器高 3.1～3.45cm

でⅠ－３Ｂ類の杯とくらべ、ひとまわり大きくなっている。

３．丸底杯は浦城跡Ⅰ類のみやや大形であり、内面にヘラナデが施されている。

４．高台付椀は口径 14.1～14.4cm で、椀部は丸底杯のように口を開き浅い。体部と底部との境に稜がみられる。高台付椀としては終末のものである。

５．蓋、椀、托はない。

６．瓦器、ヘラミガキ高台付椀のみ共伴し、内黒土器、黒色土器は共伴しない。

Ⅰ－３Ｄ類

この類のものとしては大宰府史跡第38次調査SD 860 溝Ⅰ・Ⅱ層、同暗青色砂質土、同黒色砂質土層、同第39－3次調査SK 976 土坑がある。

大宰府史跡第38次調査SD 860 溝Ⅰ・Ⅱ層⁽¹¹⁾

〔小皿〕Ⅱ層から出土した小皿で、図示された62点中糸切り底の小皿が4点あり、ヘラ切り底の小皿は口径 9.25～9.95cm、器高 0.9～1.7cm で、糸切り底の小皿は口径 8.8～9.65cm、器高 1.05～1.2cm で、口径はほぼ同じであるが、器高はやや低い。Ⅰ層から出土した小皿で図示された23点中糸切り底は5点あり、ヘラ切り底の小皿は口径 8.65～9.75cm、器高 1.1～1.6cm で、糸切り底の小皿は口径 9.0～9.5cm、器高 1.2～1.4cm で、ほぼ同じ大きさである。

〔丸底杯〕Ⅱ層から出土したものは口径 14.3～15.65cm、器高 2.8～3.7cm で、Ⅰ層から出土したものは口径 14.8～15.4cm、器高 3.1～3.7cm で、ほぼ同じであり、内面にヘラナデが施され、体部と底部との境に稜線がつくものもある。

〔杯〕Ⅱ層からヘラ切り底の口径 16.25cm、器高 2.6cm のものが、Ⅰ層からは糸切り底の口径 15.6cm、器高 2.5cm のものが出土している。

大宰府史跡第38次調査暗青色砂質土⁽¹¹⁾

〔小皿〕計測された16点中糸切り底は4点であり、ヘラ切り底の小皿は口径約 8.4～9.8cm で、器高約 1.0～1.5cm で、糸切り底の小皿は口径 8.6～9.2cm、器高 1.1～1.5cm で、大きさはほぼ同じである。

〔丸底杯〕口径 14.8～15.6cm、器高 3.1～3.5cm である。

〔杯〕ヘラ切り底の杯で口径 14.5cm、器高 3.7cm で、Ⅰ－３Ｃ類の杯に似ている。

大宰府史跡第38次調査黒色砂質土⁽¹¹⁾

前者の暗青色砂質土のすぐ上の層で、小皿における糸切り底の割合が多くなっている。

〔小皿〕計測された122点中、糸切り底の小皿は76点で、ヘラ切り底の小皿46点より多くなっていて、この類の新しい方と思われる。ヘラ切り底の小皿は口径 8.5～10.0cm、器高 0.8～1.8cm で、糸切り底の小皿は口径約 8.2～10.3cm であるが、9.7cm 以下に集中している。器高は 0.7～1.8cm で、両者の大きさはほぼ同じであるが、ヘラ切り底の小皿がやや大き目である。

また全体としてSD 860 溝Ⅰ・Ⅱ層よりも器高がやや高い。

〔丸底杯〕口径 13.7～16.7cm, 器高 2.8～3.8cmで, ばらつきが大きい。

〔杯〕ヘラ切り底と糸切り底があり, ヘラ切り底は口径 12.0～14.8cm, 糸切り底は口径 12.5～16.1cmで, ばらつきが多く, 他の類のものが含まれていると考えられる。

大宰府史跡第39—3次調査SK 976 土壇⁽¹¹⁾

土師器(小皿・丸底杯), 瓦器, 白磁が出土している。

〔小皿〕図示された12点中3点が糸切り底である。ヘラ切り底の小皿は口径 8.2～9.2cm, 器高 0.7～1.7cmで, 糸切り底の小皿は口径 9.2～9.5cm, 器高 1.0～1.5cmとやや大きめである。

〔丸底杯〕口径 14.3～16.0cm, 器高 3.0～3.8cmである。体部と底部との境に明瞭な稜をもち, 内面はヘラナデが施されている。

以上をまとめると,

1. 丸底杯を主体とし, 小皿や杯に糸切り底が混在する時期のものをこのⅠ—3 D類とする。
2. 小皿はおよそ口径 8～10cmの範囲にはいり, その中心は9cm前後であり, 器高は約 0.8～1.7cmで, 前類のⅠ—3 C類とあまり変化はない。
3. 小皿におけるヘラ切り底に対する糸切り底の割合は時期が新しくなるにつれ増加してくる。
4. 丸底杯はおよそ口径 14～16cm, 器高 2.8～3.8cmで, 内面にヘラナデが施され, 底部の丸味が弱くなり, 体部と底部との境の稜の位置が下がる傾向をもっている。
5. 杯はヘラ切り底と糸切り底があり, 口径は14.5cmを越えるものと考えられるが, 明確でない。

以上のことからSD 860 溝のⅢ層はⅠ—3 C類でⅠ・Ⅱ層はⅠ—3 D類であり, 単にSD 860 溝という場合はⅠ—3 C～3 D類として取りあつかった。また黒色砂質土の場合, 主体はⅠ—3 D類であるが, 一括土器として図示されたものは糸切り底を伴わず, あるいはⅠ—3 C類の可能性もあるので, ここでは一応Ⅰ—3 C～3 D類としてとりあつかうことにしたい。

Ⅰ—4 類

この類としてSK 339 土壇に混入したと考えられる杯・丸底杯・高台付杯を加えたSD 305 溝が代表例である。

SD 305 溝⁽²⁾

ここからは土師器(杯・丸底杯・小皿), 瓦器, 白磁が出土している。

〔杯〕ヘラ切り底と糸切り底があり, ヘラ切り底のものには丸底杯との区別が明瞭につかないものもある。ヘラ切り底は口径 14.25～16.3cm, 底径 10.8～12.2cm, 器高 2.9～3.1cmで, 糸切り底は口径 15.4～15.5cm, 底径 11.0～12.0cm, 器高 3.2cm前後で, ほぼ同大である。

〔丸底杯〕ヘラ切り底と糸切り底のものがある。ヘラ切り底のものは口径 15.7cm, 器高 2.6cm で、体部下半から底部にかけて指圧痕が残る、内面はヘラナデが施されている。糸切り底のものは口径 14.9cm, 器高 2.9cm で、内面にヘラナデが施されている。この丸底杯は量的には少ない。

〔小皿〕復原口径 9.5～9.8cm のヘラ切り底のものが少量出土している。

大宰府史跡第36次調査SE 727 井戸⁽¹⁰⁾

土師器（小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕口径 8.8～9.2cm, 底径 6.2～7.4cm, 器高 1.1～1.3cm で、すべて糸切り底である。

〔杯〕ヘラ切り底で口径 15.1～16.2cm, 底径 11.0～12.0cm, 器高 2.6～3.4cm である。

以上のものだけで丸底杯はみられず、Ⅰ-4 類に入れてよいと考えられる。

なお同様にヘラ切り底の杯があり、丸底杯がみられない大宰府史跡第39-1次調査SE 870 井戸は土師器が少なく、あるいはⅠ-4 類に入れるべきかもしれないが、小皿に1点のみ糸切り底がみられるので、一応Ⅰ-3D 類に含めたが、いずれにせよⅠ-4 類に近いものであろう。

大宰府史跡第9次調査SE 225 井戸⁽⁵⁾

掘り方からはヘラ切り底のみが、井戸内からは糸切り底のみが出土し、ヘラ切り底から糸切り底への転換が明確である。両方から白磁が共伴している。

〔小皿〕掘り方出土のものはヘラ切り底で、口径 9.6cm, 器高 1.2cm で、井戸内出土のものは糸切り底で口径 9.2cm, 器高 1.0cm である。

〔杯〕掘り方出土のものはヘラ切り底で、口径 15.0～15.3cm, 器高 2.5～2.7cm である。井戸内出土のものは糸切り底で、口径 14.7～15.2cm, 器高 2.5～3.0cm である。

井戸掘り方と井戸内から出土した土師器は大きさがほぼ同じであるが、ヘラ切り底と糸切り底の差があり、井戸掘り方出土の土師器はⅠ-4 類に、井戸内出土のものはⅡ-1 類に含まれるが、時代的にはあまり差はないであろう。

以上をまとめてみると、

1. 杯が主体で丸底杯は少量にすぎない。
2. 杯はヘラ切り底と糸切り底があるが、ヘラ切り底の方が多く、口径 14.25～16.3cm で 15～16cm のものが多い。底径は 10.8～12.7cm で、器高 2.6～3.25cm である。
3. 丸底杯はヘラ切り底と糸切り底があり、口径 14.9～15.7cm, 器高 2.6～2.9cm で、内面にヘラナデが施されている。量は杯にくらべかなり少ない。
4. 小皿は口径約 9cm 前後で、糸切り底のものが量的に多いと考えられる。

Ⅱ 類 土 師 器

糸切り底の土師器をⅡ類とし、それを大きく1から6に分け、Ⅱ-5類をさらにA・Bに分離した。

Ⅱ-1 類

この類のものとしてSE 401 井戸, SK 312 土壇, SD 604 溝, 大宰府史跡第36次調期SE 721 井戸が代表的である。

SE 401 溝⁽²⁾

土師器(小皿・杯・丸底杯), 白磁が出土している。

〔小皿〕すべて糸切り底で, 口径 8.8~9.7cm, 底径 6.8~8.1cm, 器高 0.8~1.3cmでやや低めである。

〔杯〕口径 15.5~15.9cm, 底径 10.75~11.75cm, 器高 2.1~2.7cmで, 内底に渦文がみられ, すべて糸切り底である。

〔丸底杯〕口径 14.9cm, 器高 3.2cmで, 糸切りの部分は径 9.5cmと小さい。内面にヘラナデはない。

このSE 401 井戸内出土の土師器は, 糸切り底のみであるが, 高台付小皿はみあたらないし, 土師器自体はSD 305 溝のⅠ-4類によく似ている。またこのSE 401 井戸をおおう暗茶褐色粘質土からはⅡ-1類が出土しているので, 層位的にもSE 401 井戸の土師器はⅡ-1類より古いことになる。それで本来はSE 401 井戸出土の土師器はⅠ-4類とⅡ-1類との間におくか, Ⅰ-4類に含めてその後半にする方が妥当かもしれないが, 類例がすくなくⅡ-1類の初頭に入れておきたい。

SK 312 土壇⁽²⁾

下部と上部に分かれ, 土師器はすべて糸切り底で小皿・耳皿・高台付小皿・杯・高台付杯があり, 瓦器, 白磁が出土している。

下部の土師器は器壁が薄く, 焼成が良好で, 淡橙色を呈している。

〔小皿〕口径 8.9~9.8cmで9.0~9.5cmに集中している。底径 6.4~7.4cm, 器高 0.7~1.5cmと低い。内底に渦文がついているものもある。

〔耳皿〕小皿の両端を折り曲げたものである。

〔高台付小皿〕小皿に高台をつけたもので, 口径 9.0~9.8cm, 高台径 5.0~6.4cm, 器高 1.1~1.45cmで, 高台は断面三角形の小さなものである。

〔杯〕口径 1.45~16.8cm, 底径 10.0~11.7cm, 器高 2.3~3.2cmで内底に渦文のつくものもある。

〔高台付杯〕口径 16.0cm, 器高 3.6cmである。

上部の土師器は器壁がやや厚く、黄灰色を呈している。

〔小皿〕口径 8.4～9.8cm, 底径 6.7～7.9cm, 器高 0.9～1.3cmで、内底に渦文がみられる。

〔高台付小皿〕口径 9.4～10.3cm, 高台径 5.9～7.7cm, 器高 1.7～2.1cmで、口径は小皿よりやや大きめで、高台径、器高ともに下部のものより大きい。

〔杯〕口径 15.4～16.6cm, 底径 10.5～11.65cm, 器高 2.5～3.0cmで、内底に渦文がみられる。

SD 604 溝⁽³⁾

土師器（小皿・杯・高台付杯），白磁，青磁 7 C 類・9 類が出土している。

〔小皿〕口径 8.9～9.2cm, 底径 6.5cm, 器高 0.9～1.0cmで薄手である。

〔杯〕口径 15.2～15.9cm, 底径 9.9～11.5cm, 器高 2.5～3.3cmであり、II-1 類の中でもやや時期の新しい方に属すると考えられる。

〔高台付杯〕口径 17.9cm, 器高 3.9cmのもので、やや大形である。

大宰府史跡第36次調査SE 721 井戸⁽¹⁰⁾

土師器（小皿・高台付小皿・杯・高台付杯），白磁，青磁 7 類，青白磁，雑器（7 類，11 類）その他の陶器，瓦器が出土している。

〔小皿〕口径 8.8～9.8cm, 底径 6.4～7.4cm, 器高 0.8～1.4cmである。

〔高台付小皿〕口径 7.4～10.6cm, 器高 1.4～2.0cmで量は少ない。

〔杯〕口径 15.0～16.65cm, 底径 10.0～11.5cm, 器高 2.6～3.3cmである。

〔高台付杯〕口径 20.0cm, 器高 4.3cmの大形のものである。

なおII-4 類の小皿や杯，それにへら切り底の小皿をも含んでいる。

このほかSK 339 土坑，第4次暗茶褐色粘質土から出土した土師器がII-1 類にはいる。

以上をまとめると

1. すべて糸切り底である。
2. 小皿は全体に薄手で、古手のものは口径 8.8～9.8cmで、新しいものは9cm前後である。底径は約 6.5～8cmで、器高 0.7～1.3cmである。
3. 高台付小皿が新しく出現し、量もかなり多い。高台部は小さいものや、薄いものが多い。
4. 杯は口径 15.0～16.6cm, 底径は 10.5～11.8cm, 器高 2.2～3.3cmである。また口径 14.9～16.6cm, 底径 8.9～9.8cm, 器高 2.3～3.3cmの小群もある。なお別に、口径 14.5～15.5cm, 底径 9.7～10.9cm, 器高 2.3～3.3cmのやや小形の一群があるが、これはII-1 類の終末か、II-1 類からII-2 類への過渡期のものである。
5. 高台付杯は、杯に高台をつけたもののほか、口径が杯よりかなり大きいものもある。量は多くないが、よくみかける土器である。

6. 糸切り底の丸底杯があるが、きわめて量は少なく、それもこの類の前半で消滅する。内面にヘラナデは施されない。

7. 小皿・高台付小皿・杯・高台付杯の内底に渦文がみられる。

8. 白磁のほかに青磁（7・9類）が伴い始める。

Ⅱ－2類

この類ではSK 520 土壇，SD 401 溝，SK 629 土壇，SD 103 溝，浦城跡Ⅱ－1類，大宰府史跡第43次調査SK 1085土壇が代表的である。

SK 520 土壇⁽¹⁾

土師器（小皿・杯），瓦器，青磁7A類が出土している。

〔小皿〕口径 8.65～9.6cm，底径 6.5～7.4cm，器高 1.2～1.6cmである。

〔杯〕口径 14.0～14.75cm，底径 8.8～10.65cm，器高 2.7～3.1cmである。

SD 401 溝⁽²⁾

土師器（特小皿・小皿・高台付小皿・杯）が出土している。

〔特小皿〕口径 7.1cm，底径 4.4cm，器高 1.5cmで，これ1点のみである。

〔小皿〕口径 9.2～9.4cm，底径 7.0～7.3cm，器高 1.05～1.5cmである。

〔高台付小皿〕口径 9.1cm，器高 1.9cmで，高台部はやや高い。

〔杯〕口径 14.3～14.9cm，底径 9.5～10.0cm，器高 2.7～3.0cmである。

SK 629 土壇⁽³⁾

土師器（小皿・高台付小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕口径 9.3cm，底径 6.6cm 器高 1.3cmである。

〔高台付小皿〕口径 9.0cm，器高 1.5cmである。

〔杯〕口径 13.8～14.8cm，底径 9.6～10.2cm，器高 2.4～3.0cmである。

SD 103 溝

今回報告するもので，土師器小皿と杯が出土している。

〔小皿〕口径約 8.85～9.85cm，底径約 6.75～7.95cm，器高 1.05～1.45cmである。

〔杯〕口径 13.85～14.4cm，底径 8.8～9.5cm，器高 2.35～3.2cmである。

浦城跡Ⅱ－1類⁽¹²⁾

土師器（小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕口径 7.9～8.4cm，器高 1.2～1.25cmである。

〔杯〕口径 13.4～14.2cm，器高 2.55～3.3cmである。

大宰府史跡第43次調査SK 1085土壇⁽¹¹⁾

土師器（小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕口径 8.3～9.0cm, 器高 0.8～1.05cmである。

〔杯〕口径 13.4～14.8cm, 器高 2.3～3.1cmである。

以上をまとめると,

1. 杯は大きくみれば2つに分かれ, 前半はSD 401 溝に代表されるように口径 13.8～14.9cmで, SK 520 土壇, SK 629 土壇, SD 103 溝がはいり, 後半は浦城跡Ⅱ-1 類にみられるように口径 13.3～14.3cmに大半がはいるもので, これには大宰府史跡第43次SK 1085土壇がある。底径は約9～10cmである。
2. 小皿は前半のものは口径9cmを越すものが多いが, 後半は口径9cm以下のものが多くなる。
3. 高台付小皿があり, 口径は9cm前後で, 量は多くない。
4. 特小皿もあるが, 非常にまれである。
5. 瓦器はほぼ終末であり, 青磁はほぼⅡ-1 類と同じで量が増し, 白磁の量が激減している。

Ⅱ-3 類

この類のものとしてSE 505 井戸, SK 407 土壇, SE 514 井戸, 4次MP 27区黒褐色土, SK 317 土壇, SE 610 井戸などがある。

SE 505 井戸⁽¹⁾

土師器(小皿・高台付小皿・杯)がある。

〔小皿〕口径 8.15～9.0cm, 底径 6.5～7.45cm, 器高 1.0～1.2cmである。

〔高台付小皿〕口径 8.5～9.8cmで小皿と同じであり, 高台は粘土紐を輪にして底面にはりつけたような簡単なもので, 底面の中央にはなくて, やや片方へずれているものが多い。

〔杯〕口径 12.75～13.3cm, 底径 8.7～9.1cm, 器高 2.2～2.7cmである。

SK 407 土壇⁽²⁾

土師器(小皿・高台付小皿・杯・盤)がある。

〔小皿〕口径 8.0～9.2cm, 底径 6.5～7.25cm, 器高 0.8～1.25cmで器壁は厚く深みはない。

〔高台付小皿〕口径 12.5～13.8cm, 器高 1.6～2.05cmで, 形態はSE 505 井戸のものに似ている。

〔杯〕口径 12.5～13.8cmであるが, 13.0cm以下のものが多い。底径は 8.0～9.2cmで, 器高は 2.0～2.4cmである。

〔盤〕口径 19.0cmと 22.6cmとの二つがある。

SE 514 井戸⁽¹⁾

土師器(小皿・高台付小皿・杯)がある。

〔小皿〕口径 8.45～9.0cm, 底径 6.1～7.7cm, 器高 1.1～1.3cmである。

〔高台付小皿〕口径 10.4cmで小皿よりやや大きく, 高台は外反している。

〔杯〕口径 12.5～12.9cm, 底径 8.6～9.2cm, 器高 2.4～2.7cmで、このほか口径 14.5cm, 器高 3.65cmでⅡ-2類にはいるものも1点ある。

第4次MP27区黒褐色土⁽²⁾

土師器（小皿・高台付小皿・杯）がある。

〔小皿〕口径 8.5～8.7cm, 底径 6.5～6.8cm, 器高 1.3cmである。

〔高台付小皿〕口径 8.5～10.3cm, 器高 2.2～3.1cmで、高台はていねいにつくられ、外反するものが多い。

〔杯〕口径 12.1～13.1cm, 底径 8.1～9.3cm, 器高 2.2～2.9cmである。

SK 317 土壇⁽²⁾

土師器（小皿・高台付小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕口径 8.1～9.0cm, 底径 6.7～7.2cm, 器高 0.85～1.1cmで器壁は厚く、浅い。

〔高台付小皿〕小皿に高台をつけたもので、器形はSE 505 井戸のものに似る。

〔杯〕口径 12.2～13.9cm, 底径 8.7～9.6cm, 器高 2.2～3.05cmである。

SE 610 井戸⁽³⁾

土師器（小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕口径 7.9～8.8cm, 底径 6.6～7.3cm, 器高 1.0～1.2cmで器壁が厚く浅い。

〔杯〕口径 12.4～13.9cm, 底径 8.3～9.6cm, 器高 2.1～2.9cmである。

以上をまとめると、

1. 小皿は口径約 8.0～9.0cmに集中し、底径は約 6.3～7.5cmで、器高は約 1cm前後である。器壁が厚く、口縁が尖り、浅いものが多い。
2. 高台付小皿には二種類あり、粘土紐の輪をはりつけたような高台をもつSK 505 土壇、SK 407 土壇、SK 317 土壇出土のものと、外反する高台をもつSE 514 井戸、第4次MP27区黒褐色土出土のものがあり、後者のものがやや新しい時期のものと思われる。量は多い方である。
3. 杯は口径約 12～14cmの間であるが、口径 12.5～13.5cmの間に集中し、底径は約 8.5～9.5cmの間が多く、器高は約 2～3cmである。
4. 他の土師器としては盤がある。
5. 大宰府史跡第38次調査SK 835 土壇はⅡ-2類とⅡ-3類があり、そこから特小皿が2点出土している。ここでは新しい方をとってⅡ-3類に含めた。また同じく口径 16.2cmの高台付杯や盤も出土しているが、どちらに属するか不明である。
6. 青磁の中では7C類が多くなり、6類白磁、8類青磁が出現している。

なお大宰府史跡第33次調査SD 605 溝の4層から「貞応三年十一月日」（1224年）銘の木札が発掘され、その層からはⅡ-2類とⅡ-3類の土師器がほぼ同量出土していて、Ⅱ-2類か

らⅡ－3類への移行期ないしⅡ－3類の初頭と考えられ、共伴磁器類はⅡ－3類に含めたが、瓦器についてはⅡ－2類の終末の可能性が大きい。

Ⅱ－4類

この類の例は多く、SK 501 土坑、SK 513 土坑、SK 309 土坑、SK 424 土坑、SD 601 溝、SD 603 溝、SE 609 井戸、SX 101 不明遺構、浦城跡Ⅱ－2類などである。

SK 501 土坑⁽¹⁾

土師器（小皿・杯・大杯・特大杯）がある。

〔小皿〕口径 7.5～8.4cmであるが、口径 7.7～8.4 cmに集中し、底径 5.1～6.6cmで、器高 1.0～1.9cmである。

〔杯〕口径 11.25～12.65cmであるが、口径 11.8～12.65cmに集中し、底径 7.4～8.8cm、器高 2.2～2.8cmである。

〔大杯〕口径 15.6～16.5cm、底径 11.2～11.6cm、器高 2.9cmであり、量は多くない。

〔特大杯〕口径 18.75cm、底径 13.0cm、器高 3.3cmで、これ1個のみである。

SK 513 土坑⁽¹⁾

土師器（小皿・杯）がある。

〔小皿〕口径約 7.8～8.4cm、底径約 5.4～6.2cm、器高約 1.2～1.5cmである。

〔杯〕口径 11.1～12.1cm、底径約 7.0～8.2cm、器高約 2.1～2.9cmである。

SK 309 土坑⁽²⁾

土師器（小皿・杯）がある。

〔小皿〕口径 8.1～8.4cm、底径 6.2～7.0cm、器高 1.1～1.4cmである。

〔杯〕口径 11.7～12.6cm、底径 7.2～8.5cm、器高 2.2～2.5cmである。

SK 424 土坑⁽²⁾

土師器（小皿・高台付小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕口径 8.1～8.4cm、底径 5.8～6.05cm、器高 1.15～1.3cmである。

〔高台付小皿〕口径 8.65～9.0cm、器高 2.1～2.15cmである。高台は外彎している。

〔杯〕口径 11.8～12.7cm、底径 7.1～8.3cm、器高 2.4～2.8cmである。

SD 601 溝⁽³⁾

土師器（小皿・杯・大杯）がある。

〔小皿〕口径 7.5～8.4cm、底径 5.2～6.5cm、器高 1.0～1.4cmである。

〔杯〕口径 11.6～12.8cm、底径 7.0～8.4cm、器高 2.2～3.2cmで、これより大きいⅡ－3類の杯も少量ある。

〔大杯〕口径 15.2cm、底径 11.0cm、器高 3.2cmである。

SD 603 溝⁽³⁾

土師器（小皿・高台付小皿・杯・大杯）がある。

〔小皿〕口径 7.8～8.1cm，底径 5.3～6.45cm，器高 1.1～1.4cmである。

〔高台付小皿〕口径 8.7cm，器高 2.3cmで，高台はやや外反気味である。

〔杯〕口径約 11.6～12.8cm，底径 6.8～8.45cm，器高 2.4～3.2cmである。

〔大杯〕口径 16.0～16.6cm，底径 11.4～11.8cm，器高 3.0～3.2cmである。

SE 609 井戸⁽³⁾

土師器（小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕口径 8.0～8.9cmであるが，口径 8.0～8.45cmに集中している。底径 5.1～7.1cm，器高 1.0～1.3cmである。

〔杯〕口径 11.6～13.0cmであるが，約 11.8～12.6cmの間に集中している。底径も 7.3～9.4cmであるが，7.3～8.5cmに集中する。器高は 2.1～3.3cmで 2.1～2.9cmに集中する。

SX 101 不明遺構

今回報告するもので，土師器（小皿・杯）がある。

〔小皿〕口径 7.6～8.3cm，底径 5.8～6.55cm，器高 1.1～1.5cmである。

〔杯〕口径 11.6～12.45cm，底径 7.8～8.5cm，器高 2.4～2.9cmである。

浦城跡Ⅱ—2 類⁽¹²⁾

土師器（小皿・杯）がある。

〔小皿〕口径 7.6～8.4cm，器高 0.9～1.25cmである。

〔杯〕口径 11.2～12.5cm，器高 2.2～2.7cmである。

このほか口径 8.25～8.8cm，器高 1.65～2.1cmのやや深めの小皿もある。

以上をまとめてみると，

1. 小皿は口径 7.5～8.5cm，底径 5.1～7.6cm，器高 0.8～1.6cmである。
2. 高台付小皿は口径 8.65～9.0cm，器高 2.1～2.3cmで，高台はやや外反している。
3. 杯は口径 11.4～12.8cmで，底径 6.9～8.6cm，器高 2.0～3.0cmである。
4. 大杯は口径 15.2～16.5cm，底径 11.0～11.8cm，器高 2.9～3.2cmである。量は少ない。
5. 特大杯は口径 18.75cm，底径 13.0cm，器高 3.3cmで，極めて少ない。
6. 大宰府史跡第38次調査 SK 823 土坑の土師器はⅡ—4 類のほかⅡ—5 類をも含んでいるがここから高台付杯が出土していて，口径 12.8cmであるので，一応Ⅱ—4 類に含めた。

Ⅱ—5 A類

従来のⅡ—5 A類のうち，杯にあまり変化はないが，小皿・特小皿に大きく二つに分離でき

るものがあり、古手のものをⅡ－５Ａ類、新しいものをⅡ－５Ｂ類とした。

Ⅱ－５Ａ類にはいるものとしてＳＤ 602 溝，大宰府史跡第38次調査ＳＫ 830 土壇，ＳＫ 333 土壇，ＳＫ 621 土壇，ＳＫ 304 土壇，大宰府史跡第38次調査ＳＫ 822 土壇，同ＳＫ 823 土壇などがある。

SD 602 溝⁽³⁾

土師器（小皿・杯）が出土している。

〔小皿〕およそ口径 7.4～ 8.3cm，底径 5.6～ 6.6cm，器高 1.1～ 1.3cmである。

〔杯〕杯は大きく二つに分かれ，(1) は口径 11.8～ 12.6cm，底径 7.3～ 8.7cmで，7.7～ 8.7cmに集中し，器高 2.4～ 3.0cmで，Ⅱ－４類の系統を引くが器高がやや高くなっている。

(2) は口径 11.7～ 12.6cm，底径 6.7～ 7.8cm，器高 3.0～ 3.5cmで，(1) より底径が小さく，器高が高くなっていて，Ⅱ－５類の杯になっている。この両者は明らかに共伴であり，時期的にはⅡ－５類の範囲にはいるが，(1) はⅡ－４類杯とⅡ－５類杯との中間形態をとっている。このⅡ－４類杯とⅡ－５類杯との中間形態は大宰府史跡第38次調査ＳＫ 830 土壇からも出土している。

大宰府史跡第38次調査SK 830 土壇⁽¹¹⁾

土師器（特小皿・小皿・杯）瓦器質土器，青磁，白磁が出土している。

〔特小皿〕口径 6.6～ 6.8cm，底径 5.0～ 5.3cm，器高 1.4～ 1.5cmで，Ⅱ－５Ａ類の特小皿としては口径がやや大きい。

〔小皿〕口径 8.0cm，底径 6.0cm，器高 1.0cmである。

〔杯〕口径約 12.1～ 12.8cm，底径約 7.2～ 8.6cm，器高 2.4～ 3.1cmである。Ⅱ－５Ｂ類の杯も少量であるが，Ⅱ－４類杯とⅡ－５類杯との中間形態を示し，時期的にはⅡ－５Ａ類である。

SK 333 土壇⁽²⁾

ここからは特小皿・小皿・高台付小皿・杯が出土している。

〔特小皿〕口径 6.9～ 7.6cm，底径 5.1～ 5.6cm，器高 1.3～ 1.85cmである。

〔小皿〕口径 7.7～ 8.15cm，底径 5.8～ 6.5cm，器高 1.0～ 1.55cmで，同じ類の小皿とくらべるとやや口径が大きいところに集中している。

〔高台付小皿〕高台の高いものがある。

〔杯〕口径 11.8～ 13.0cmであるが，11.8～ 12.6cmに集中し，底径 7.0～ 8.2cm，器高 2.8～ 3.3cmである。

SK 621 土壇⁽³⁾

土師器（小皿・杯）があり，特小皿はない。

〔小皿〕口径 7.4cm，底径 6.3～ 6.6cm，器高 1.2～ 1.3cmである。

〔杯〕口径 11.8～ 12.9cm，底径 6.9～ 8.3cmであるが，7.4～ 8.3cmに集中し，器高 2.7～

3.8cmである。

特小皿がなく、決め手はないが、小皿が大きいのでⅡ－5 A類に含めた。

SK 304 土坑⁽²⁾

土師器（特小皿・小皿・高台付小皿・杯・大杯）がある。

〔特小皿〕口径 7.5cm，底径 5.0cm，器高 1.6cmである。

〔小皿〕口径 7.1～7.9cm，底径 4.5～6.6cm，器高 0.9～1.3cmである。

〔杯〕口径 12.2～13.2cm，底径 7.2～8.5cm，器高 2.75～3.2cmである。

〔大杯〕口径 15.1cm，底径 8.9cm，器高 3.65cmである。

大宰府史跡第38次SK 822 土坑⁽¹¹⁾

土師器（特小皿・小皿・高台付小皿・杯・高台付杯）がある。

〔特小皿〕口径 7.2cm，底径 4.9cm，器高 1.9cmである。

〔小皿〕口径 7.3～8.0cm，底径 5.3～6.4cm，器高 0.9～1.3cmである。

〔高台付小皿〕口径 7.0cm，器高 1.9cmである。

〔杯〕口径 12.3～13.0cm，底径 7.0～8.4cm，器高 2.6～3.2cmである。

大宰府史跡第38次調査SK 823 土坑⁽¹¹⁾

土師器（特小皿・小皿・高台付小皿・杯・高台付杯）が出土している。

〔特小皿〕口径 7.1～7.3cm，底径 4.9～5.0cm，器高 1.3～2.1cmである。

〔小皿〕口径 7.3～8.3cm，底径 5.4～6.5cm，器高 0.8～1.6cmである。

〔高台付小皿〕口径 7.7～7.8cmのものと、口径 8.8cmのものがある。

〔杯〕口径 11.3～13.6cm，底径 6.6～9.0cm，器高 2.3～3.2cmで、かなりばらつきが大きい。

〔高台付杯〕口径 12.8cm，器高 3.4cmである。

以上をまとめると、

1. 特小皿が急増し、およそ口径 6.6～7.6cm，底径 4.9～5.6cm，器高 1.3～2.9cmである。
2. 小皿はさらに小形化し、口径 7.05～8.4cm，底径約 5.1～6.6cm，器高約 0.8～1.9cmで、口径は8cm以下のものが多くなる。
3. 高台付小皿は小皿に低い高台をつけるものと、高台付特小皿とでもよぶべき、特小皿に高い高台をつけたものなどがある。
4. 杯はⅡ－4類の系統を引き、Ⅱ－4類杯とⅡ－5類杯との中間形態を示すSD 860溝や、大宰府史跡第38次調査SK 830土坑の杯が共伴することもある。
5. 杯は口径約 11.2～13.2cm，底径 6.6～8.5cm，器高約 2.6～3.6cmで、Ⅱ－4類の杯にくらべ、口径と器高が大きくなり、底径は小さくなっている。
6. 大杯は口径 15.1cm，底径 8.9cm，器高 3.65cmである。

7. 高台付杯は口径 1.28cm, 器高 3.4cmである。

Ⅱ－5 B類

この類にはいるものとして SE 516 井戸, SD 502 溝, 大宰府史跡第43次調査 SK1101土壇, 同 SK1103土壇, 同第33次調査 SK 641 土壇がある。

SE 516 井戸⁽¹⁾

土師器(特小皿・小皿・杯)がある。

〔特小皿〕口径 6.2～7.1cm, 底径 3.8～4.6cm, 器高 1.4～1.7cmであり, 小皿より量は多い。

〔小皿〕口径 7.3～7.78cm, 底径 5.5cm, 器高 0.95～1.25cmで小形になっている。

〔杯〕口径 11.9～13.25cm, 底径 6.4～8.2cm, 器高 2.6～3.4cmである。

SD 502 溝⁽¹⁾

土師器(特小皿・小皿・杯・大杯)が出土している。

〔特小皿〕口径 6.8cm, 底径 4.4cm, 器高 1.2cmである。

〔小皿〕口径 7.7cm～8.7cm, 底径 5.5～6.8cm, 器高 1.0～1.1cmである。

〔杯〕口径 11.7～13.3cm, 底径 6.7～8.4cm, 器高 2.4～3.4cmである。

〔大杯〕口径 15.0～15.2cm, 底径 9.0～9.4cm, 器高 3.3～3.4cmである。

大宰府史跡第43次調査SK1103土壇⁽¹¹⁾

土師器(特小皿・小皿・杯), 青磁片が出土している。

〔特小皿〕口径約 5.8～6.6cm, 底径 4.0～5.0cm, 器高 1.5～2.0cmである。量は多い。

〔小皿〕口径 7.1～7.4cm, 底径 5.6～6.3cm, 器高 0.9～1.1cmである。量は少ない。

〔杯〕口径 12.1～13.2cm, 底径 7.6～8.6cm, 器高 2.4～3.25cmであり, 底径がやや大きい。

そのほか口径 15.3cm, 底径 6.2cm, 器高 4.1cmで, 薄手で, 器高が高く底径が小さい新しい形の杯が出現している。この形の杯はあとで多く出現してくるもので, 非常に重要である。

大宰府史跡第43次調査SK1101土壇⁽¹¹⁾

土師器(特小皿・小皿・杯), 青磁片が出土した。

〔特小皿〕口径 6.2～7.4cm, 底径 4.2～5.2cm, 器高 2.8～3.1cmで, このほか口径 5.4cm 底径 3.6cm, 器高 1.8cmの小さいものもあり, また口径 7.8cmのものもある。量は多い。

〔小皿〕口径 7.4cm, 底径 6.5cm, 器高 1.0cmである。量は少なく, これ1点のみである。

〔杯〕口径 11.6～12.7cm, 底径 7.3～8.0cm, 器高 2.4～2.7cmであり, このⅡ－5 B類としては口径・底径・器高ともにひとまわり小さく, 終りに近い頃のものであろう。

大宰府史跡第33次調査SK 641 土壇⁽⁹⁾

土師器（特小皿・小皿・杯・盤）が出土している。

〔特小皿〕口径 6.4～6.8cm，底径 4.3～4.5cm，器高 1.5～1.6cmである。

〔小皿〕口径 7.8～8.8cm，底径 5.6～6.3cm，器高 1.4～2.0cmであり，全体としての径が大きい。

〔杯〕口径 12.1～12.4cm，底径 7.0～8.2cm，器高 3.0～3.3cmで，口径はやや小さく，器高が高めである。

〔盤〕口径 21.0cm，器高 3.5cmである。

以上をまとめると，

1. 特小皿はおよそ口径 5.8～7.4cm，底径 4.0～5.2cm，器高 1.4～2.1cmで，Ⅱ－5 A類にくらべ口径・底径が小さくなり，器高が高くなっている。量は小皿よりかなり多い。
2. 小皿はおよそ口径 7.1～7.8cm，底径 5.4～6.5cm，器高 0.9～1.4cmで，Ⅱ－5 A類にくらべ口径と器高が小さくなっている。量は少ない。
3. 杯はおよそ口径 11.9～12.3cm，底径 7.0～8.2cm，器高 2.4～3.3cmで，Ⅱ－5 A類にくらべてほとんど変化はなく，同大である。
4. 高台付小皿や高台付杯は今のところない。
5. 器壁が薄く，底径が小さく，器高が高い新しい形の杯が出現している。

Ⅱ－6 類

Ⅱ－5 B類に後続するものとして，当遺跡からの出土はないが，大宰府史跡第33次調査SK 624 土壇出土の土師器が考えられる。

大宰府史跡第33次調査SK 624 土壇⁽⁹⁾

土師器（特小皿・杯）が少量出土している。

〔特小皿〕口径 6.0～6.8cm，底径 4.6～5.0cm，器高 1.7～1.9cmである。

〔杯〕口径 10.8～12.0cm，底径 6.3～8.0cmであるが，6.3～7.2cmに集中している。器高は 2.6～3.3cmであるが，3 cm以上のものが多い。

以上をまとめると，

1. 特小皿はⅡ－5 B類の特小皿とくらべると口径はほぼ同じであるが，底径が大きめで，器高が高い傾向があるが，量は少ないため，明確なことはいえない。
2. 杯はⅡ－5 B類の杯とくらべると口径12cm以下で小さくなり，底径も小さくなっている。しかし器高についてはほぼ変りない。

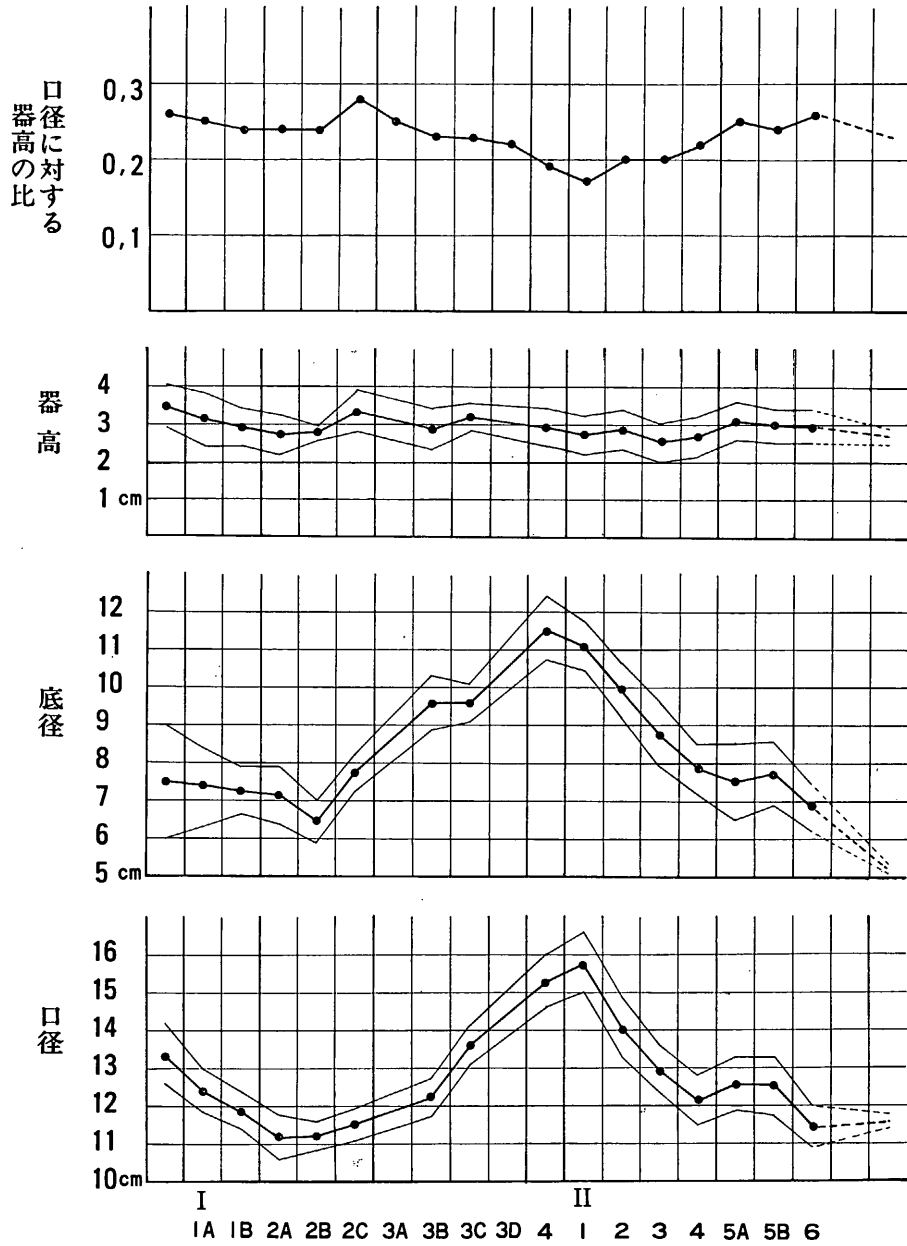
4) 土師器の器形別変化とその時期

これまで、各類ごとに、その土師器について述べてきたが、ここでは全体を通しての時代による変化について考察してみたい。

〔c・杯〕口径・底径・器高の変化を個別的にみてみると、まず口径はⅠ－１Ａ類から小さくなり、Ⅰ－２Ａ類では口径約 11.2 cmで、小皿が分離したⅠ－２Ｂ類から再び大きくなり、Ⅱ－１類の段階で最大に達し、16 cm近くになっている。Ⅱ－２類からⅡ－４類にかけて急激に小さくなるが、Ⅱ－５Ａ・５Ｂ類でもう一度口径がやや大きくなりⅡ－６類でまた小さくなっている。このことから杯は口径約 11～16 cmの間を前後していることになる。底径もほぼ同じような過程を示すが、Ⅰ－３Ｂ類の段階で、底径が大きくなり、口径の場合と異なり、Ⅰ－４類で最大に達し、これ以降は急に底径が小さくなり、Ⅱ－５Ａ類では口径が大きくなるのに、底径は相変わらず小さくなり、Ⅱ－５Ｂ類ではほぼ前類と同じであるが、Ⅱ－６類からまた小さくなっている。器高はⅠ－２Ａ類まで低くなり、その後Ⅰ－２Ｂ類からⅠ－２Ｃ類まで高くなり、Ⅰ－３Ｂ類で低くなり、次のⅠ－３Ｃ類で再び大きくなる。その後途中Ⅱ－２類でやや高くなるが、Ⅱ－３類まで低くなる傾向があり、Ⅱ－４類から高くなりⅡ－５Ａ・５Ｂ類では器高約 3 cmである。

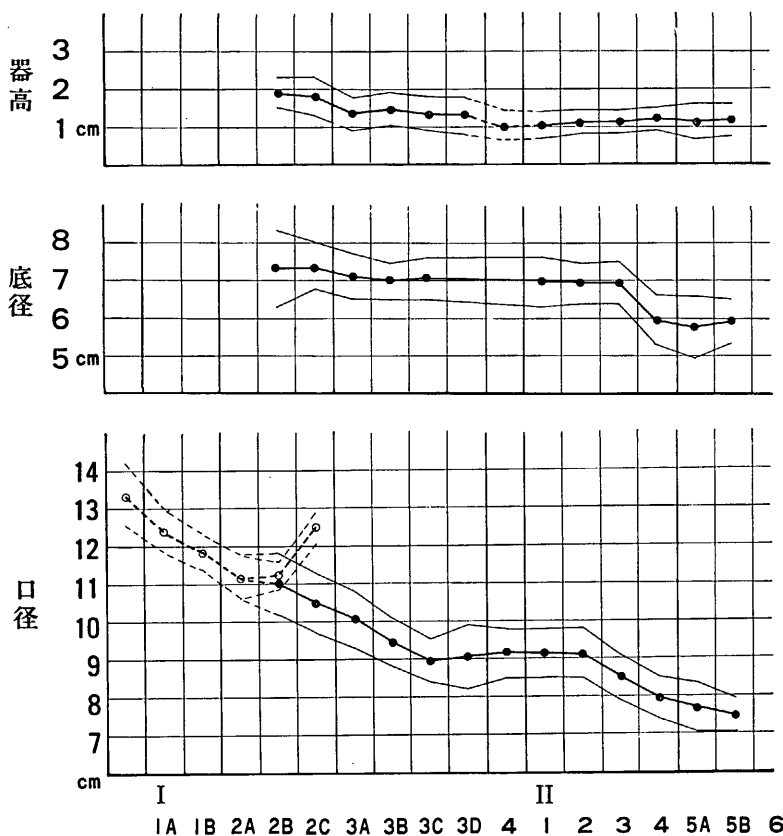
以上をまとめると、杯はⅠ－１Ａ類の前の段階からⅠ－２Ａ類の段階までその全体の大きさを小形化させていくが、次のⅠ－２Ｂ類の段階で小皿を分離させると再び大形化し始めⅡ－１類の段階で最大に達している。その途中のⅠ－３Ｂ類では底径がとくに大形化している。Ⅰ－４類およびⅡ－１類以降は大きくⅡ－１～４類とⅡ－５Ａ類以降とに分けることができる。Ⅱ－１～４類は全体的に小形化の傾向にあるが、Ⅱ－５Ａ・５Ｂ類では口径と器高が再び大きくなるが、底径は小さくなり、Ⅱ－６類からまた小形化している。また口径に対する器高の比は器形における深め・浅めを表わすが、それによるとⅠ－２Ｂ類までは器形は浅くなる傾向にあり、Ⅰ－２Ｃ類で一旦深くなるが、また浅くなりⅡ－１類で最も浅く、Ⅱ－２類以降Ⅱ－６類まで器形は次第に深くなっている。これは底径の変化とほぼ同じ変化を示している。底部はⅠ－３Ｃ類まではヘラ切り底のみで、Ⅰ－３Ｄ類では糸切り底のものもあらわれ、Ⅱ－１類の段階で完全に糸切り痕になっている。

〔b・小皿〕Ⅰ－２Ｂ類の段階で杯から分離したもので、Ⅱ－６類ではいまのところみられない。口径の変化は大きく三つに分れる。最初はⅠ－２Ｂ類の小皿の出現からⅠ－３Ｃ類にかけて口径は次第に小さくなり、約 9 cmになる。次のⅠ－３Ｃ類からⅡ－２類までは口径 9 cmをやや越える大きさで、ほとんど変化はみられない。次にⅡ－３類からⅡ－５Ｂ類にかけて再び小さくなっていく。底径も大きく三つに分れる。最初はⅠ－２Ｂ・２Ｃ類で、底径は約 7.2 cmで次はⅠ－３Ａ類～Ⅱ－３類で底径はほぼ 7.0 cmで変化はなく、最後はⅡ－４類～Ⅱ－５Ｂ類で



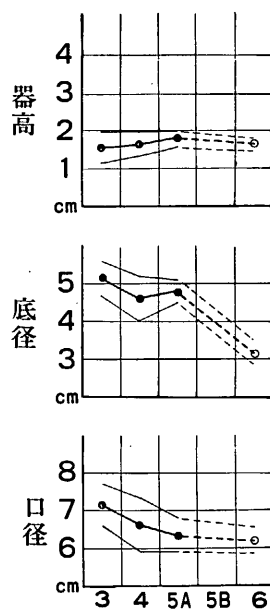
2表 土師器杯の法量推移

(上下細線は集中範圍を示す)



小皿

3表 土師器・小皿・特小皿の量推移
(上下の細線は集中範囲を示す)



特小皿

底径は約 6.0 cm 程度で、各段階ごとに小さくなっている。器高も大きく三つに分かれ、最初は底径と同様にⅠ－2 B・2 C 類で器高はほぼ 1.8 cm で、次はⅠ－3 A 類からⅠ－3 D 類で、器高はほぼ 1.4 cm である。最後はⅠ－4 類からⅡ－6 類までで、器高は約 1.1 cm 前後で低くなっている。これはⅠ－4 類から糸切り底が大半を占め、底部が平坦になることに起因していると思われる。底部はⅠ－3 C 類まではヘラ切り底で、Ⅰ－3 D 類に糸切り底が出現し、その後半では量も多くなり、Ⅰ－4 類では大部分を占めるものと思われる。Ⅱ－1 類以降はすべて糸切り底である。

〔a. 特小皿〕特小皿の形態をもつものはⅡ－2 類から少量散見するが、量が多くなるのはⅡ－5 A 類からで、小皿が衰退すると共に、特小皿が主体を占めるようになる。口径はⅡ－5 A 類からⅡ－6 類にかけて小さくなり、底径はⅡ－5 A 類からⅡ－5 B 類にかけて小さくなるが、Ⅱ－6 類でやや大きくなり、それ以降はまた小さくなるようである。器高はⅡ－5 A 類からⅡ－6 類にかけて高くなり、その後はあまり変化しないようである。

〔d. 大杯〕〔e. 特大杯〕Ⅱ－4 類からⅡ－5 B 類にかけてみられ、口径は約 3 cm 単位で大きくなり、器高は杯と同じかそれより高くなるものである。

〔f. 托〕脚付小皿とでもいうべき高い脚をもつものはⅠ－1 B 類にあるが、托とよんでよいものはⅠ－2 A 類に現れる。量は特にⅠ－2 B・2 C 類に多く、Ⅰ－3 A 類にはほとんど無く、あっても残存程度のもと考えられる。器形についても大きな変化はなく、高台内にはヘラ切り痕と板目が残るものもある。使用法としては椀や高台付椀とのセットが妥当であろうが、そのほか君畑遺跡12号墓では托と小皿がほぼ同数に近く、小皿とのセットも考えられる。黒色土器にみられる高台部に鏝についたものがあるが、これは托に椀をのせた形をあらわしたものである。

〔g. 椀〕ヘラ切り底をもつ椀で、底部は丸味をおび、丸底椀とでもよぶべきであろう。いまのところⅠ－2 B 類に出現し、それも後半に多くなるようである。Ⅰ－2 C 類で量が最も多くなり、Ⅰ－3 A 類では量も少なく、Ⅰ－3 B 類ではわずかに残る程度で消滅する。器形はⅠ－2 B 類では器高が高く、Ⅰ－2 C 類では、器高がやや低くなり、底部の丸味もやや弱くなり、平底に近いものもあらわれてくる。口縁はⅠ－2 B 類ではまっすぐか小さく外彎する程度で、Ⅰ－2 C・3 A 類では外反するものが多くなる。内面にヘラナデが施されるものもある。

〔h～k. 高台付椀〕大きくわけて三つの時期に分かれる。Ⅰ－1 A・B 類は、高台付平底椀とでもいうもので、体部が直線的に開き、高台はヘラ切り底の端につけられる。Ⅰ－2 A～C 類は高台付丸底椀とでもいうべきもので、体部は丸味があり、椀のヘラ切り底も丸味をもち、高台は底部の端よりやや内側につき、高台近くに底部の端のふくらみがみられる。口縁はまっすぐなものから、外反するものへと変化している。Ⅰ－3 A～3 C 類は高台付丸底杯といってよいもので、椀部は浅く、口が大きく開いている。椀部の底径が大きくなり、底部の端のふ

くらはみは、口縁と高台との中間の位置にまで上ってきている。高台は断面三角形に近く、やや低くなっている。内面のヘラナデはⅠ－２Ｂ類からは確実にみられる。大きさは大きく４つに分かれ、口径９ｃｍ前後のものを〔h. 高台付特小碗〕、口径１２ｃｍ前後のものを〔i. 高台付小碗〕、口径１３～１５ｃｍのものを〔k. 高台付大碗〕としたが、体部が丸味をもちだすⅠ－２Ａ類では高台付小碗の量が多く、Ⅰ－２Ｂ類ではその傾向は引きつがれるが、高台付碗も多くなりはじめている。Ⅰ－２Ｃ類の時期では高台付小碗は少なく、かわりに高台付碗が多く、高台付大碗もそれに次いで多い、Ⅰ－３Ａ類以降では量は少なく、Ⅰ－３Ｂ類ではわずかにみられる程度である。このようにⅠ－３Ａ類から高台付碗が急速に衰退していくのはいかなる理由によるのか明確な答えはないが、この類から共伴しはじめる瓦器碗や白磁碗の存在があり、また木製碗の普及も考えられ、いまのところこのいずれとも決定しがたい。

〔m. 丸底杯〕ヘラ切り底の底部を指で押しだして丸味をもたせたもので、口径の割に器高は低い。丸底の碗が衰退するⅠ－３Ａ類の時期に出現してくることから、碗から丸底杯への転換も考えられる。Ⅰ－３Ａ類の丸底杯はⅠ－２Ｃ類の碗の口縁のようにやや外反するものが多い。Ⅰ－３Ａ～３Ｄ類の主体を占めるが、Ⅰ－４類になると、杯にとってかわられ、少量出土するのみであり、また糸切り底の丸底杯も現れてくる。Ⅱ－１類の初頭にもわずかに残り小さめの糸切り底をもっている。内面にはヘラナデが施され、滑らかであるが、Ⅱ－１類の糸切り底のものにはヘラナデはみられない。

〔n. 蓋〕Ⅰ－１Ａ以前には擬宝珠形のつまみがつく蓋もあり、やや大形品であり、器面をヘラみがきしたのものもある。Ⅰ－１Ａ類には内黒土器の例しかないが、口径が小さくなっている。しかしそのわりには器高は高い。Ⅰ－２Ｂ類の例では口径はやや小さくなる程度であるが、器高が低く、扁平になっている。このことはⅠ－２Ｃ類でもほぼ同様である。Ⅰ－３Ｂ類に１点あるのみで、ほぼ終末と思われる。なおこの蓋の対象となるものは、Ⅰ－１Ａ類以前では高台付杯などがあるが、それ以降は蓋の方が口径が小さく、せいぜいⅠ－１Ａ類では杯か、Ⅰ－２Ｂ類以降では小皿にもとめられるが、それよりも小さな場合もある。

〔p. 耳皿〕量はいずれの類でも少なく散見する程度である。Ⅰ－１Ａ類以前の例では、高台がついているし、Ⅰ－２Ｂ類では小形の皿を折り曲げていて、両者とも耳皿用としてつくられている。Ⅱ－１類では皿を利用してつくられたものである。

〔f. 高台付小皿〕確実な例ではⅡ－１類からであるが、その初頭にはまだ現れていない。Ⅱ－１類のものは皿に小さな断面三角形の高台が垂直につくもので、ほかに薄くやや高い高台のものもあり、量は多い。Ⅱ－２類では断面三角形の高台が開き気味につけられている。量はあまり多くない。Ⅱ－３類では前類と同じく断面三角形の高台を開き気味につけるものがあるが、粘土紐を輪にして貼り付けたような簡単なもので、底面の一方に片寄ったものが多い、こ

のほか薄手で、内彎する高台をもつものもあるが、おそらく後半のものであろうと考えられる。Ⅱ－4類になると器形は小皿と同様に小さくなり、内彎の傾向をもつ高台がついている。Ⅱ－5 A類では断面三角形の小さな高台をもつものと、高くて外に開く高台をもつものがある。これ以降はまだ高台付小皿の存在は確かめられていない。このようにⅡ類の中でも高台付小皿は各類とも変化をもっていて、土師器分類の一の重要な資料となっている。

5) 小 結

このように土師器の流れをみると、Ⅰ－1類は体部のまっすぐな高台付碗の時期であり、Ⅰ－2類は体部が丸くなる高台付碗や碗それに托の時期であり、Ⅰ－3類は丸底杯で代表され、Ⅰ－4類はヘラ切り底の杯の時期と大まかに分けることができる。Ⅱ類は全体的に糸切り底の杯の時期であるが、Ⅱ－5 A類以降は特小皿に代表される。

最後ではあるが今後の問題点として次のようなことがあげられる。

1. 平安時代から鎌倉時代を通して土師器編年の見通しをたてるため、資料が少なかったり、また一級の資料ではないものまで編年に加えたため、部分的には適切でないものもあり、今後新しい資料でおきかえるべきであろう。
2. 一つの類としてあげたものの中に、単に一遺跡のみというものもあり、もうすこし類例の増加を待って肉付けすべきであろう。
3. あるいは中間形態をもってその代表例としているものもあるかもしれず、良好な資料をもつてかえていきたい。
4. 奈良時代の編年を確立することによって、平安初頭の状況が明確になると思われるが、またその段階までいたっていない。そのことはⅡ－6類以降についてもいえる。
5. 特にⅠ－3類での分類がまだ不十分で、このままだと混乱する恐れもある。またⅠ－4類についても、Ⅰ－3類との明確な一線がついていない。
6. Ⅱ－5類をA・B類に分離したが、明確な杯の変化がとらえられず、あるいはⅡ－5類のなかの前半と後半に含めてしまうべきかもしれない。
7. Ⅱ－6類はまだ不安定な類である。

このほかまだ多くの問題点があるが、現段階での一つのまとめとしておきたい。絶対年代についてはまだ仮定の段階を出ず、今後確実な資料で訂正されるべきものである。

2 磁 器 (付図5～8)

1) は じ め に

ここで図示するものは、類別できる土師器に共伴し、今までに報告された磁器類を、分類し

た項にならべたもので、これがすべての磁器類の分類ではなく、共伴の土師器が類別できないものは省略した。また土師器に共伴した磁器類をすべて図示したものでなく、空白の部分が多いが、そこに該当する磁器類が無いわけではない。なお大宰府史跡第38次調査 S D 860 溝や黒色砂質土・暗青色砂質土はここでは I-3 C~3 D 類としてあつかった。

磁器類の分類は、従来の 1~12 類の分類ではすでに窮屈になり、特に白磁の分類は従来のものでは通用しなく、それ以外のものが出現してきている。それでここでは従来の分類にこだわらず、新しく A~Z に分類しなおして説明したい。しかしこれはあくまでも説明のための仮分類であることをお断りしておきたい。

2) 磁器分類と共伴土師器

〔A〕1 類とした越州窯系の青磁で、深緑色ないし褐色を帯びた灰緑色の釉が薄くかかった青磁で、胎土は白灰色ないし灰色を呈するものが多い。床付部や見込みに重ね土の目跡が残るものが多い。底部や器形の相違でまだいくつか分類できるが、ここでは一括した。この類は土師器の I-1 A 類以前から出現しているが、一般的な遺跡で量が多くなるのは I-2 A 類頃から、良好な資料ではないが、大宰府史跡第31次調査暗褐色土出土の I-3 A 類頃にかけてと思われ、I-3 B 類ではすでに白磁にとって変わられている。その後も散見できるが、いずれも小片で量はきわめて少ない。

〔B〕2 類とした白磁で、低く巾広い高台をもち、床付部は釉をかきとられている。口縁は折り曲げて玉縁状にしている。I-2 C 類までは共伴しそうであるが、それ以降は確実な共伴例はない。

〔C〕白磁で、高台は高く、口縁はまっすぐで、口縁内側と見込みに沈線が入れている。底部に釉はかけられていない。確実なものでは I-3 C 類から II-1 類にかけてであるが、もうすこしさかのぼる可能性がある。

〔D〕白磁で、口縁が折り曲げられて丸味をもつもので、高台は高い。体部内側に沈線がはいり、外面に櫛歯による条線が描かれているものもある。同様な器形で釉が青白色を呈し、青白磁に分類したものもある。確実な例では I-3 B 類から I-3 C・D 類にかけてみられ、I-4 類や II-1 類ではほとんどみられない。

〔E〕3 類とした白磁で口縁が横に張り出し、上端は平坦である。高台は高く、口縁内側と見込みに沈線をいれられたものが多い。口縁端に刻目が入れられ輪花になるものや、細かな櫛歯の文様が描かれたものもある。2558 は外面にヘラ描きによる縦長の連続文様が描かれたもので口縁はやや丸味をもち〔D〕に似ている。I-3 B 類では量は少なく、I-4 類から II-1 類にかけて量が多い。それ以降も少量出土するが小片が多い。しかし II-4・5 A 類でも破片は

少なからず出土している。

〔F〕白磁で口縁は薄くなりながらやや外反するもので、口縁内側と見込みに沈線がはいり、高台は高い。輪花をもつものや、その下を細長くくぼませたものがあり、内面にヘラと櫛歯で文様が描かれているものもある。外面にヘラで縦長の連続文様が描かれたものもある。Ⅰ－3 B類からⅡ－1類にかけてみられるが、Ⅰ－3 A類にさかのぼる可能性もある。

〔G₁〕4類とした白磁の一部で、口縁と内面の沈線は〔E〕と同じであるが見込みに環状に釉をかきとった跡があり、高台は低く、その径はやや大きい。Ⅱ－1類にみられるが、もっとさかのぼる可能性があり、Ⅰ－3 B類にみられる鉄絵をもつものは、あるいはこの類のものかもしれない。その後も破片は少量みられる。

〔G₂〕4類とした白磁の一部で、口縁はまっすぐで、口縁内面に沈線があり、見込みに環状に釉をかきとった跡がみられ、高台は低い。Ⅰ－4類からⅡ－1類に多くみられるが、見込みに環状に釉をかきとった跡がある白磁は確実なところ、Ⅰ－3 B類から出現し、Ⅱ－1類以降にも少量出土している。

〔H〕5類として白磁で、折り曲げられた玉縁をもち、高台は特に低く、見込みに沈線がまわっている。Ⅰ－3 B類からすでに量も多く、Ⅱ－1類までその状態が続き、その後も永く破片は出土する。あるいはⅠ－3 A類までさかのぼる可能性もある。なお古く出土するものは体部が丸味をおび口径の割に器高が低く、新しく出土するものは体部は直線的で口径の割に器高が高い傾向もみられるが、はたして時代差かどうかは明確ではない。

〔I〕口縁部を小さく玉縁状に折り曲げたもので、胎土は灰色で、底部を除いて黄灰白色の釉がかけられている。高台は〔H〕にくらべるとそうとう高い。Ⅰ－3 B類からⅠ－3 D類にかけて多く出土し、Ⅰ－3 A類にのぼる可能性は強い。

〔J〕白磁の小皿で、体部はやや丸味をもち、口縁端は薄く尖っている。胎土や釉は〔I〕に似ている。Ⅰ－3 A類から出土し、Ⅰ－3 D類までが多く、Ⅱ－1類まで少量残っている。

〔K〕白磁の小皿で、見込みに段がつき、高台は低く、碗の〔I〕に似ていて、これとセットになるものであろう。Ⅰ－3 B類で最も多く、あるいはⅠ－3 A類にさかのぼる可能性がある。Ⅰ－4類まで確実に残るが、それ以降にも少量存続しそうである。

〔L〕見込みに沈線と環状に釉をかきとった跡があり、高台はやや高い。〔G₁〕・〔G₂〕か〔E〕とセットになると考えられる。Ⅰ－3 B類には今のところみられず、Ⅰ－3 C・D類からⅡ－1類にかけて多く出土するようである。それ以降も少量出土すると思われる。

〔M〕その他の白磁で、磁器の分類では1類を設ける必要のあるものもあるが、共伴資料としては数が少ないため、一括した。777のようにⅠ－3 B類にともなう薄手で体部を縦長にくぼませた白磁もあり、また見込みに櫛歯で放射状に文様を描いた小皿などはⅠ－3 B類～3 D類に出土している。

〔N〕高台は〔U〕に似るが、やや太めで、口縁はやや外反し、胎土は明灰色ないし灰白色で釉は青灰色ないし黄灰色であり、白磁と考えてよさそうである。しかしまだ青磁の可能性があり、今後注目していきたい。いずれにせよ〔U〕と同じ系統のものと考えられる。Ⅱ－1類で出現しているほかはあまり明確でない。

〔O〕6類の白磁としたもので、口の部分の釉をかきとったいわゆる口禿の白磁で、杯ないし皿、それに高台がついたもの、椀などがある。出現はⅡ－3類からⅡ－4類までが多量に出土し、その後も出土している。

〔P〕b類の白磁皿の一部で、口縁端は薄く尖り、体部に屈折があり、底面の釉がかきとられている。見込みに印花文がつけられたものが多い。Ⅱ－3類以降に出現するものと思われる。

〔Q〕白磁の瓶、壺、水注などを一括したもので、今のところⅠ－2B類から出現している。

〔R〕〔R₁〕～〔R₅〕は7類としたもので、龍泉窯系といわれ、器形や釉に大差はない。

〔R₁〕は7A類としたもので、外面は無文で、内面は沈線で区切られた区間に飛雲状文が描かれたもので、見込みにワラビ状の草花文が描かれたものも多い。SX 692出土のものは、あるいはⅡ－1類までさかのぼる可能性がある。Ⅱ－1類の段階で出現し、Ⅱ－2類では〔R₂〕と〔U〕とともに主流を占めるが、Ⅱ－3類の段階から量は多くなることも考えられるが、実際はその割合を減じている。

〔R₂〕7B類としたもので、外面は無文で内面にヘラで花文が描かれ、見込みに花文が描かれたものが多い。〔R₁〕と同様にⅡ－1類から出現しⅡ－2類では全体の割合は大きいⅡ－3類から量は多くなるかもしれないが、磁器出土の中で〔R₂〕の割合が小さくなる。

〔R₃〕7C類としたもので、外面に蓮弁が削り出されたり、描かれたもので、内面は無文で見込みに印花文がつくものもある。Ⅱ－1類に出現するがⅡ－2類までは少量で、Ⅱ－3類になると量が増し、その割合も〔R₁〕や〔R₂〕をはるかにしのぐものとなり、これ以降も青磁の主流を占めている。

〔R₄〕7D類とした内外面無文のもので、見込みに文様や文字の印文がみられる。おそらくⅡ－1類あたりから出現したものと思われるが、量や割合の変化については明らかでない。

〔R₅〕内面に細かい櫛歯やヘラで文様が描かれたもので、量は多くなく散見する程度である。Ⅱ－1類には出現しているが、そのほかは不明である。このほか外面の蓮弁に櫛歯文が入れられたものなどがあるが、明確な土師器との共伴はない。

〔S〕7類である〔R₁〕～〔R₅〕とセットになると考えられる小皿類で、d・e類を含んでいる。見込みにヘラ描きの花文や櫛歯による曲線文様が描かれたものもあり、底面は釉をかきとられている。〔R₁〕・〔R₂〕とほぼ同様な出方をするものと考えられるが、良好な資料がない。

〔T〕8類の青磁としたもので、龍泉窯系といわれている。高台は薄く床付部の釉は焼成前に

かきとられ褐色を呈している。釉は厚く、緑色ないし青緑色を呈している。胎土は灰白色ないし白色である。Ⅱ－３類から出現し量も多く、Ⅱ－４類に引きつがれ、その後も出土し、あるいは器形、釉のかきとり方をかえて続行するものと思われる。

〔Ｕ〕９類のいわゆる珠光青磁といわれるもので、中国の同安窯と同じ系統のものであろう。小皿と、小皿の体部が長く高台についたものと、碗があり、櫛歯文やヘラ描き文が描かれている。胎土は灰色ないし灰白色で、釉は灰緑色ないし灰黄色である。Ⅱ－１類に少量出現し、Ⅱ－２類、Ⅱ－３類に多くみられ、Ⅱ－４類ではやや少なくなり、その後も少量出土している。

〔Ｖ〕その他の青磁で2396を除いては〔Ｕ〕と同系統の青磁であろう。出土の仕方も〔Ｕ〕とほぼ同じである。なお2396は新しい類のものでⅡ－２類に認められる。

〔Ｗ〕１０類としたいいわゆる天目で、胎土は、灰白色の磁器質のものから暗灰色の陶質のものであり、そのほか器形・釉などに変化がみられ、細分の必要が将来出てくるであろう。確実なところではⅡ－３類から出現し、この後も永く存続している。

〔Ｘ〕１１類としたもののうち、合子類を除いた青白磁で、胎土は白色で、青白色の釉がかけられている。壺や碗のほか小形品が多い。また白磁と同形で、釉が青味がかっただけのものもある。出現はかなり古くⅠ－３Ｂ類にはすでにみられる。

〔Ｙ〕合子類で、大部分は青白磁であるが、ほかに暗褐色の釉がかけられたものもある。型押しでつくられたもので、これも古くから出土しⅠ－３Ｂ類にはすでに出現している。

〔Ｚ〕１２類とした高麗青磁で、Ⅰ－３Ｂ類には少量ながら出現し、象眼されたものはⅡ－３類以降によくみられ、Ⅱ－４類にやや多い。

3) 土師器編年に対する磁器類の対照

Ⅰ－１Ａ類以前からⅠ－２Ｃ類ないしⅠ－３Ａ類頃までは、〔Ａ〕が主体で、Ⅰ－２Ｂ類前後が量も多いと考えられる。それに少量であるが確実なところではⅠ－２Ｂ類まで〔Ｂ〕が散見される。なお同じころ〔Ｍ〕の777のような薄手の白磁もある。Ⅰ－３Ａ類に共伴する確実な磁器の資料例は少なく、〔Ｋ〕などが少量あることがわかっているのみで、このⅠ－３Ａ類の資料が増えれば、あるいは白磁や青白磁がそこまでさかのぼる可能性もある。

Ⅰ－３Ｂ類になると白磁が圧倒的に多くなり、〔Ａ〕は少量にすぎない。白磁は〔Ｄ・Ｆ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｑ〕が出現し、そのほか高台の高い〔Ｃ〕～〔Ｅ〕や見込みに環状のかきとりがある〔Ｇ₁〕ないし〔Ｇ₂〕があるが、確実な〔Ｅ〕や〔Ｌ〕がないのが注目される。青白磁では〔Ｄ〕に器形が同一のものや合子の蓋や壺がある。また〔Ｚ〕である高麗青磁も極めて少ないが無文のものがある。

Ⅰ－３Ｃ・Ｄ類になるとあらたに〔Ｃ〕や確実な〔Ｅ〕、〔Ｌ〕、〔Ｙ〕である青白磁合子

がある。このⅠ－３Ｂ類からⅠ－３Ｄ類にかけての白磁の特徴は、外面にヘラや櫛目による縦文様が連続してつけられたものがみられることで、また〔M〕に入れた見込み、中央から放射状にのびる櫛歯文をもつ小皿の存在などである。

Ⅰ－４類～Ⅱ－１類になると、〔D〕はほとんどみられず、〔E〕～〔H〕が主体を占め、〔I〕、〔J〕の量も少なくなる。それと同時に、Ⅱ－１類では別の〔U〕の系統の白磁と思われる〔N〕が出現する。

このⅡ－１類ではまた龍泉窯系の〔R₁〕～〔R₅〕や同安窯と同じ系統の〔U〕が少量ながら出現しはじめて、従来の白磁にとってかわる。すなわち〔R₁〕～〔R₅〕では〔R₁〕、〔R₂〕が割合的に多く、〔R₃〕は極少量である。Ⅱ－２類でも〔R₁〕、〔R₂〕が〔U〕とともに大きな比重を占めるが、〔R₃〕はわずかにすぎない。

Ⅱ－３類になるとさらに変化に富む。すなわち新たに口禿の白磁である〔O〕と〔P〕、龍泉窯系の青磁〔T〕が出現し量も多い。そして〔R₃〕が量も多く、割合も大きくなり、〔R₁〕・〔R₂〕は比重が後退してしまっている。また高麗青磁では象眼をもつものが確実に出現し、天目である〔W〕もあらわれる。

Ⅱ－４類になると〔R₃〕があいかわらず多く、SD 601 溝では出土した磁器46点中〔R₁〕は2点、〔R₂〕は1点であるのに対し、〔R₃〕は17点と多く、その他〔O〕が8点と次に多く、〔U〕は6点、〔T〕と〔E〕が4点、〔I〕が3点、〔Z〕が1点であった。また、象眼された高麗青磁もこのⅡ－４類ではやや多い。次のⅡ－５Ａ類ではSD 602 溝出土の磁器18点中〔R₃〕が5点であるが〔E〕も5点と多く、そのほか〔O〕が2点、〔U〕が2点である。

Ⅱ－５Ｂ類以降の磁器類については種類・量とも不明なものが多く、今後の課題であろう。

なお磁器の分類については横田賢次郎・森田勉両氏の研究が発表される予定であり、⁽¹⁸⁾それをも参考にしていきたい。

3 土 器 椀 類 (付図 9)

1) は じ め に

ここで土師椀類としたものは内面を黒色にいぶした内黒土器・内外面とも黒色にいぶした黒色土器・瓦器・研磨土器の椀類を総称したもので、一般的な土師器椀を含んでいない。

2) 内 黒 土 器

内面を黒色にいぶされたもので、内面にヘラみがき痕が残っている。Ⅰ－１Ａ類以前から存

在している。

- (1) I-1A類では、6次ME13区下層（4層）からは土器片数のうち内黒土器14.4%と多く黒色土器は3.2%である。内黒土器には蓋や高台のつかない碗があり、外面上半は横ナデであるが、下半部はヘラ削りが施されている。高台付碗の口縁はほぼ直縁である。
- (2) I-1B類では資料が少なく、全体の器形をうかがえるものはない。
- (3) I-2A類では、体部が丸味をもち、口縁が小さく外反するものがある。
- (4) I-2B類では口縁は強くなでられ、ほぼ直立に近く、胴部との境に稜線がつき、口縁端は外へ小さく折れる傾向がある。
- (5) I-2C類では口縁はやや幅広く強くなでられ、口縁は開き気味に外反し、体部との境に稜線がついている。高台は高めで、口縁外面にもヘラみがきのわずかな痕跡が残っている。
- (6) I-3A類では大きく口を開き、浅めとなり、口縁は外反し、体部と底部との境は厚くなり稜線がみられる。
- (7) I-3B類では口縁はまっすぐで、器壁は薄く、体部の稜線はほとんどみられない。I-3B類が内黒土器の終末と考えられ、次のI-3C類に残るとしても少量であろう。

以上のように特にI-2B類からI-3A類にかけて顕著のように、ほぼ土師器の高台付碗と同じ器形の変化をとっている。

3) 黒 色 土 器

内外面とも黒色にいぶされたもので、内外面ともヘラみがきされている。やはりI-1A類以前から存在している。

- (1) I-1A類の**1049**は小形の碗で、体部は丸味をもち、外面上半と内面はていねいに研磨され、外面下半はヘラ削りが施されている。**1050**は小片から復原したもので、体部が内彎しながら開くものである。**1051**は高台接合部に2本の沈線を入れ、その接合を強固にしている。
- (2) I-1B類には良い資料がなく、器形などは不明である。
- (3) I-2A類では、体部は丸味をもち、口縁はほぼ直立に近く、口縁端が小さく外に折れ口縁内側に稜線がつくものである。
- (4) I-2B類では、同類の内黒土器にみられるように、口縁は強くなでられ、ほぼ直立に近く、胴部との境に稜線がつき、口縁は外へ小さく折れるものと、胴部が丸味をもち口縁が外へ小さく折れるものなどがあり、いずれも口縁内側に稜線がみられる。また底部に鐳のつくものもある。
- (5) I-2C類では、口縁は強くなでられ外反し、体部との境に稜線がつき、高台は高い。このほか底部と高台との接合部に鐳のつくものや、小皿もある。

(6) I-3A類では、口は大きく開き、浅めである。口縁と底部との境が厚くなり、稜線がつくものも多い。

(7) I-3B類でも少量出土しているが、全体の器形をうかがえるものがない。この頃が黒色土器の終末であろう。

以上のように黒色土器も内黒土器と同様に土師器碗とほぼ同様な変化をみせている。

4) 瓦 器

(1) 瓦器は内黒・黒色土器の衰退期であるI-3A類頃から出現すると思われるが、確実なI-3A類共伴資料がなく、おそらくその頃と思われるものが、大宰府史跡第31次調査暗褐色土から出土している。目の細かいヘラみがきを底部内面には一方向に、体部内外面は横方向に施している。口縁内面に沈線が入れている。表面は光沢があり銀白色を呈している。

(2) I-3B類の6AYECK内関連遺跡出土のものは口縁内側に沈線が入れられ、内面の見込みに大きく研磨が施され、内面はヘラの先のような細かい研磨が横方向に密に施されている。外面はやや乱雑に横方向か右下りの研磨がみられる。内外面灰黒色で、銀色の光沢がみられるものもある。そのほか大宰府史跡第38次調査SK 855土坑出土のものも、内外面のヘラみがきはていねいである。胴部中位に稜線がつくるものもある。

(3) I-3C・D類では特にまとまった器形というものはないが、ヘラみがきは前類にくらべやや粗雑になり、胴中位が肥厚しているものや、口が開き、浅めで体部がなめらかに丸味をもち、丸底杯のような形をもつもの、口が大きく開き体部がやや直線的なものなどがある。確実にI-3C類に属するものは、内面から口縁外面にかけて黒味をおび他は灰白色である。I-3D類のものは内面が銀白色を呈している。

(4) I-4類では、口縁が肥厚しその下の器壁が薄くややくぼみ、その下が肥厚する部分があるものと、体部が直線的なものとがあり、高台はいずれも低い。研磨は粗く、ヘラナデだけと思われるものもある。器面は灰白色ないし暗灰色で口縁外面が黒色を呈し光沢をもつものもある。

(5) II-1類では体部下半に肥厚する部分をもつものがあり、体部は丸味をもち深めのものもあり、ヘラみがきは粗い。器面は灰白色で、552は口縁外面が黒色を呈している。SX 863は糸切り底に高台をつけたものである。

(6) II-2類では、器形は丸味をもち、深めのものが多く、断面の凹凸は少ない。ヘラみがきは粗いものが多く、焼成が悪いためか、銀色の光沢はなく、ヘラみがきの痕跡さえよくわからないものもある。

なお九州地方の瓦器碗については森田勉氏の論文があり、⁽¹⁴⁾参照させていただいた。

5) 研 磨 土 器

器形は瓦器碗などに似ていて、内外面とも粗いヘラミがきが施されたもので、土師質であり、黒くいぶされることもなく、瓦器のような焼成をされないもので、ここでは仮に研磨土器とよんでおきたい。

(1) I-3 A類と思われるものは内面のみにへらみがきを施し、その方向は体部では横方向で、底部では一方向に平行である。器面は淡茶灰色である。

(2) I-3 B類の2519は、内面はややていねいに、外面は粗いヘラミがきが施され、灰黄色を呈している。共伴の瓦器碗とくらべるとヘラミがきに差があり、どちらかという内黒・黒色土器に近い。

(3) I-3C・D類では、大宰府SD 860溝出土のもので、内底に炭素が吸着しているものも1点みられる。なおI-3D類の大宰府・SE 870井戸出土のものは、乳白色を呈し、精選された胎土が硬質に焼成され、内面に放射状の沈線様の線がみられるところから、ヘラみがきされたものとも考えられるが、あるいはヘラナデされたものかもしれない。

この研磨土器はほぼ瓦器とともに出現しているが、同時に内黒土器・黒色土器の衰退期であり、内黒土器や黒色土器の系統を引くものと考えるのが妥当であろう。

以上のように土師器の分類と編年をし、それにとりあう磁器類、内黒・黒色土器、瓦器、研磨土器について述べてきたが、Ⅰ-3A類ないしⅠ-3B類から白磁の量が急増し、瓦器碗類も出現してくる。Ⅱ-1類ないしⅡ-2類になると青磁類が白磁にとってかわり、瓦器碗も衰退していく。これは一面では青磁類の量が急増することによっても考えられるが、木碗が普及したためと考えることもできる。Ⅱ-3類になると別の青磁や白磁も出現し、磁器類は豊富になってくる。

なお日頃から土師器、磁器類など種々の問題に対し、九州歴史資料館調査課の石松好雄、横田賢次郎、森田勉の各氏をはじめ調査課の方々から多大の御助言、御教示をいただいた。図の作成にあたっては、すべて田浦郁子氏が膨大な資料の中から、各類の土器や共伴資料を抜き出し図にまとめたものである。

参考文献

福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告

- | | | | | |
|----|-----|--------------------------|----------|---------|
| 1. | 第2集 | 「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡（1）」 | 福岡県教育委員会 | 昭和50年3月 |
| 2. | 第3集 | 「　　　　　　　　　〃　　　　　　　　　（2）」 | 〃 | 昭和51年3月 |
| 3. | 第6集 | 「　　　　　　　　　〃　　　　　　　　　（3）」 | 〃 | 昭和52年3月 |

4. 第7集 「筑紫郡太宰府町所在君畑遺跡」 昭和52年3月

大宰府史跡関係

5. 「大宰府史跡―第9・10・11次発掘調査概要」 福岡県教育委員会 昭和46年9月
6. 「大宰府史跡―昭和47年度発掘調査略報」 九州歴史資料館 昭和48年3月
7. 「大宰府史跡―昭和48年度発掘調査概報」 九州歴史資料館 昭和49年3月
8. 「大宰府史跡―第30・31・32次発掘調査概報」 九州歴史資料館 昭和49年8月
9. 「大宰府史跡―昭和49年度発掘調査概報」 九州歴史資料館 昭和50年3月
10. 「大宰府史跡―昭和50年度発掘調査概報」 九州歴史資料館 昭和51年3月
11. 「大宰府史跡―昭和51年度発掘調査概報」 九州歴史資料館 昭和52年3月

その他

12. 福岡県文化財調査報告書第45集「浦城跡」 福岡県教育委員会 昭和45年3月
13. 「筑前国分寺―昭和51年発掘調査概報」 福岡県教育委員会 昭和52年3月
14. 森田 勉 「九州地方の瓦器碗について」 考古学雑誌59―2 昭和48年11月
15. 横田賢次郎, 森田 勉 「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」 九州歴史資料館研究論集2 昭和51年3月
16. 森田 勉 「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」 九州歴史資料館研究論集3 昭和52年3月
17. 横田賢次郎, 高橋 章, 石丸 洋 「大宰府条坊の調査」 考古学雑誌60―3 昭和49年12月
18. 横田賢次郎, 森田 勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁について」 九州資料館研究論集4 昭和53年3月発行予定

付Ⅰ 6AYECK内関連遺跡の調査

一、はじめに

「6AYECK内関連遺跡」とは、今回報告した第1次調査区（6AYECK）西部に近接する地区で、1977年9月2日～10月2日にかけて、「株式会社 九州和装」の依頼を受けて、その学園建設予定地内の緊急発掘調査を、県文化課が行なったものである。

二、調査の概要

九州歴史資料館による「大宰府史跡」の調査基準方眼に従って、N 6°40' E方向の 9.5×11 mのグリットを設定した。予定地は水田であったが、花崗岩バイラン土で35cmの客土がなされていたため、9.5×11mで1 m掘り下げ、その中を更に6.5×8.5mに縮小して掘り下げた。

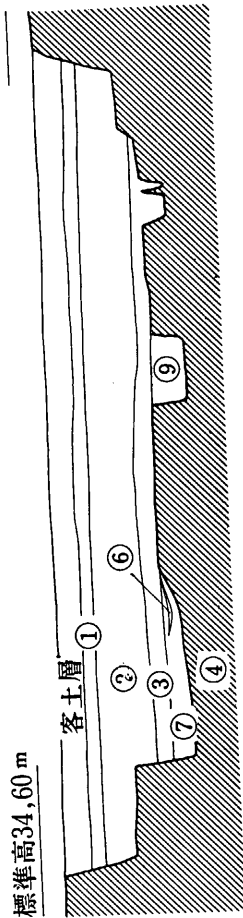
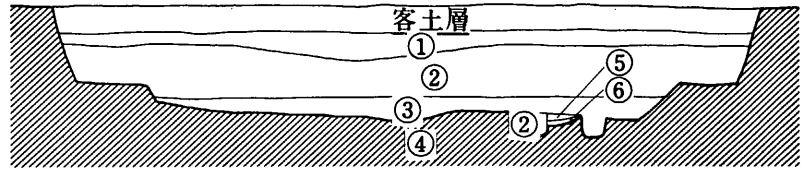
三、層 位

①層は黒褐色水田耕作土層で、上面の標高は33.9mを測る。②層は灰褐色土層で、上部は砂質であるが、下部は粘質に漸移する。③層は黒褐色粘質土層で、杭のすべてと、若干の小ピットがこの面で検出された。④層は砂利層で、出土したピットの多くが掘り込まれ、2図はこの上面での遺構出土実測図である。この層は、北東部が30～40m平均で高くなっており、東半部から南半部で低くなる。湧水がこの一段と低くなった地点で著しく、北東隅から南西隅に向けて流れ、それ以上の掘り下げを中止した。南壁の土層では、③層と④層の間に灰褐色砂層、黒色腐蝕土層・灰色粘質土層がこの順で堆積して、一段と低くなった南半部を埋めている。②～④層は、遺物包含層である。（2図）

四、遺 構

一段と高くなった北東側平垣部の西壁寄りに、3図2505のヘラ切り底土師器杯と8図2の下駄が伴出した小ピットを含めて、小ピットが集中して検出された。また、径10cm前後の杭が南東～北西にかけて検出され、径5 cm前後の杭が北東隅で検出された。南東隅では、頭大の石が7個程半円状に集積されていた。（2図）

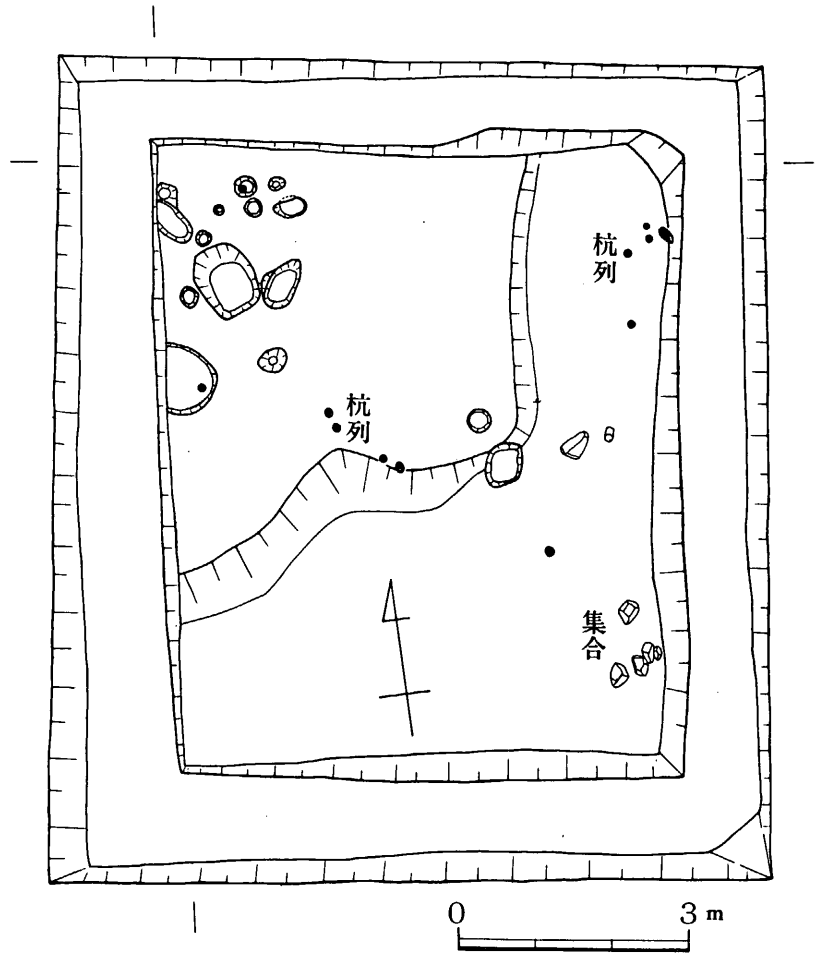
標準34,60 m



層位

- ①層 耕作土層（黒褐色）
- ②層 灰褐色土層
- ③層 黒色粘質土層
- ④層 砂利層

- ⑤層 砂利層
- ⑥層 黄褐色荒砂層
- ⑦層 灰色粘質土層



2 図 6 AYECK内関連遺跡遺構実測図

五、遺 物

1. 土 師 器 (3図 2485~2518)

3 層

b. 小皿 (1-3 B-b) (2485~2498) 口径 9.2~10.4 cm であるが、大部分は 9.2~10.05 cm の範囲にはいる。底径は 6.2~8.2 cm であるが大部分は 6.2~7.45 cm であり、器高は 1.0~1.9 cm である。器面に横ナデが、内底にナデが施され、底面にヘラ切り痕と板目がついている。灰黄色ないし灰黄褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。

n. 蓋 (2499) 口径 11.3 cm で口縁内面に凹線が入れられ、器面に横ナデがみられ、天井部にはヘラ切り痕が残っている。灰味橙色を呈し、胎土に砂粒を含まない。

m. 丸底杯 (I-3 B-m) (2500~2507) 口径 14.7~17.0 cm で、器高 2.5~4.1 cm である。口縁はまっすぐで、体部と底部との境に稜線がつくものもある。器面には横ナデがみられ、内面にヘラナデが施されている。底部周辺に指圧痕が残るものもある。底面にヘラ切り痕と板目がつくものもあるが、ヘラ切り痕はあまり明瞭ではなく、かわりに巻き上げなどの粘土紐の痕がみられるものもある。灰黄色ないし黒褐色を呈し、焼成は良好で、胎土に少量砂粒を含む。

c. 杯 (I-3 B-c) やや厚手で口径 13.1 cm, 底径 10.2 cm, 器高 3.25 cm で、器面に横ナデが、内底にナデが施され、底面にヘラ切り痕と板目が残っている。灰黄色を呈し、胎土に砂粒を含む。杯はこれ 1 点である。

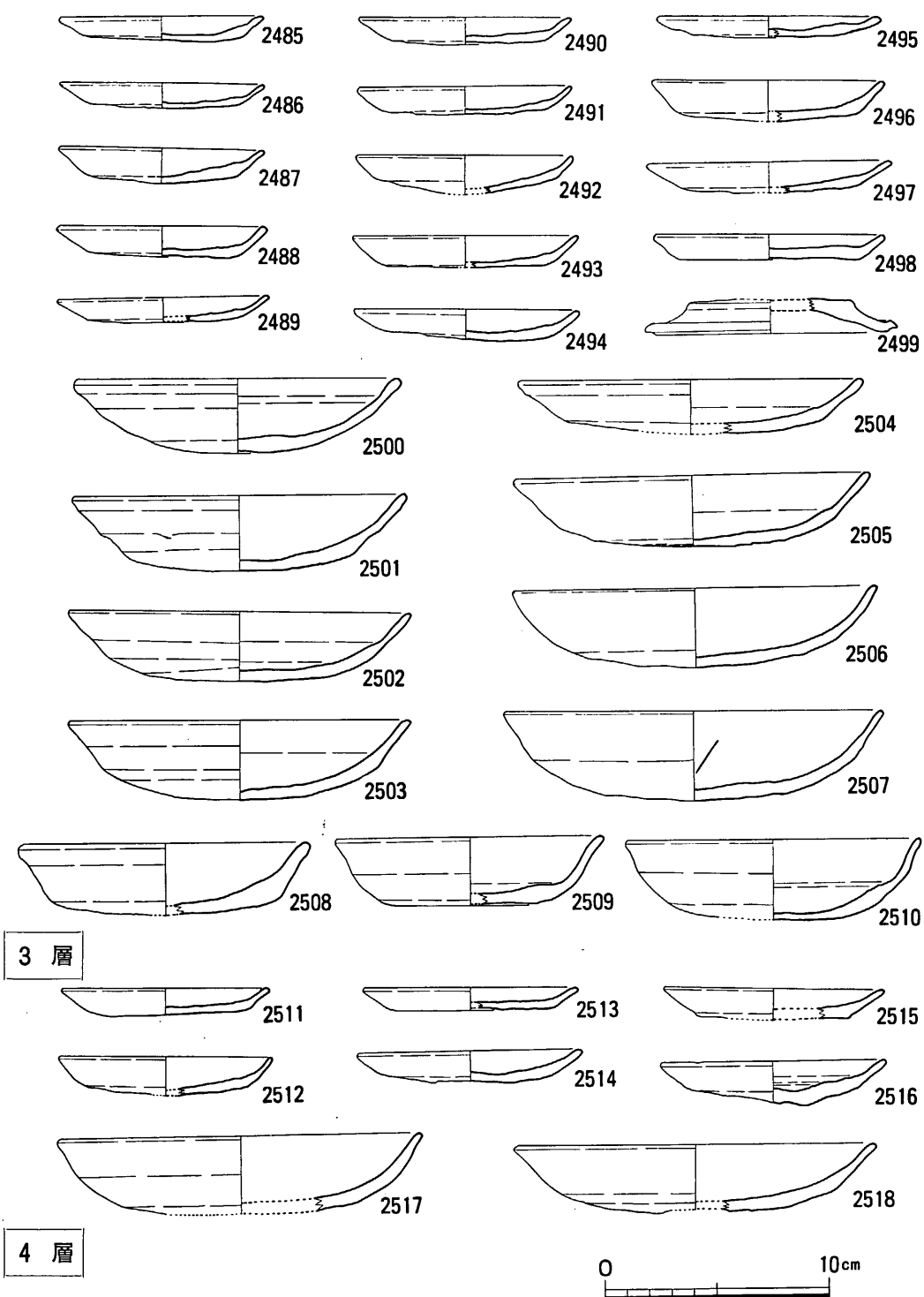
g. 碗 (I-3 B-g) (2509・2510) 2509 は口径 11.9 cm, 器高 3.05 cm と小形で、底部は平底に近い。2510 は口径 13.15 cm, 器高 3.6 cm で口縁は少し外反している。器面には横ナデが、内底にナデが施されている。底面にヘラ切り痕と板目が残っている。灰黄橙色ないし黄灰色を呈し、胎土に少量砂粒を含んでいる。量はきわめて少ない。

4 層

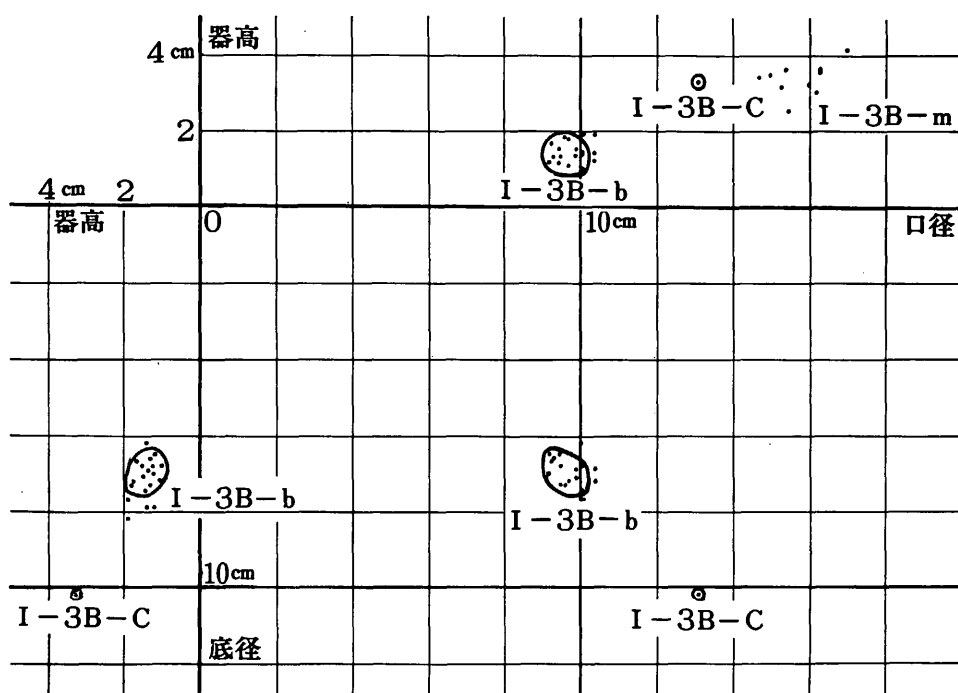
b. 小皿 (I-3 B-b) (2511~2516) 口径 9.3~10.1 cm, 底径 6.6~7.7 cm, 器高 1.05~1.9 cm である。調整などは 4 層の小皿と同じである。

m. 丸底杯 (I-3 B-m) (2517・2518) 口径 16.2~16.3 cm, 器高 3.0~3.5 cm で、調整は 4 層の丸底杯と同じである。

以上のように 3・4 層の土器に相違はみられず、I-3 B 類に属するのである。



3 圖 3 層・4 層出土土師器実測図



4表 6AYECK内関連遺跡出土土師器の法量

3 層				蓋				碗			
小 皿				№	口 径		器 高	№	口 径	底 径	器 高
№	口 径	底 径	器 高	1	11.3		1.55	1	11.9	(7.0)	3.05
1	(9.2)	(7.0)	1.2	丸 底 杯				2	13.15	(9.3)	3.6
2	9.2	6.5	1.2	№	口 径		器 高	4 層			
3	(9.25)	6.7	1.65	1	14.7		3.4	小 皿			
4	9.45	6.8	1.5	2	15.0		3.45	№	口 径	底 径	器 高
5	9.45	6.5	1.15	3	15.3		3.15	1	9.3	6.6	1.3
6	9.5	6.8	1.25	4	15.4		3.6	2	(9.6)	(7.3)	1.8
7	9.5	7.3	1.3	5	15.45		2.5	3	(9.7)	(7.2)	1.05
8	(9.7)	(7.2)	1.75	6	16.0		3.2	4	9.9	7.1	1.5
9	10.05	(7.45)	1.45	7	(16.3)		3.6	5	(9.9)	(6.9)	1.35
10	10.05	6.2	1.4	8	(17.0)		4.1	6	10.1	7.7	1.9
11	(10.05)	(6.8)	1.0	杯				丸 底 杯			
12	10.4	8.2	1.9	№	口 径	底 径	器 高	№	口 径		器 高
13	(10.4)	7.9	1.4	1	13.1	(10.2)	3.25	1	16.3		3.5
14	(10.4)	7.9	1.2					2	(16.2)		3.0

5表 6AYECK内関連遺跡出土土師器計測表

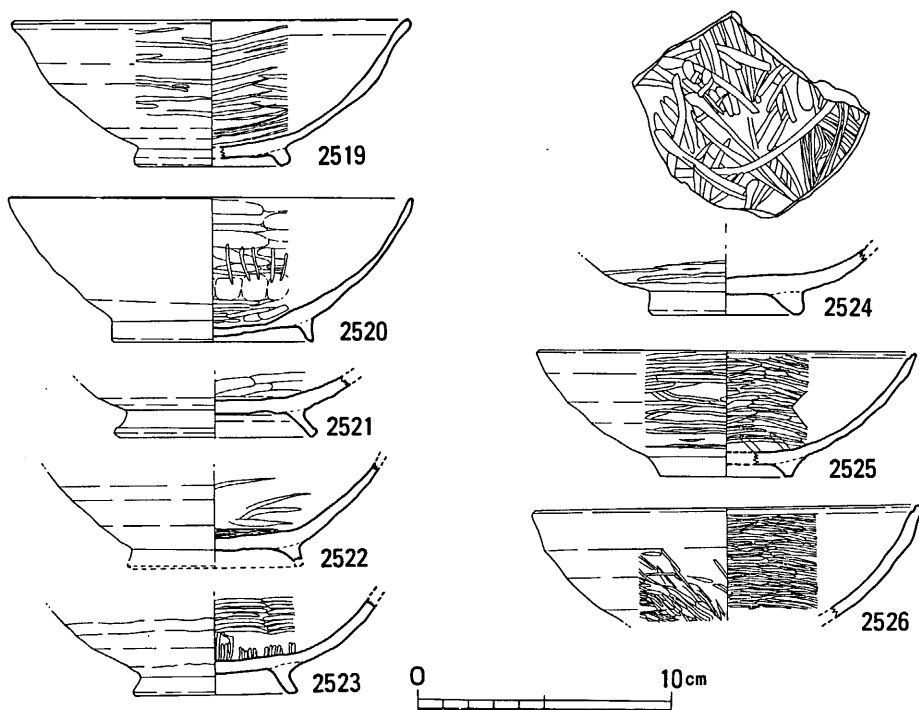
2. その他の土器椀類 (4図 2519~2526)

研磨土器椀 (2519) 口径 15.8 cm・高台径 6.2 cm・器高 5.85 cmを測る。体部下位では指押えの成形による凹凸を残し、中位で器壁が若干肥厚し、口縁部は横ナデが強くまた薄くなり、口唇端部は丸味を呈す。また横方向のヘラみがきを、体部内外面では粗く、底部内面では丁寧に施す。少量砂粒を含み、焼成は普通で、淡褐色を呈す。3層下半部出土。

内黒土器 (2520~2523) 2520は口径16.0cm, 高台径8.0cm, 器高5.8cmを測る。ヘラみがきは、体部内面をやや幅広く横方向に、底部を粗く施す。体部外面は上半部を横ナデで、下半部をナデで仕上げる。精製された胎土で、焼成は堅く、内面黒色・外面浅黄橙色を呈す。3層下半部ピット出土。2521・2523は3層下半部, 2522は4層出土。

黒色土器 (2524) 高台径 6.2 cmを測る。ヘラみがきは内面で不定方向に、体部外面で横方向に施す。胎土はよく精製されており、焼成は良く、器壁内部も含めてすべて黒色を呈す。3層下半部出土。

瓦器 (2525・2526) 2525は口径15.0cm, 高台径5.2cm, 器高5.0cmを測る。体部内面は丁寧な横ナデ後に横方向のヘラみがきを密に施し、底部はナデ後にやや広い間隔をおいてヘラみがき



4図 その他の土器椀類実測図

を施し一見暗文的である。体部外面は成形時の凹凸を残し、横方向のヘラみがきを施す。精製された胎土で焼成は硬く、暗黒色を呈す。3層下半部出土。2526は口径15.4cmを測る。体部内外共に成形時の指押え痕を残し、内面は横方向に細く密に、外面は斜方向にヘラみがきを施す。精製された胎土で、焼成は硬く、暗青灰色で光沢がある。4層出土。両者に共通するものとして、口縁部内面に幅0.2～0.25cmの沈部が一周するが、この間にも横方向に幅0.1cm前後の2～3条のヘラみがき痕が認められる。この沈線内面の研きは他の部位よりもその軌跡が長く、また細く丁寧に施しており、沈線文を意識してより深く一周させたものであろう。他に口径は10.0cm、底径6.7cmの糸切り底で、器高2.8cmとやや深めの小皿が3層から出土した。体部を横ナデし内底をナデる。精製された胎土で焼成は良く、内面灰白色で外面暗青灰色を呈す。

3. 磁 器 (5・6図 2527～2565)

3・4層から出土したものは白磁がそのほとんどを占め、越州窯系と呼ばれているものが若干と、青白磁が数点認められる。計測値は口径・底径（高台径）・器高の順に単位cmで示す。

2527～2530は白磁高台付小皿で3層下半部出土。2527は他の3例よりも小形で、胎土は灰白色で釉は明灰色を呈し、9.7・4.5・2.9を測る。2530は胎土が灰白色で釉は緑白色を呈し、11.4・5.8・3.3を測る。口唇部はいずれも若干の差異があるが、見込みに一条の沈線が入り、また高台の削り出しが低い共通点がある。特に高台のその特徴は次の2534とも相通じるものがある。

2531は前出のものと異なって、底部が内外共に水平なつくりで、2532は見込みに径0.8cmの沈線を入れる。共に3層下半部出土。

2533は見込みに段がつき、体部に2条、見込みに2～3条からなる櫛目沈線文を入れる。胎土は灰白色で、釉は緑白色で貫入を見る。3層下半部出土。

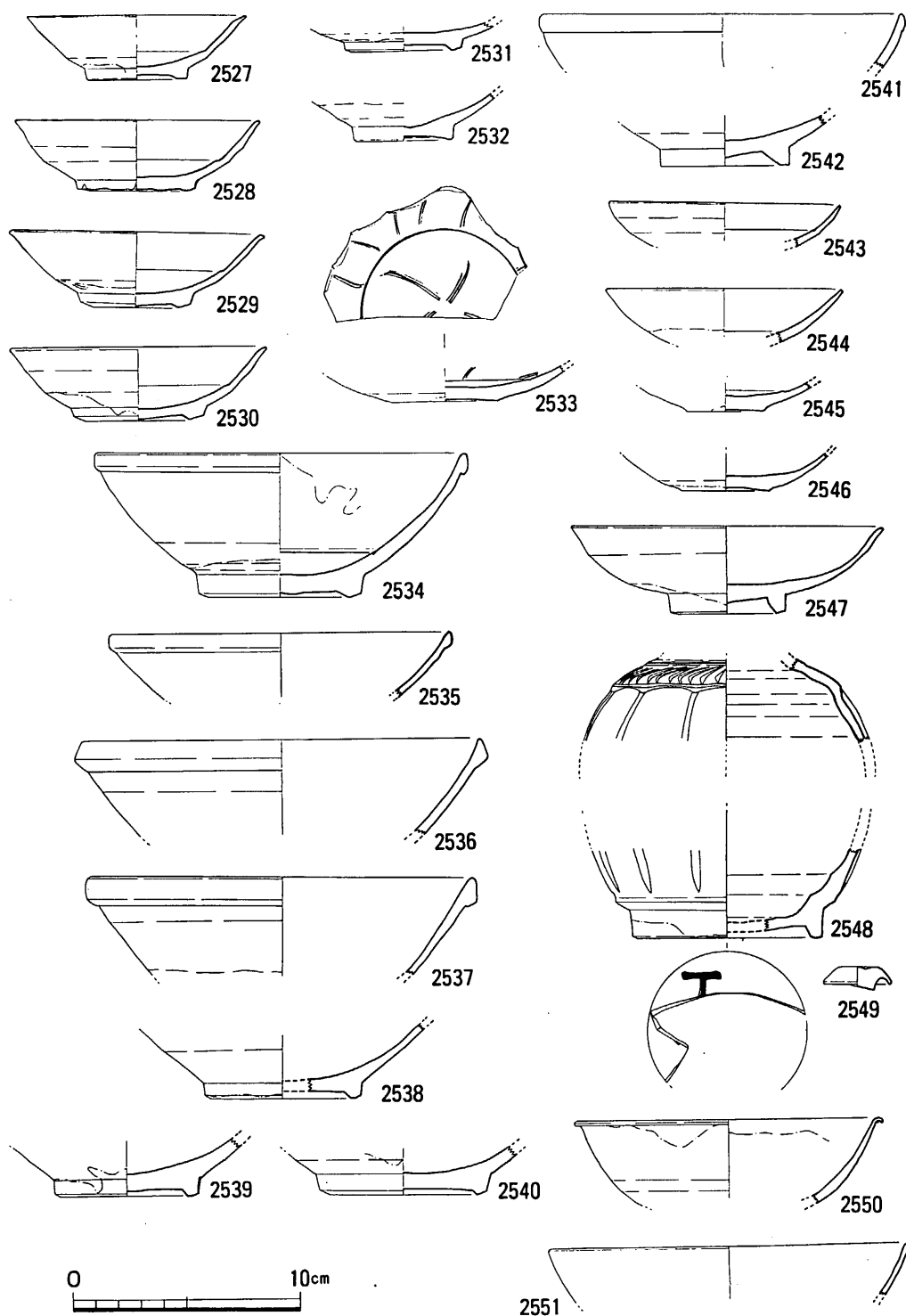
5類 2534～2540は玉縁口縁をなすもので、見込みに沈線を入れる。2534は16.5・7.2・6.4を測り、2530の高台の形に相通じるものがある。胎土・釉共に灰白色を呈す。2535・2540は4層出土で、他は3層下半部出土。

2541・2542も口縁を折り曲げて玉縁状をなすが、見込みに沈線がなく、高台が高く、その内側は斜めに切り込まれている。2541は4層・2542は3層下半部出土。

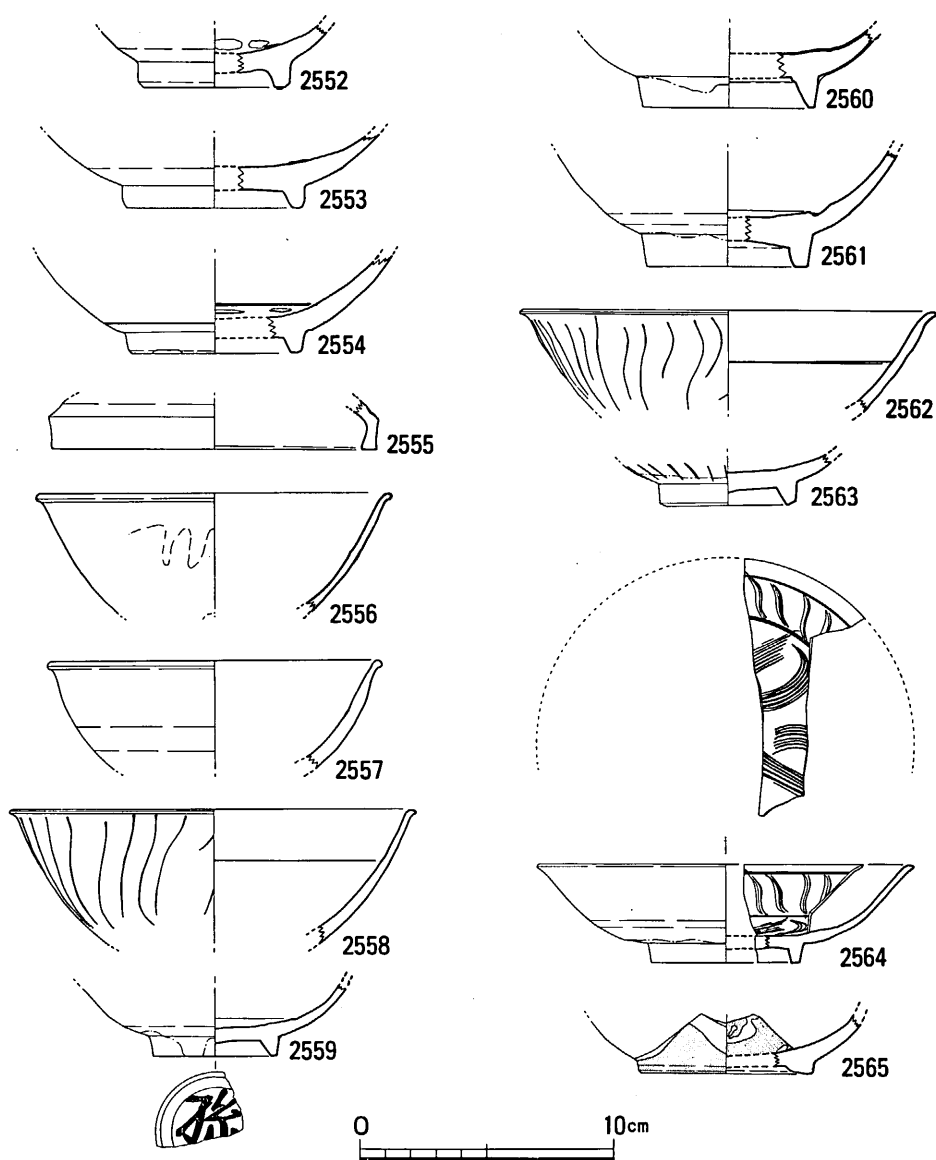
2543～2546はいずれも3層下半部で、見込みに段を有するが、その位置には若干の差がある。

2547は胎土は灰白色で、釉は緑白色を呈し、13.9・5.1・3.9を測り、内面に貫入をみる。3層下半部出土。

2548・2549は青白磁で3層下半部出土。2548は胴の一部および頸部を欠く。肩部にヘラ描き文を一周させ、胴部に縦方向に幅広の沈線を施す。底外面に墨書の一部を認める。胎土は白灰



5 图 磁 器 实 测 图



6図 磁器・緑釉陶器実測図

色で、肩部の釉は厚く青白色をなすが、下半部は灰白色を呈す。2549は蓋で、挿入部は糸切り痕を残す。胎土は白灰色で一部淡橙色を呈し、釉は薄手で緑灰色を呈す。

2550は内彎する体部上部を横ナデで薄手に仕上げ、口縁部を反転させる。口縁部内外共に釉が厚く、胎土は白灰色で、釉は淡青灰色を呈し、青白磁と思われるが、あるいは白磁の可能性もある。

2551は3層下半部出土で、胎土は灰色を呈し、釉は白濁斑点を有す緑灰色で、高麗青磁と呼ばれているものである。

1類 2552～2555は3層下半部出土で越州窯系青磁と呼ばれているものであるが、2552は胎土は灰色で、高麗青磁の可能性もある。2553は高台壘付部を4箇所ほど削り取り、重ね焼成に便をなしている。この類にしては釉は厚手である。2554は見込みに段を有し、体部外面の底部の屈折部に1条の沈線を入れる。2553・2554共に胎土は灰白色で、釉は緑灰色を呈す。2555は蓋で、口唇平坦面に目跡をみる。

2556・2557は3層下半部出土の白磁で、内彎する体部から口縁部を丸味をもって反転させる。胎土は白灰色で、釉は淡白緑色を呈す。

2558は3層下半部出土で、3類の白磁と似る点もあるが、口縁上面の反転がやや丸味をもち体部外面に細いヘラ描き文を一周させる。胎土・釉共に灰白色を呈す。2562は4層出土で、口縁部が前者よりもよりゆるやかに外反する。胎土は灰白色で、釉は淡緑白色を呈す。

2559は3層下半部のピット出土で、体部は底から丸味をもって立ち上がる。底に「孫」の墨書をみる。2560・2561は高台を高く削り出し、2563と共に見込みに沈線を入れる。共に3層下半部出土の白磁である。

2564は3層下半部出土で、口縁部と見込み部の沈線の間、縦方向の沈線を施し、底部は櫛描き文を入れる。高台はシャープに薄手に削り出す。胎土は灰白色を呈し、釉は暗黄緑色を呈する白磁である。

2565は3層下半部出土で、胎土は白褐灰色を呈す。釉は現状で、灰色部で図示した部分が黒褐色を呈し、他が灰褐色をなす。釉は薄く高台の壘付部にも至る。緑釉陶器と考えられ、焼成は堅緻である。

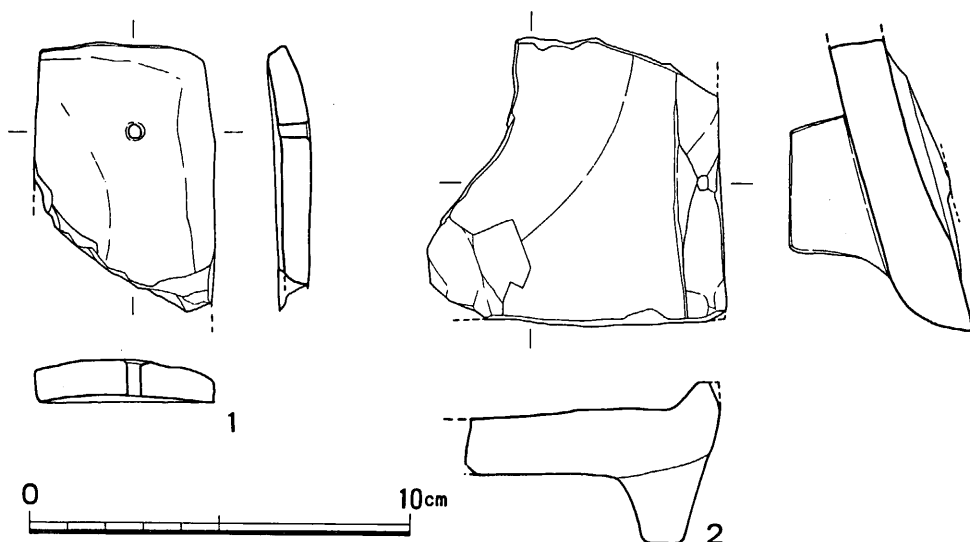
4. 石製品・土製品 (7図)

1は3層出土。滑石製石鍋残片を再加工したもので、表裏面ともにその体部壁面をそのまま使用し、カーブを呈するが、厚さが若干薄手で0.9cmを測る。表面に黒色付着物が認められる。下半部を欠失するが、側面はすべて火気を受けたためか、黒色を呈する。小孔の径は0.35cmを測る。

2は3層出土。硯陸部の一部破片で、陸部立ち上がり壁高は0.7cmを測る。砂粒をあまり含まぬ胎土であるが、瓦質の焼成で、灰白色を呈す。

5. 木製品 (8図)

1は先端部を欠損するが、先端へと尖がる扁平な細板で、現存長31.6cm、最大幅1.8cm、



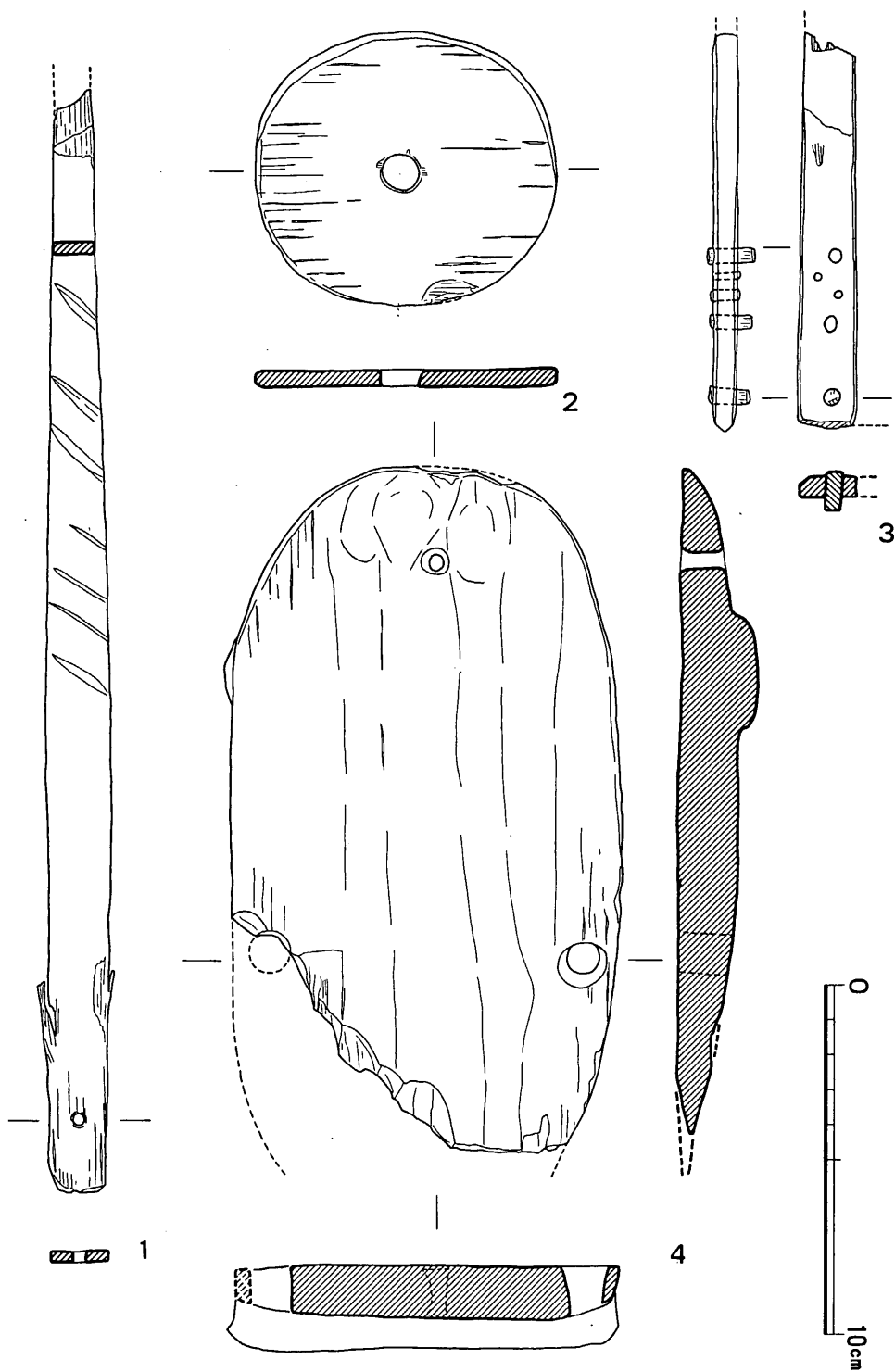
7図 滑石有(円形)孔製品・陶硯実測

厚さ 0.3 cmをはかり、図示した上面には削り痕が残され、基部には径 0.3 cmの孔があげられている。下半両側に2ヶ所切り込みがみられ、一見「削掛け」を思わせる。3層下部出土。2は有孔円板で、紡錘車であろう。長径 8.6 cm、短径 7.8 cm、厚さ 0.5 cmでやや楕円形状をなし、周縁は面取りがなされている。3層下部出土。3は扁平な薄板に木栓を挿入したもので、残存しているのは隅の部分のみである。木栓は5ヶ所にみられ、径 5 mmほどのものが 1.6 cmの等間隔で3ヶ所、2 mmのものが大きい木栓上段と中段の間に2ヶ所挿入されている。折敷の一部であろうか。3層下部出土。4は連歯下駄で、下端を欠損するが、復原長約 22 cm、最大幅 11.1 cm、高さ 2.2 cmをはかる。台長に比し幅の広い下駄で、後歯は完全に磨耗し、台木まで磨り減っていて長く履かれたことがわかる。足指の痕跡より左足に履かれたものである。

6. ま と め

今度の調査によって検出されたものは、小ピット群・杭などであり、これらから建築物や柵列などの明確な遺構とするには至らなかった。しかし、東側の一段と低い部分は溝の一部の可能性を残している。

このように出土遺構は少ないが、その出土遺物から、南バイパス第6地点「御笠川南条坊遺跡」がこの地区まで広がっていることが確認され、また土師器の編年上においても欠くことのできないものであり、その成果は大きいものがあったと言えよう。



8図 木製品実測図

付Ⅱ

1. I—1 A類以前の土師器について

I—1 A類以前の土師器については、故前川威洋氏が前述されているように、当御笠川南条坊遺跡では、I—1 A類以前のものと思われる土器が出土しておらず、I—1 A類以前を考えるにあたって大宰府史跡第43次調査SE1081井戸出土土器・同43次調査SK1084土壇出土土器をI—1 A類以前のものとして、その時期を奈良時代後半（8世紀後半）に推定して考えてきた。しかし、これら2つの遺構を考えてみると、土師器の法量の差も幅が広く、I—1 A類のものよりかなり大型のもので、I—1 A類よりも古いということだけで、編年表作成の折には、まだまだ検討の余地を残していた。

ところが、幸いにも、大宰府史跡52年度概報と筑前国分寺52年度概報により好資料を得ることができた。これらをふまえて、I—1 A類以前の土師器の流れをもう一度検討していきたい。

I—1 A類以前の土師器と思われるものは以下のものである。大宰府史跡43次調査SE1081井戸・同SK1084土壇・同46次調査SE1340井戸・筑前国分寺52年度5次調査SK053土壇、以上4つの遺構が考えられる。SE1081井戸・SK1084土壇出土の土器については、前述されているので、ここでは省く。

筑前国分寺52年度5次調査SK053土壇出土土器（9図）

この土壇からは、須恵器および土師器（杯・皿）が、ほぼ完形のまま出土している。

〔須恵器〕1. 高台付杯

〔杯〕2・3 口径12.6～13.5cm、底径7.6～8.8cm、器高3.1～4.0cmである。外面には、ヘラミがきは施されず、黄褐色を呈し、内面にすすが付着しているものもある。

〔皿〕4～8 口径13.2～15.4cm、器高1.4～2.8cmで、淡赤褐色を呈し、胎土には、砂粒をほとんど含まない。

大宰府史跡第46次調査SE1340井戸出土土器（9図）

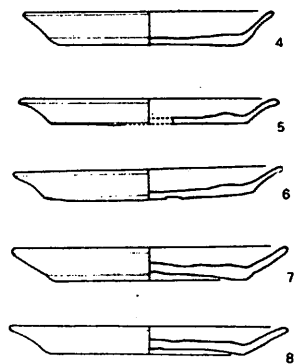
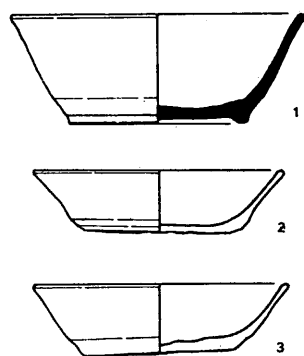
ここからは、須恵器（皿・高台付杯）内黒土器（蓋・高台付椀）磁器B類（白磁）が出土している。

〔杯〕5・6 口径12.9～13.6cm、底径7.2～8.3cm、器高3.4～3.7cmで、ヘラ切り底を有し、淡灰茶色を呈している。

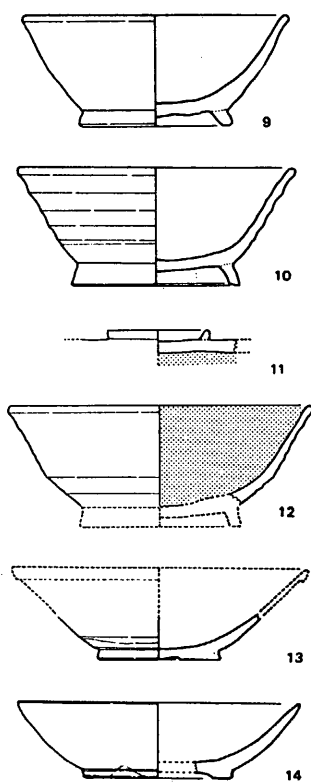
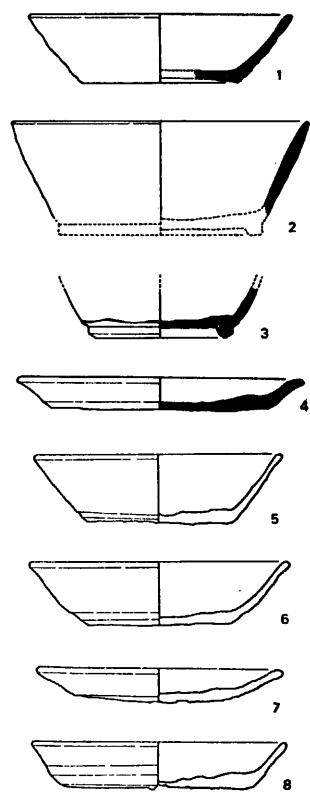
〔皿〕7・8 口径12.8～13.4cmを測るが、器高は1.8～2.4cmを有しているために、器形的には、皿よりもむしろ杯に近い器形を呈している。

〔高台付椀〕9・10 体部は、やや丸味をもつが、ほぼ直線的に延びていて、高台は外側にふんばったように付いている。器面には、横ナデが施され、ミガキはない。淡乳茶色を呈している。

SK053



SE1340



0 10cm

9 図 筑前国分寺 5 次調査SK 053 土坑出土土器 (1/4) (昭和52年度概報より)
大宰府史跡第46次調査SE1340井戸出土土器 (1/4) (昭和52年度概報より)

以上、4つの遺構の土師器の杯・皿について、法量を行うと次のようになる。

杯に関しては、SK1084土壇出土のものは、口径12.7～15cmと幅が広く、SE1340井戸は、口径12.6～13.6cmとこれらは、ほぼ13cm前後に集中するようである。

皿に関しても、SK1084土壇の口径18cm代の大形のものから、SE1340井戸の13cm代の小形化への変化がわかる。

その他、杯に関しては、SE1081井戸とSK1084土壇出土のものには、ヘラミがきが施された精製土器がみられるが、SK053土壇とSE1340井戸出土のものになると、横ナデ調整がみられるくらいで、ミガキは施されていない。

以上のような結果より、I-1A類以前の4つの遺構の流れをみると、法量で1番大きな広がりをもつSK1084土壇をSE1081井戸のものよりやや古手のものと考え、奈良時代後半（8世紀後半）として、国分寺SK053土壇とSE1340井戸をほぼ同時期として、8世紀終末から9世紀初頭として推定し、これらをI-1A類に先行するものと考えた。

2・ 輸入陶磁器にみられる焼台および重ね焼の痕跡について

陶磁器が窯内においてどのように焼成されたか知る手掛りとして焼台の跡、重ね焼の跡がある。これを整理、分類することにより、どのような窯道具を使用したか窺うことが可能であり、また進んで、我地出土の陶磁器が彼地のどの窯のものであるのか同定作業の一端を担うことができると考えられる。

焼台および重ねが器面に施釉された部分に直接接した場合はその部分に明瞭な痕跡を残し、焼台の種類および重ねの仕方を想定できるが、露胎部分に置かれた場合はその跡を残さないのが通例である。しかし、内面見込み部分や高台の内側を環状に釉をカキ取って露胎とした場合釉が若干なりともそこに残る事があり、そこに焼台、重ね焼の跡が残る。それらの痕跡を手掛りに、ここでは報告書の分類順にそれらの痕跡について述べることにする^(註1)（図版 1～4）。

A類（1～12） 1・2は細く高い高台を有し、全面に施釉されたもので、高台内側に円筒の先端を台形に削り出したような焼台の跡を残し、内底見込みに重ね焼きの跡はない。すなわち台形の焼台は使用するが重ね焼きをしない一群である。3は円盤状の底部を有するもので、内底に白砂を置きその上に直接器を重ねて焼成している。4・5は平底の底部周縁を回転ヘラ削りしたもので、平坦部分では重ねは行わず、その削られ斜行した部分に重ねの目跡がみられることから、この削りは重ねのためと考えられる一群である。6・7はいわゆる蛇ノ目高台を

有するもので、高台畳付に焼台および重ねの目跡がある。この蛇ノ目高台を有するものは全面施釉した後に高台畳付部分の釉を削り取るものと、体部まで施釉し、外底には施釉しないものと二種類あり、資料が少ないため断定できないが、後者には内底に重ねの目跡があるものが多いようである。8～11は断面四角形の低い高台を有するもので、全面施釉した後に高台畳付部分の釉を削り取りその部分が焼台と接する。8の内面見込みには目跡はないが、この種の中では数少ないものである。12は1～11までの越州窯系青磁と容相を異にしたもので、胎土中に砂粒が多く、釉色は濃緑色を呈し、光沢はなく不透明なもので、5つの目跡を特徴とする。現在のところ出土する時期も11世紀後半に限られ、A類としてよいかどうか筆者は疑問に思っているものである。

B類 (13) 「蛇ノ目」高台を有する白磁碗で、高台畳付部分の釉をカキ取っていることから、この部分を焼台の上に載せて焼いたと考えられる。また、内面に重ねの痕跡はないことから重ね焼きはしていないと考えられる。

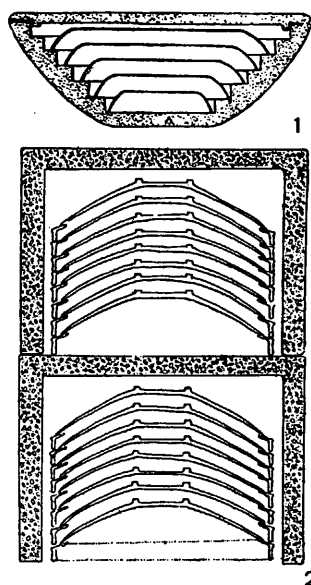
G類 (14・15) 内面見込みの釉を環状にカキ取り、重ね焼きしたもので、釉が十分にカキ取られていない場合は重ねの痕跡が濃く残存する。

L類 (16) 内面見込みの釉を環状にカキ取ったものでG類と同様な重ねを行っている。

O類 (17～20) 口縁部の釉をカキ取った碗と杯で、器を逆にして焼台の上に伏せて焼いたものである。17・19は釉をカキ取った部分以外は全面施釉したもので、器相互の接触はないが、18・20は初めから底部に施釉されていないこと、また20の底部をみると底部と底部を重ねたような跡があることから、一方は伏せ、他方は底部の上に載せて焼いたものと考えられる。なお、この類の焼成の仕方については小山富士夫氏により10図のような焼台および匣鉢を想定されている。^(註2)

P類 (21～23) 21・22のように外底部の釉を削り取ったものと、23のように最初から施釉しないものがあり、外底周縁に付着物が時折観察できることから、焼台の上に載せて、焼いたものと思われる。また器を相互に重ねることはない。

M類 (24) その他の白磁として分類されている皿で外底周辺に細く低い高台を削り出しており、その畳付部分に焼成時の付着物が若干残っている場合があり、内底に重ねの痕跡がないことから、焼き台の上にそれぞれ単独に直接置いたものと考えられる。



10図 1. 湖田窯跡出土匣鉢想定図
2. 定窯跡出土焼台・匣鉢想定図

R類 (25~39) 断面四角形の高台を有する龍泉窯系の碗で、文様により R₁ (26・27・30・34・36), R₂ (28・35) R₃ (29・37), R₄ (25・31~33・38), R₅ (39) の5つに分類している。この類の焼台は三足(25), 四足(26~33), 棒(筒)状(34~39)の3種ある。このうち棒(筒)状の焼台の場合は内底に重ねの痕跡を残すことはなく、ひとつひとつ単独に焼台に載せられたと考えられる。しかし、三足・四足の焼台の場合少数の例であるが内底にその目跡を残すものがあり、道具を使用した重ね焼きが行われていたことが知れる。

S類 (40~43) 龍泉窯系青磁の平底の皿で、三足(40), 棒(筒)状(41~43), 2種類の焼台を使用している。現在のところ内底に重ね焼きの痕跡を残すものは出土していない。

T類 (44~47) 断面三角形に近い高台を有するもので、全面施釉した後に、焼台との癒着を防ぐため高台先端だけでなく高台下部の釉を削り取って露胎としている。内面に重ねの跡がないことから1点1点焼台の上に置いて焼成したものと考えられる。47は伏焼きの方法もとったのであろうか口縁端部の釉をも削り取って露胎としている。しかし、この種のものは全体量からみると全く稀有な例である。

V類 (48) その他の青磁として分類しているもので、全面施釉した後に高台の内側の釉を丸く削り取っている。このことから棒(筒)状の焼台の上に置かれて焼かれたものと考えられる。この類では他に高台の内側を環状に釉を削り取るものもあり、その場合は焼台の先端が凹んでいるものと想像できる。

U類 (49~54) 同安窯系青磁といわれているものである。この類のものは54のごとく重ねの跡がないのを通例とするが、稀に4つの目跡を有するもの49, 内底見込みの釉を環状に削り取ったもの51・52などがあり、器を重ねて焼いていたものもあることが知れる。53・54の皿の底部には円形に変化した部分があることから棒(筒)状の焼台の上に載せて焼いたものと考えられる。

X類 (55~60) 青白磁として分類されているもので、55~57は碗, 58・59は皿, 69は瓶である。55・56・58・59は外底部を露胎とし、円筒状の焼台の上に載せて焼いているが、57・60は外底周縁に焼台の痕跡が残っている。

Z類 (61~63) 朝鮮製の青磁で、61は三足の焼台を、62は高台壘付付近に焼台の跡が、63は焼台の上に砂を置きその上に置かれて焼成されている。この類は更に分類する必要があるが出土数も少ないことから一括して扱っている。

以上、各類の焼台および重ね焼跡について概略を述べてきたが、それらの特徴を要約すると以下のごとくなる。

- A類 焼台** a 台形の突起をもつもの。
 b 底径よりも大きなもの。
重ね焼 a 重ね焼きをしないもの。

- b 白砂をおいて器どおしを直接重ねて焼くもの。
- c bのような重ね焼きをしたか突起のある道具を用いたか不明なもの
- B類 焼 台 底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 重ね焼きはしない。
- G類 焼 台 底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 内面見込み部分の釉を環状にカキ取り重ねて焼く。
- L類 焼 台 焼台底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 内面見込み部分の釉を環状にカキ取り重ねて焼く。
- O類 焼 台 a 伏せ焼きのための台。
- b aよりも器の高さの分だけ間隔の高い受台を有する焼台か匣鉢。
- 重ね焼 a 重ね焼きはしない。
- b 底部どおしを重ねる。
- P類 焼 台 棒（筒）状のもの。
- 重ね焼 重ね焼きはしない。
- R類 焼 台 a 三足の突起のあるもの。
- b 四足の突起のあるもの。
- c 棒（筒）状のもの。
- 重ね焼 a 重ね焼きをしないもの。
- b 三足の突起のあるもの。
- c 四足の突起のあるもの。
- S類 焼 台 a 三足の突起のあるもの。
- b 棒（筒）状のもの。
- 重ね焼 重ね焼きはしない。
- T類 焼 台 底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 重ね焼きはしない。
- また、47のように口縁部の釉をカキ取ったものもあり、O類のような構造を有する焼台か匣鉢に入れて焼成されたものもある可能性がある。
- U類 焼 台 a 不明
- b 碗では、高台径より小さな円筒状のものを用いた可能性がある。
- c 皿では棒（筒）状のもの。
- 重ね焼 a 重ね焼きをしないもの。
- b 白砂を用いるもの。
- c 内面見込みの釉を環状に削り取って重ね焼きするもの。

X類 焼 台 a 底径よりも大きなもの。

b 円筒状のもの。

重ね焼 重ね焼きは行わない。

Z類 焼 台 a 三足のもの。

b 底径よりも大きなもの。

重ね焼 a 重ね焼きをしない。

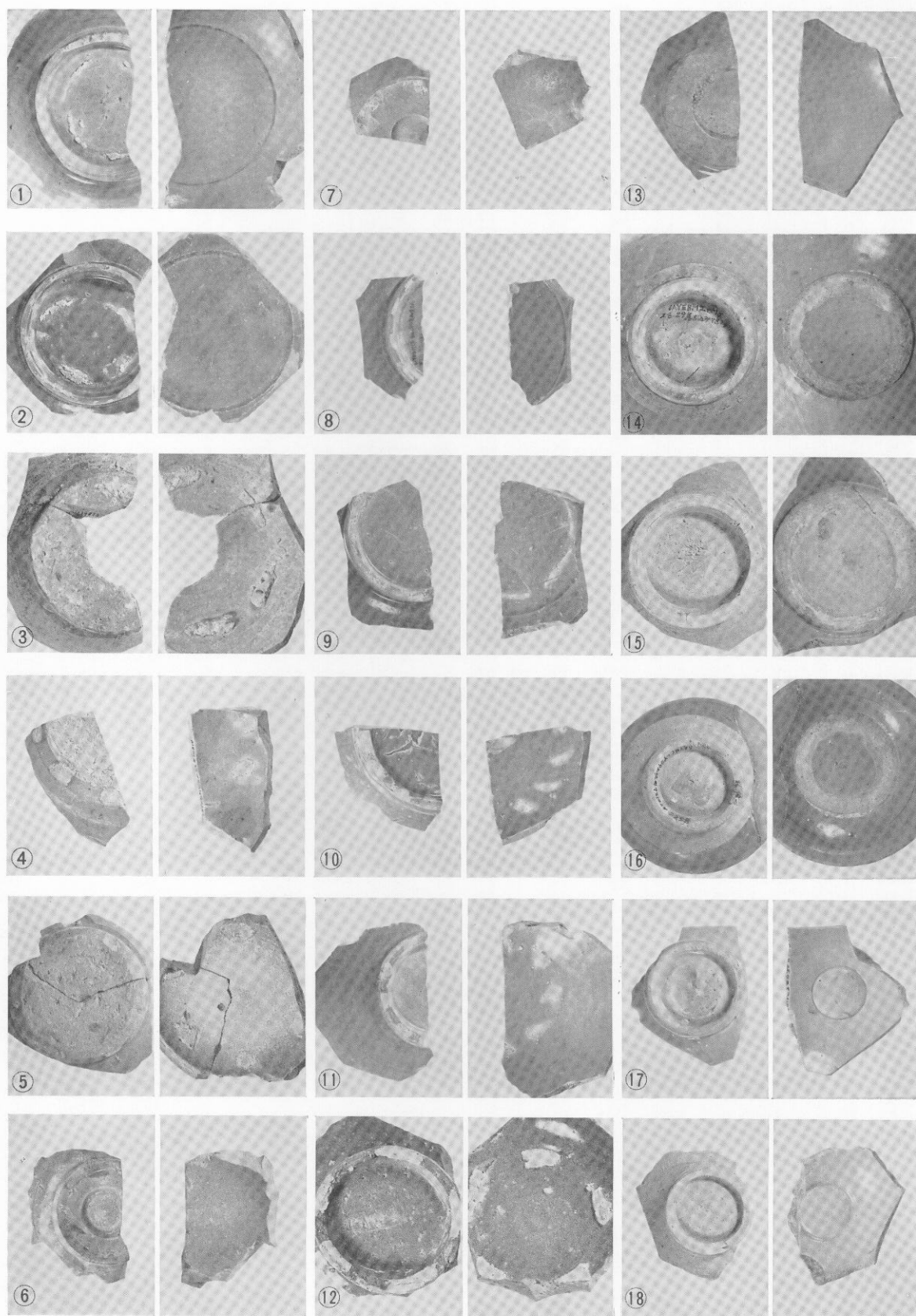
b 白砂を用いて器を直接重ねる。

以上述べてきた焼台および重ね焼の痕については、前川氏が事故による急逝の直前に御笠川南条坊遺跡出土のものを短時日のうちにメモとして撮影していたものをもとにし、彼との日頃の討論をふまえて記述したつもりであるが、ここで述べた内容より以上のものを彼は把握していたと考えられるが、筆者の力量不足から十分に彼の考えを浮き彫りにできなかったことを深くわびたい。この焼成時における焼台・重ね焼きの課題は陶磁器を研究する上で大きな役割を果たすと筆者は考えており、この前川氏の業績を踏まえて今後さらに問題点を煮つめて行きたい。

註

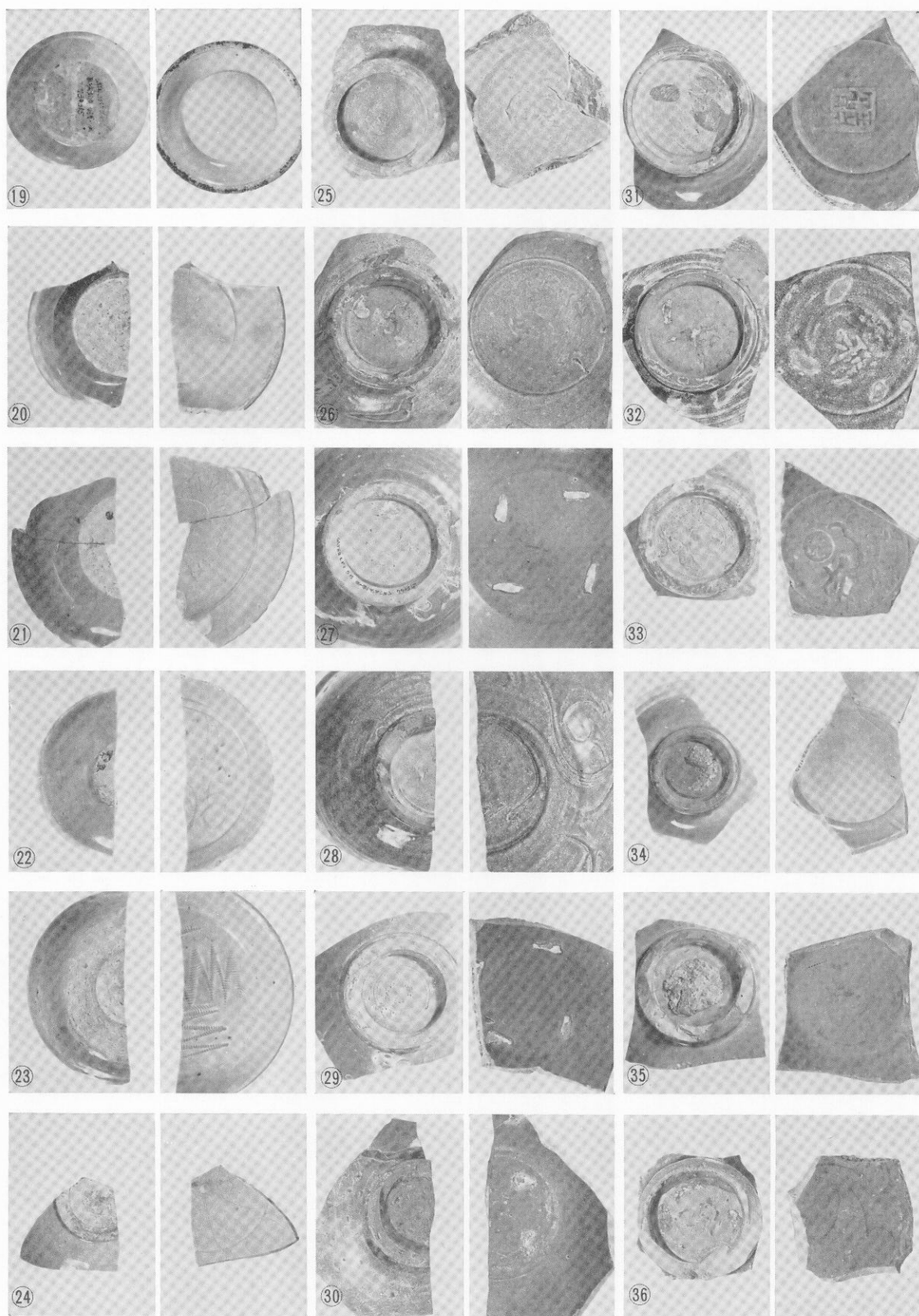
1. ここで、使用する焼台の用語は、焼台と器が接する部分のうち、焼台の方が大きい場合はその種類については明らかでないので器と接する部分の特徴を記し、小さい場合はその形状について記すことにする。たま、焼成時に匣鉢を使用したかどうかはある程度予想できるにしても不明な部分が多く、ここでは匣鉢の中に入れて焼成された場合も焼台として記す。
2. 小山富士夫『陶器講座 第6巻 中国Ⅱ・宋』雄山閣 1971

版 図



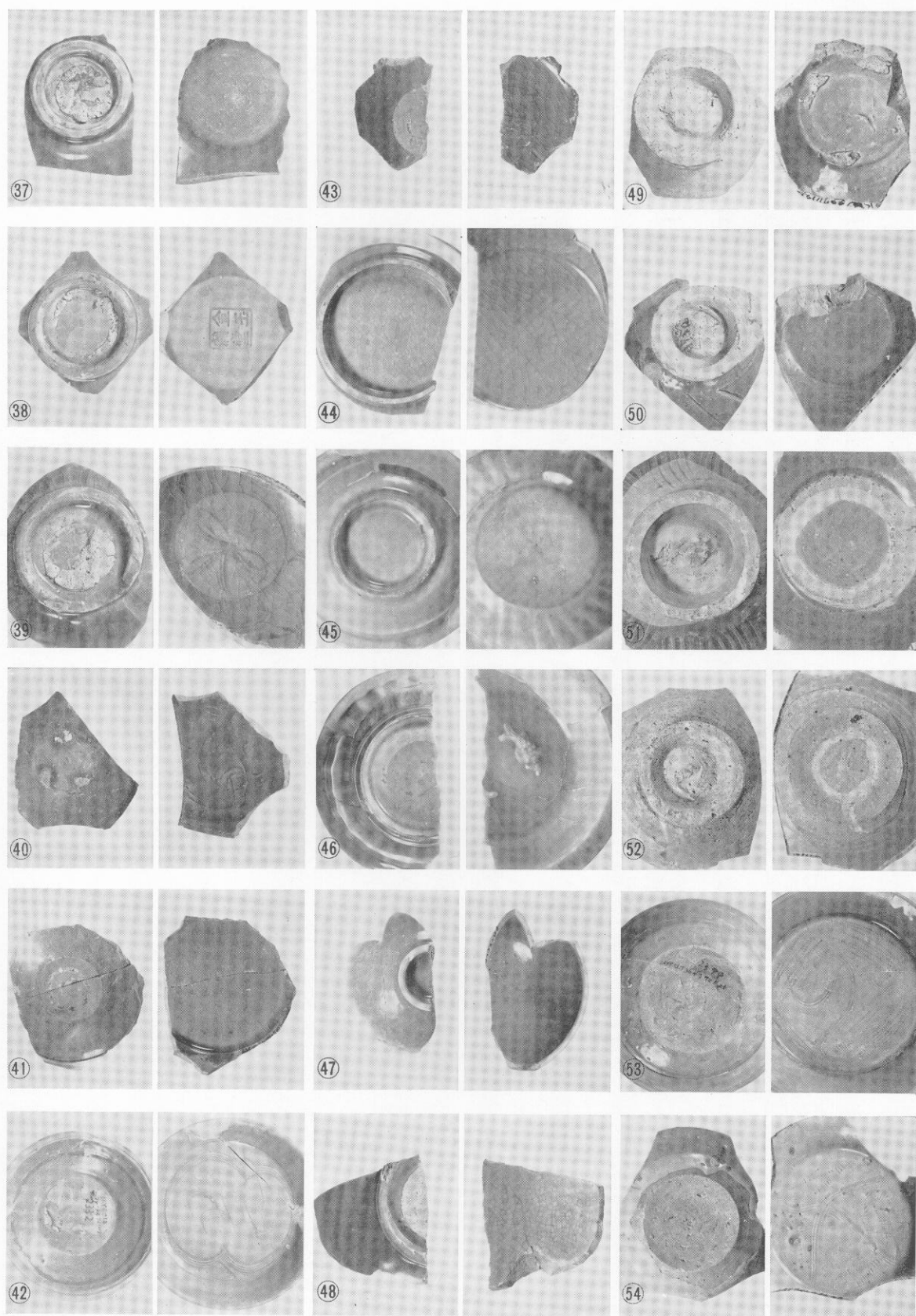
磁器の焼台・重ね焼部

[A類 (1-12) ・ B類 (13) ・ G類 (14・15) ・ L類 (16) ・ O類 (17・18)]



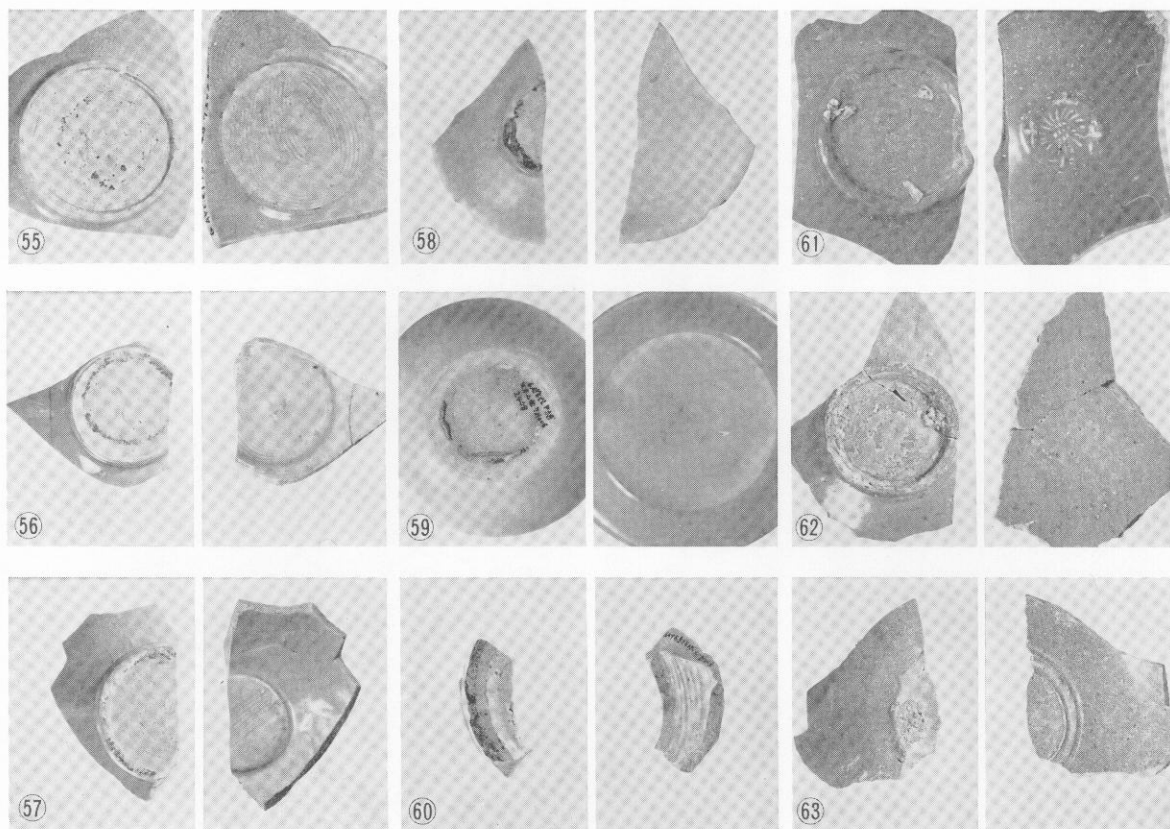
磁器の焼台・重ね焼部 (2)

[O類 (19・20) ・P類 (21~23) ・M類 (24) ・R類 (25~36)]



磁器の焼台・重ね焼部 (3)

[R類 (37~39)・S類 (40~43)・T類 (44~47)・V類 (48)・U類 (49~54)]



磁器の焼台・重ね焼部
〔X類(55~60)・Z類(61~63)〕

福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告

——第 8 集（下）——

昭和 53 年 10 月 31 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲 6 街区 29 号

印刷 福博総合印刷株式会社

福岡市博多区堅粕 3 丁目 16 番 36 号

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

第 8 集 (下)

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡 (4)

付 図

1 図 ~ 9 図

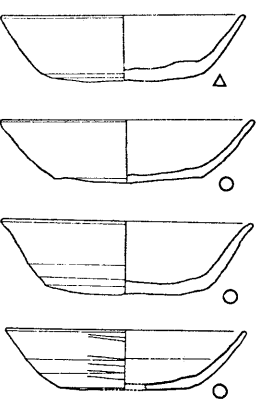
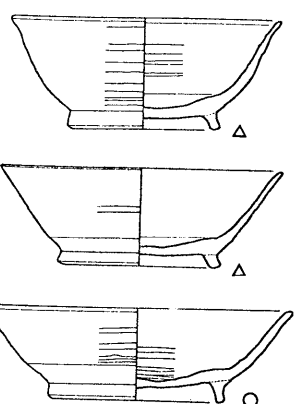
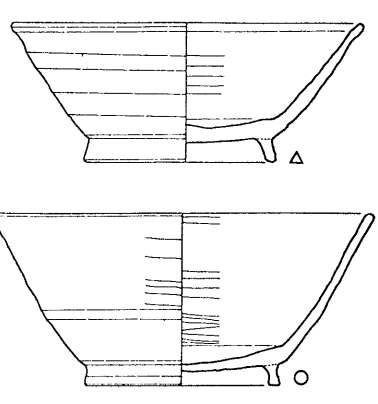
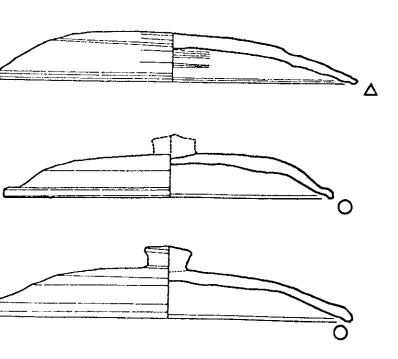
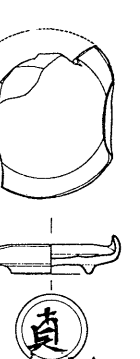
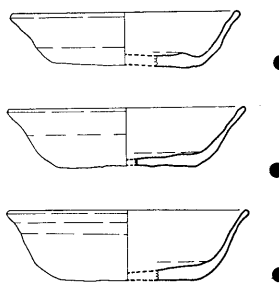
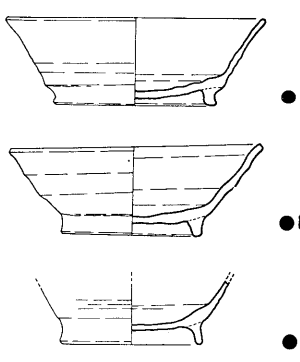
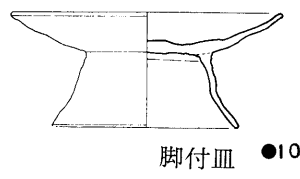
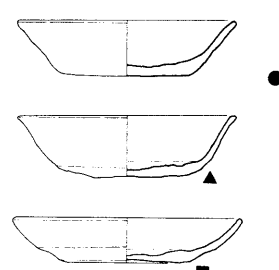
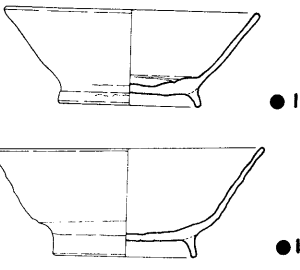
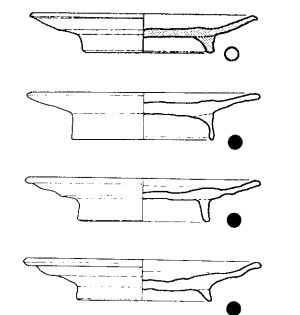
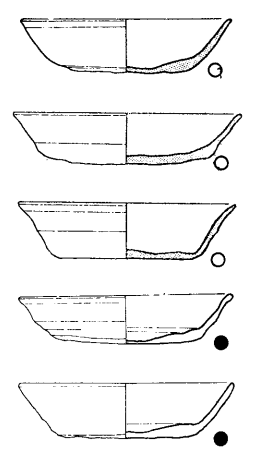
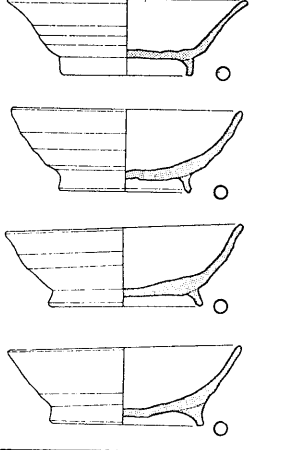
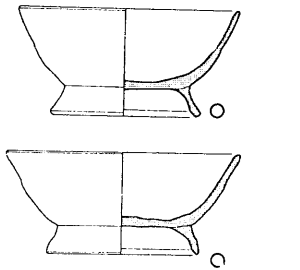
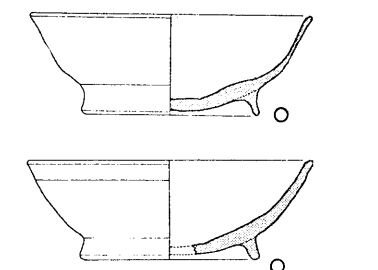
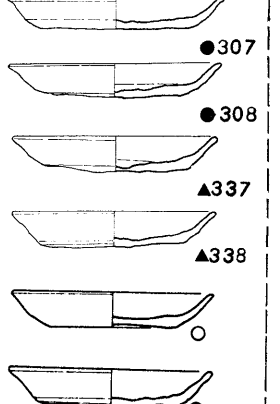
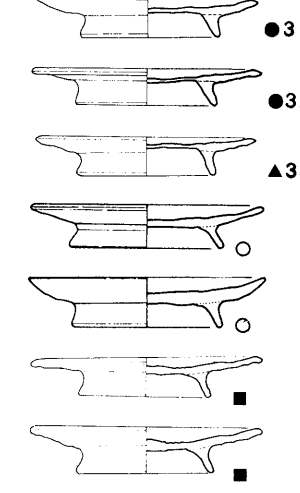
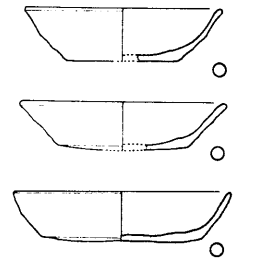
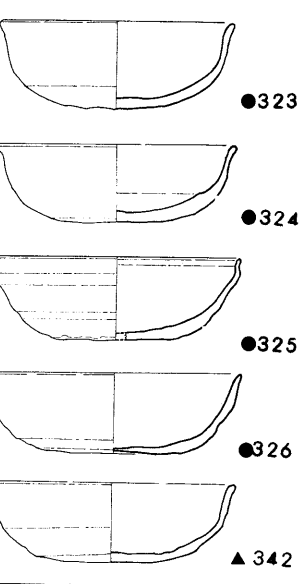
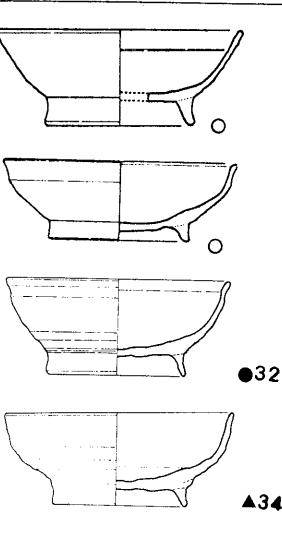
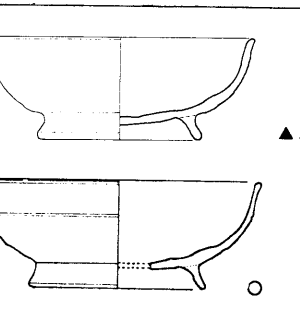
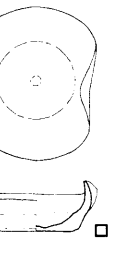
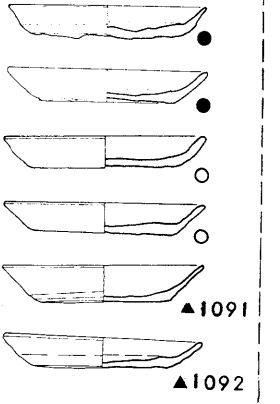
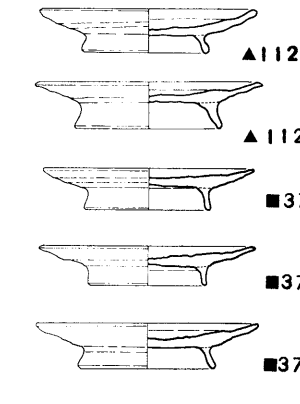
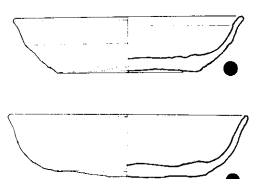
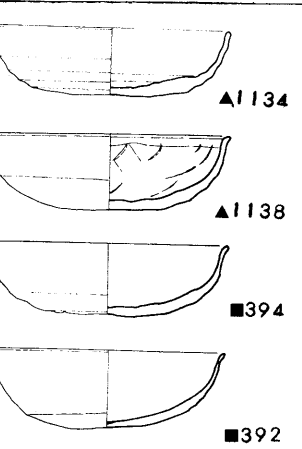
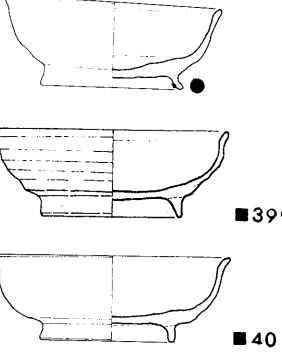
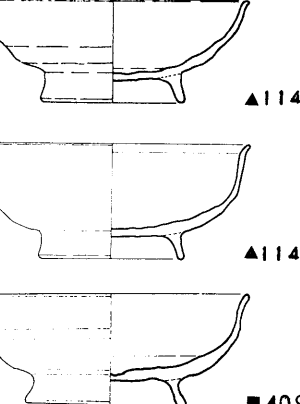
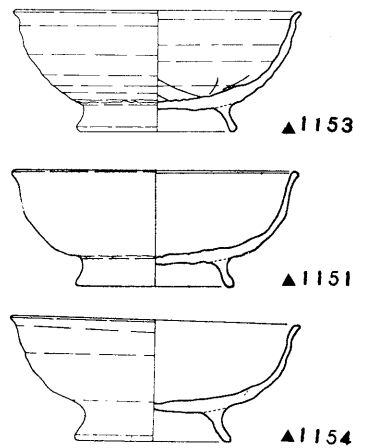
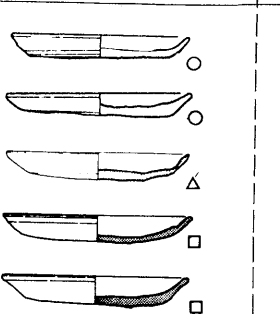
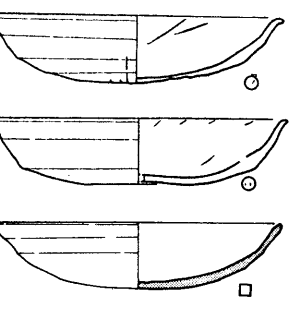
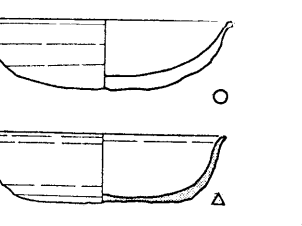
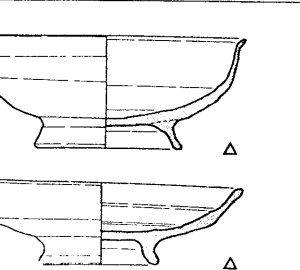
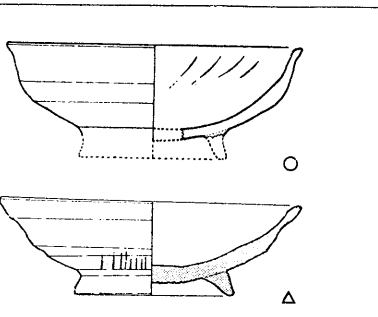
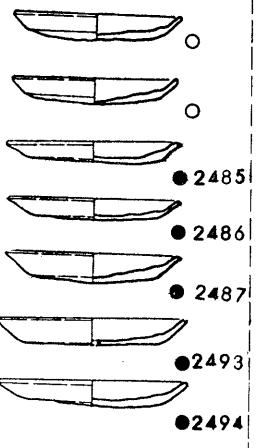
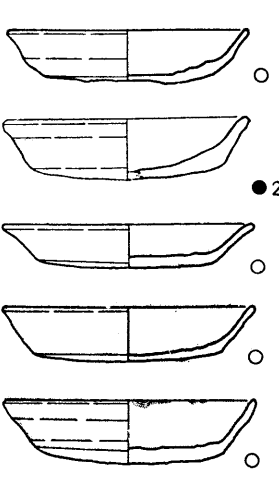
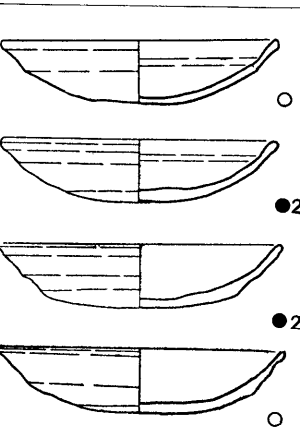
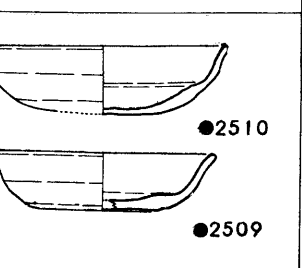
1 9 7 8

福岡県教育委員会

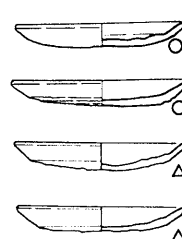
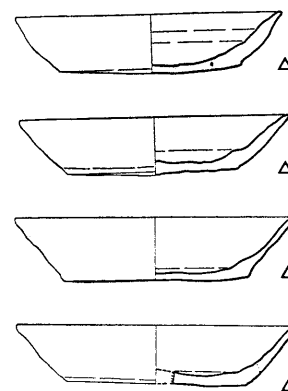
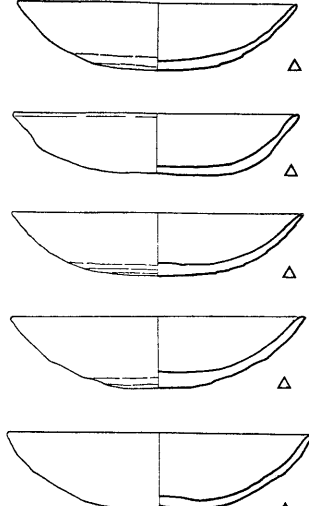
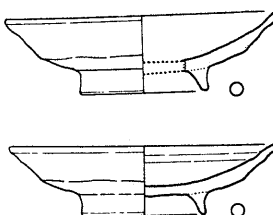
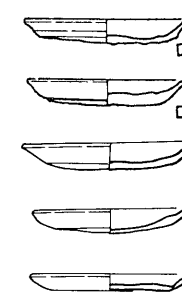
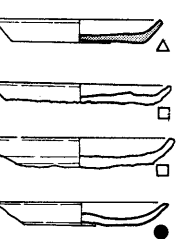
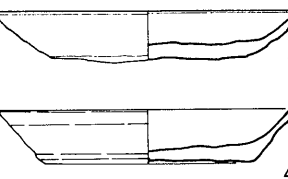
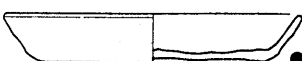
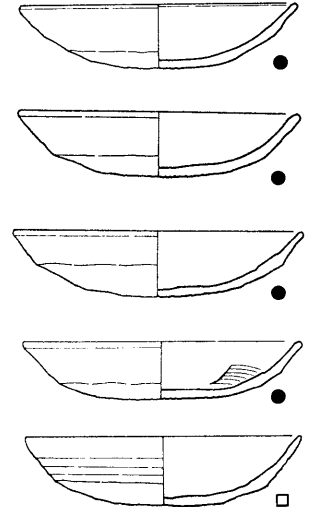
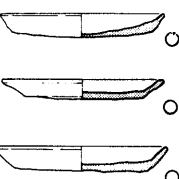
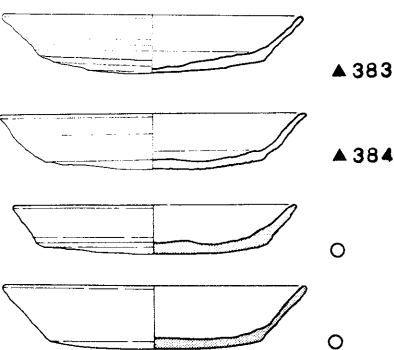
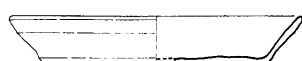
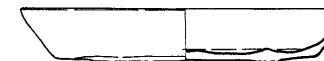
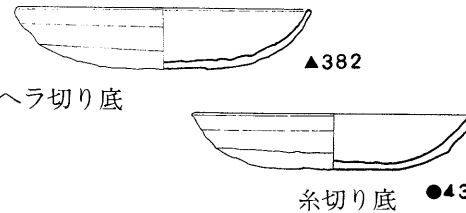
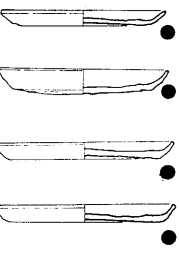
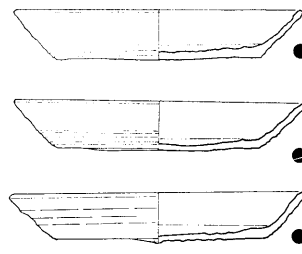
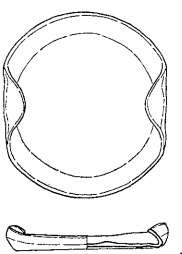
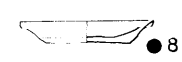
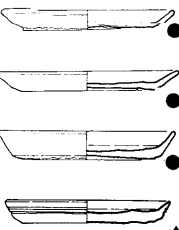
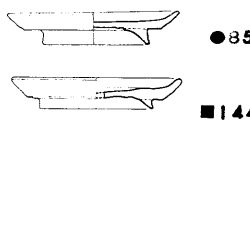
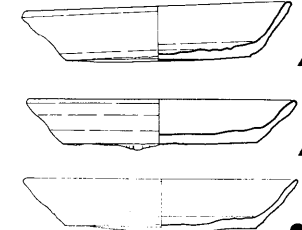
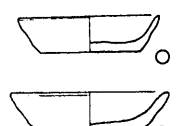
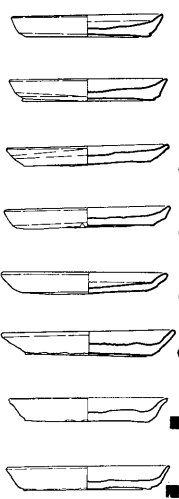
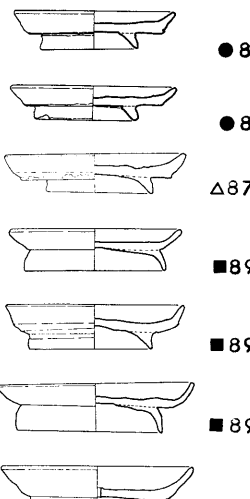
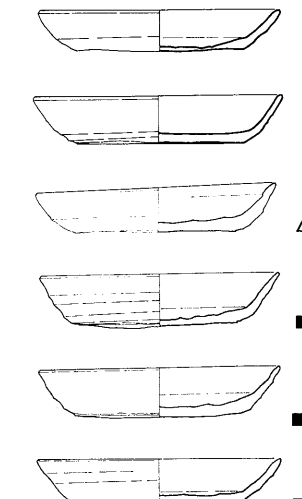
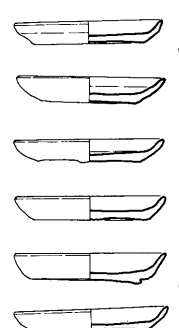
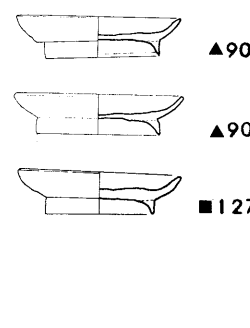
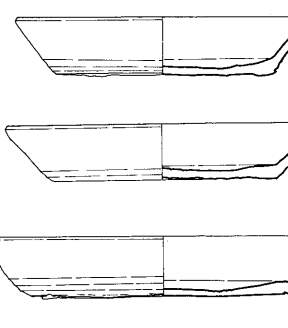
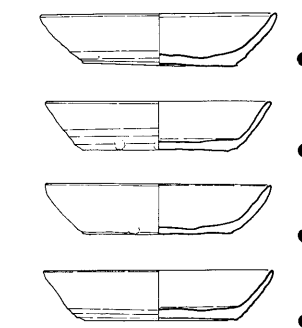
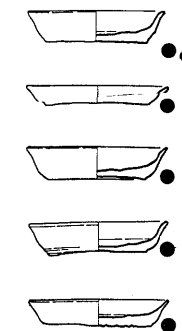
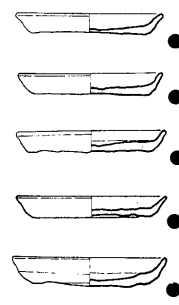
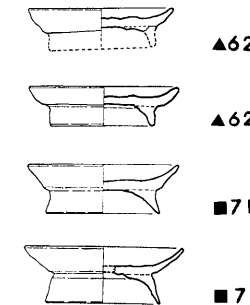
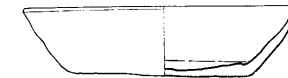
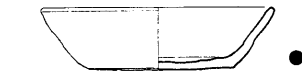
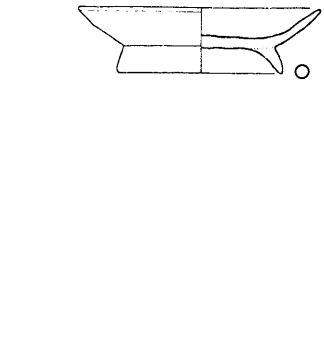
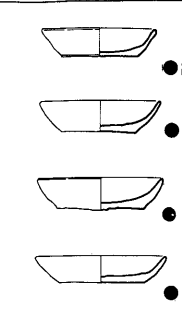
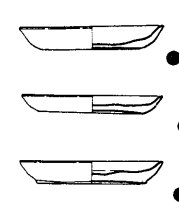
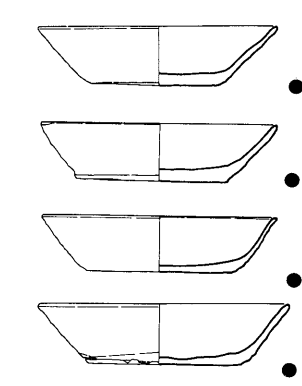
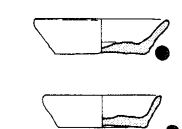
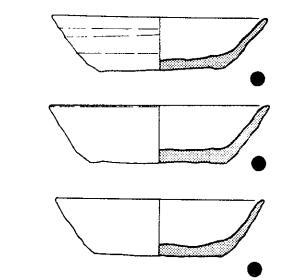


付1図 御笠川南条坊遺跡上面遺構全図(1/200)

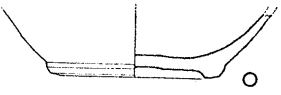
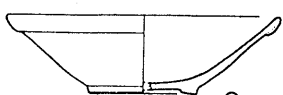
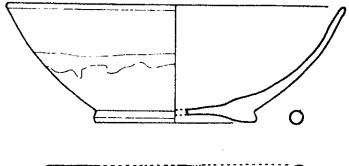
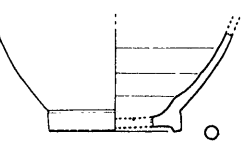
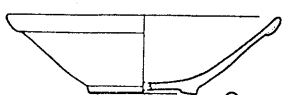
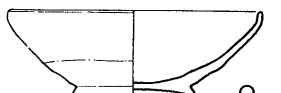
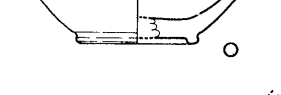
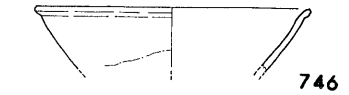
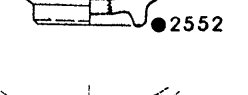
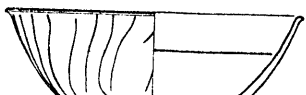
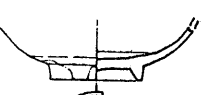
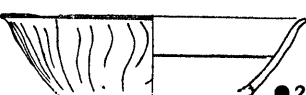
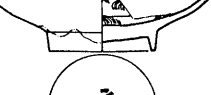
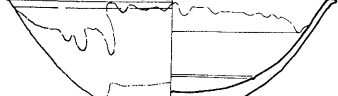
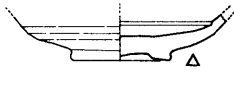
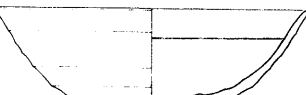
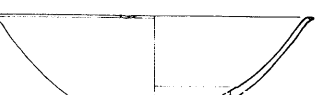
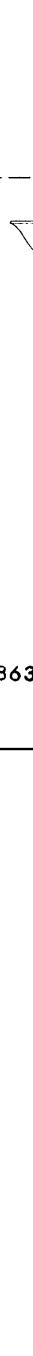
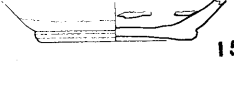
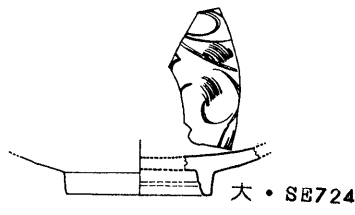
土師器の分類と編年(1)〔1/4〕

土師器分類	推定年代	遺構名	a特小皿	b小皿 へラ切り底糸切り底	f高台付小皿 (托)	c杯 へラ切り底糸切り底	o高台付杯	m丸底杯	g椀	h高台付特小椀	i高台付小椀	j高台付椀	k高台付大椀	n蓋	p耳皿
五 条 I－1A以前	8世紀中頃 8世紀後半	○ 大宰府第43次調査 SK1084土埴 △ 大宰府第43次調査 SE1081井戸													
五 条 I－1 A	9世紀初頭 9世紀中葉	● 6次ME13区下層													
五 条 I－1 B	9世紀中葉 9世紀後半	● SE614井戸 ▲ 君畑2号墓 ■ 君畑4号墓													
五 条 I－2 A	9世紀終末 10世紀初頭	○ 大宰府第35次調査 SK678土埴 ● 君畑18号墓													
五 条 I－2 B	10世紀初頭 10世紀中頃	● SK341土埴 ▲ 3次MF35区暗灰色粘質土 ○ 大宰府第38次調査 SD865溝 ■ 君畑19号墓 □ 君畑16号墓 △ 大宰府第34次調査 SK674土埴													
五 条 I－2 C	10世紀中頃 10世紀終末	● 君畑12号墓 ▲ SK633土埴 ○ 大宰府第43次調査 SE1083井戸 ■ SK339土埴													
五 条 I－3 A	10世紀終末 11世紀初頭	○ 大宰府第38次調査 SK802土埴 △ 大宰府第31次調査暗褐色土層 □ 大宰府第36次調査 SE725井戸													
五 条 I－3 B	11世紀初頭 11世紀中葉	○ 大宰府第46次調査 SD1330溝 ● 6 AYECK内関連遺跡調査													

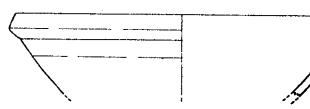
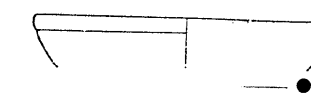
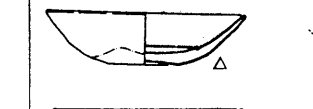
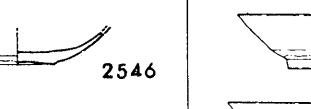
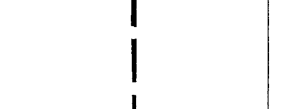
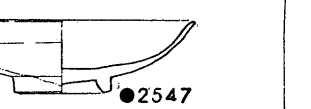
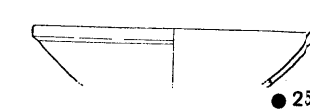
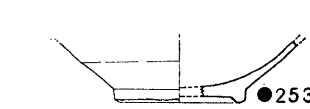
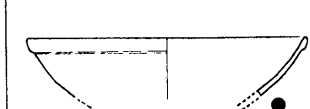
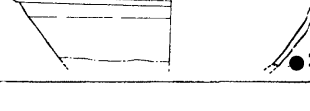
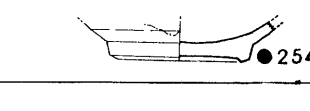
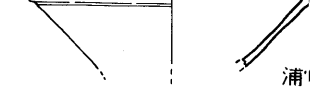
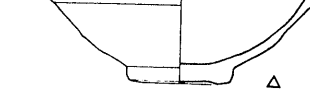
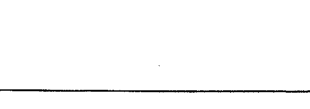
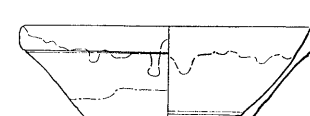
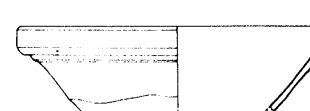
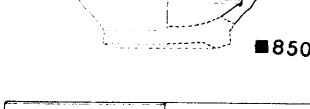
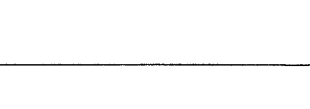
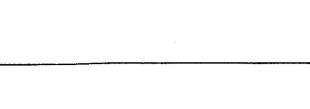
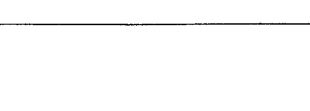
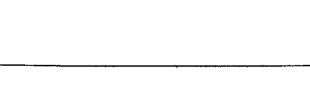
土師器の分類と編年(2)〔¹/₄〕

五 条Ⅰ－3 C	11世紀後半 12世紀初頭	△ 浦城跡 ○ 大宰府第38次調査SD860溝Ⅲ層														
五 条Ⅰ－3 D	12世紀初頭 12世紀前半	△ 大宰府第39次調査SE870井戸 ● 大宰府第38次調査SD860溝Ⅰ・Ⅱ層 □ 大宰府第39－3次調査SK976土坑														
五 条Ⅰ－4	12世紀前半 12世紀中頃	● SD305溝 ▲ SK339土坑 ○ 大宰府第36次調査SE727井戸														
五 条Ⅱ－1	12世紀後半 12世紀終末	● SE401井戸 ● SK312土坑 ▲ SK340土坑 ■ SD604溝 ○ 大宰府第36次調査SE721井戸														
五 条Ⅱ－2	12世紀終末 13世紀前半	● SD401溝 ▲ SK520土坑 ■ SK629土坑														
五 条Ⅱ－3	13世紀前半 13世紀中葉	● SE505井戸 ■ 4次MP27区黒褐色土 △ SK407土坑 ○ 大宰府第38次調査SK835土坑					d 大 杯 e 特大杯									
五 条Ⅱ－4	13世紀後半 13世紀終末	● SK501土坑 ▲ SK424土坑 ■ SD603溝														
五 条Ⅱ－5 A	13世紀終末 14世紀初頭	● SK335土坑 ▲ SK304土坑 ■ SD302溝 ○ 大宰府第38次調査SK823土坑														
五 条Ⅱ－5 B	14世紀初頭 14世紀中頃	● SE516井戸														
五 条Ⅱ－6	14世紀中頃 14世紀後半	● 大宰府第33次調査SK624土坑														

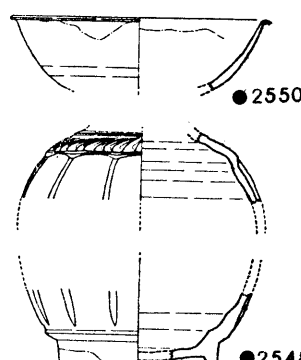
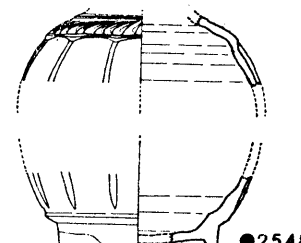
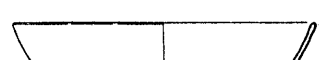
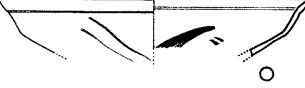
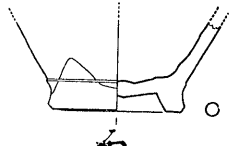
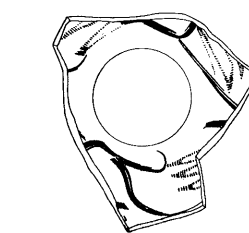
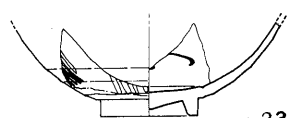
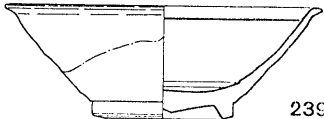
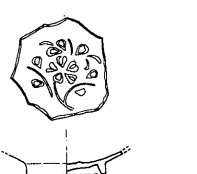
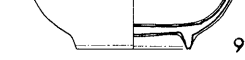
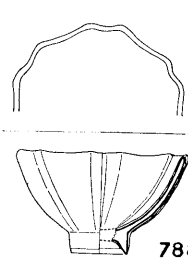
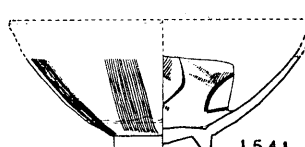
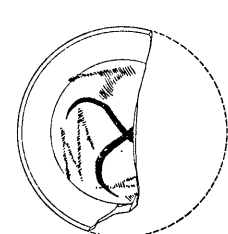
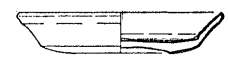
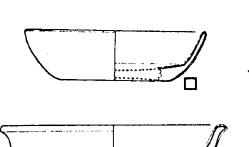
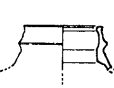
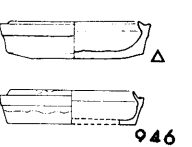
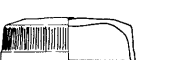
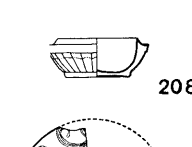
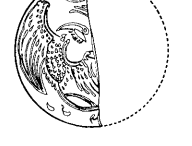
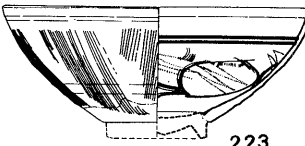
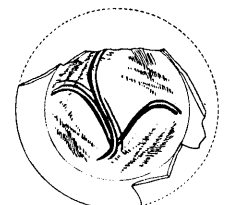
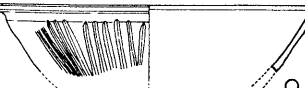
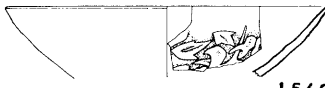
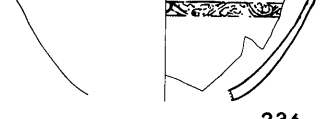
土師器共伴の磁器の分類と編年(1)〔⅓〕

土師器分類	遺構名	A		B		C	D	E		F
五 条Ⅰ-1A以前										
五 条Ⅰ－ 1 A										
五 条Ⅰ－ 1 B										
五 条Ⅰ－ 2 A	○ 大宰府第35次調査 SK 678土坑									
五 条Ⅰ－ 2 B	○ 大宰府第38次調査 SD 865溝 ● 3次MF35区暗灰色粘質土									
五 条Ⅰ－ 2 C										
五 条Ⅰ－ 3 A	○ 大宰府第31次調査暗褐色土層									
五 条Ⅰ－ 3 B	● 6 AYECK内関連遺跡調査 ○ 大宰府第39－ 3 次 SK 994土坑 △ 大宰府第46次 SD 1330溝 ▲ SD 306溝									
五 条Ⅰ－ 3 C	● 浦城跡 ○ 大宰府第37次調査 SE 772井戸									
五 条Ⅰ－ 3 D	○ 大宰府第39－ 3 次調査 SK 976土坑 △ 大宰府第38次調査 SD 860溝 □ 大宰府第38次調査黒色砂質土層									
五 条Ⅰ－ 4	● SD 305溝 ▲ SK 339土坑									
五 条Ⅱ－ 1	● SE 401井戸 ● SK 312土坑 ▲ SD 604溝 ■ 4次暗茶褐色粘質土 ○ 大宰府第36次調査 SE 721井戸 △ 大宰府第36次調査 SE 745井戸									
										
五 条Ⅱ－ 2	● SK 520土坑 ▲ SD 202溝 ■ SD 202溝かぶり土									
五 条Ⅱ－ 3	● 4次MP27区黒褐色土 ▲ SK 317土坑 △ 大宰府第33次調査 SD 605溝 □ 大宰府第38次調査 SK 635土坑									
五 条Ⅱ－ 4	● SD 601溝									
五 条Ⅱ－ 5 A										
五 条Ⅱ－ 5 B										
五 条Ⅱ－ 6										

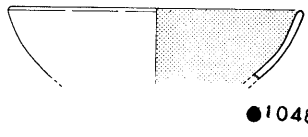
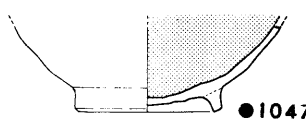
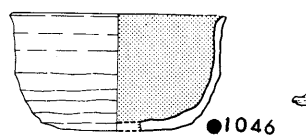
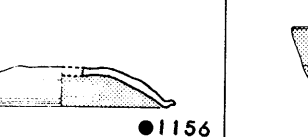
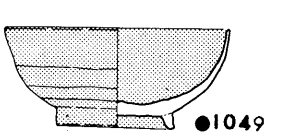
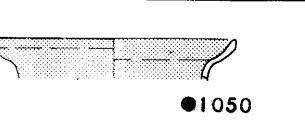
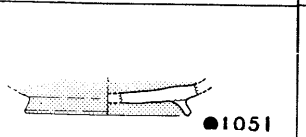
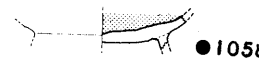
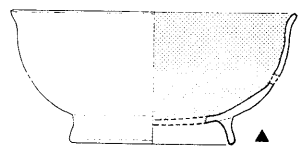
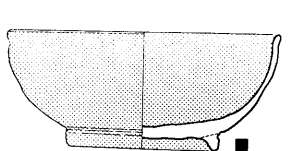
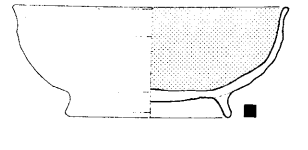
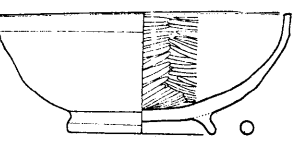
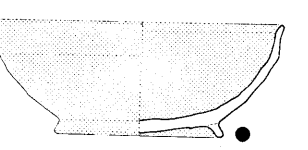
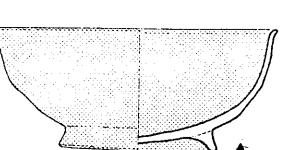
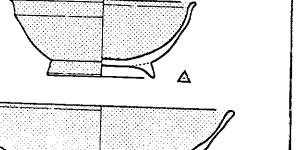
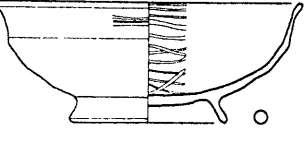
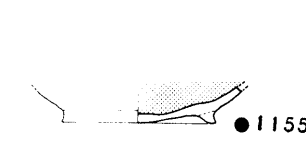
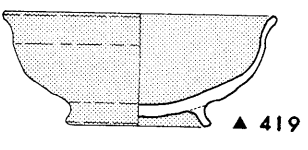
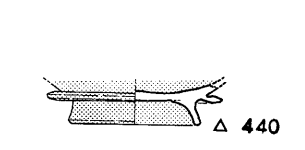
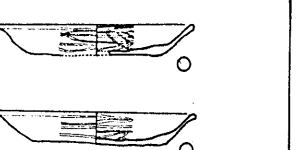
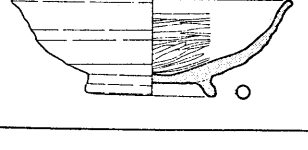
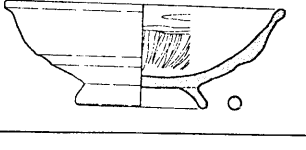
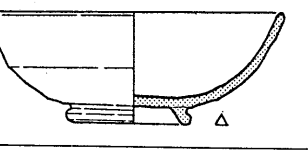
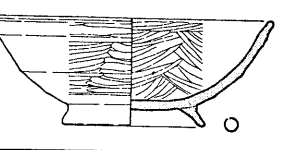
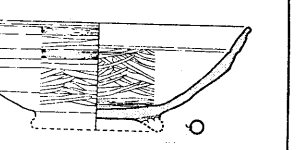
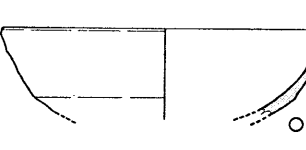
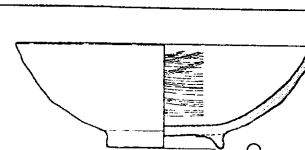
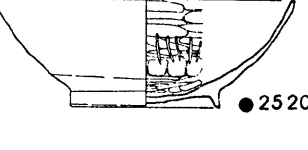
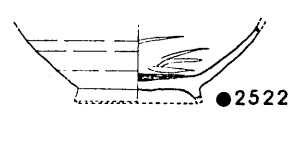
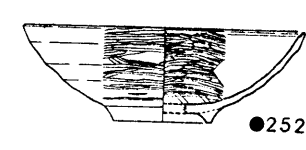
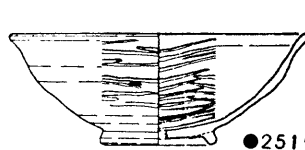
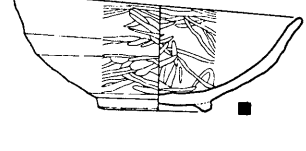
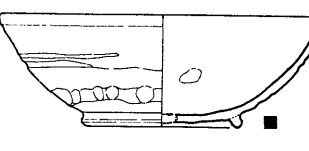
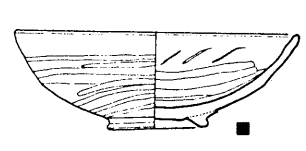
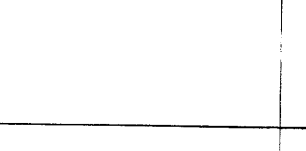
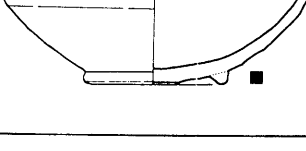
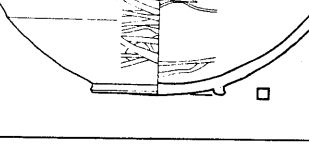
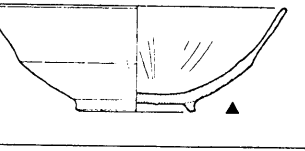
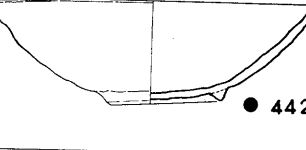
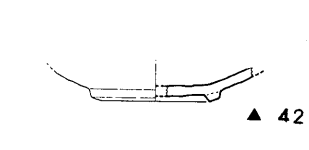
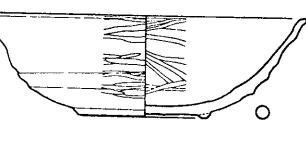
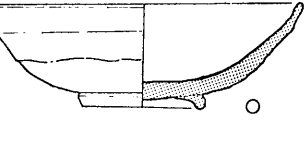
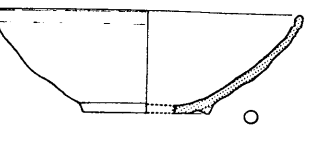
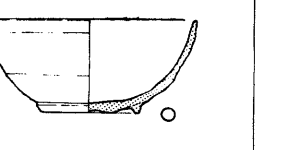
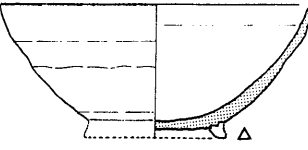
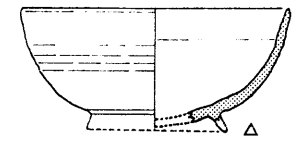
土師器共伴の磁器の分類と編年(2)〔 $\frac{1}{4}$ 〕

G ₁	G ₂	H		I	J	K	L	M			
											
		 ●2534	 ●2536	 ●2541	 ●2542	 ●2543	 ●2527	 ●2528	 ●2547	 ●2539	 ●2564
		 ●2535	 ●2538	 ●2540							
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								
		 ●2537	 ●2540								

土師器共伴の磁器の分類と編年(4)[¹/₄]

T	U		V	W	X	Y	Z
							
					 ●2550  ●2548	 ●2549	 ●2551
					 △  ●  □		 □  △
	 ▲1179		 ○		 ○ ○	 ○  ○	
	  ■2096  ■2095		 ▲2388  2394  2396		 ■2409	 大・8D600  ■2422	
 936  ●938  940	 788  192		 1541   ▲800		 945  □  □	 ○  946  ○  1553  208  ○  1555	 4次 4冊
 190	 223	 ●1543	 大・8B728			 1554  ●1552  ●1556	 1562  236  ●1564

土師器共伴の土器碗類の編年〔Ⅰ/Ⅳ〕

土師器分類	遺構名	内黒土器		黒色土器		瓦器		研磨土器	
五条Ⅰ-1A以前									
五条Ⅰ-1A	● 6次ME13区下層	 ●1048	 ●1047	 ●1046	 ●1156	 ●1049	 ●1050	 ●1051	
五条Ⅰ-1B	● SE614井戸	 ●1058							
五条Ⅰ-2A	● 君畑1号墓 ▲ 君畑3号墓 ■ 君畑18号墓	 ▲		 ■	 ●				
五条Ⅰ-2B	● 君畑10号墓 ▲ 君畑16号墓 ■ 君畑19号墓 ○ 大宰府第38次調査SD865溝 △ 筑前国分寺調査土坑1	 ■	 ○	 ●	 ▲	 ▲			
五条Ⅰ-2C	● SK633土坑 △ SD305溝 ▲ SK339土坑 ○ 大宰府第43次調査SE1083井戸	 ○	 ●1155	 ▲419	 △440	 ○			
五条Ⅰ-3A	○ 大宰府第31次調査 △ 大宰府第36次調査SE725井戸	 ○	 ○	 ▲	 ○	 ○	 ○	 ○	
五条Ⅰ-3B	● 6AYECK内関連遺跡調査 △ 大宰府第38次調査SE855井戸 ○ 大宰府第39-3次調査SK994土坑	 ●2520	 ●2522	 ●2524		 △	 ●2526	 ●2519	
五条Ⅰ-3C	○ 浦城跡 △ 大宰府第37次調査SE772井戸 ■ 大宰府第38次調査SD860溝 □ 大宰府第38次調査黒色砂質土層					 ○	 ■	 ■	 ■
五条Ⅰ-3D	● 大宰府第39-3次調査SK976土坑 ▲ 大宰府第39-1次調査SE870井戸					 ●	 ■	 □	 ▲
五条Ⅰ-4	● SD305溝 ▲ SK339土坑					 ●441	 ●442	 ▲421	
五条Ⅱ-1	● SK312土坑 ○ 大宰府第38次調査SX863墓					 ●552	 ○		
五条Ⅱ-2	● SK520土坑 ○ 大宰府第33次調査SD600溝 △ 大宰府第33次調査SD605溝					 ●59	 ○	 ○	 ○
五条Ⅱ-3						 ▲	 ▲		
五条Ⅱ-4									
五条Ⅱ-5A									
五条Ⅱ-5B									